斬魔大聖
ざんまたいせいデモンベイン
DEUS MACHINA DEMONBANE
軍神強襲
原作：鋼屋ジン（ニトロプラス）
古橋秀之
角川スニーカー文庫

選択の余地はない。
手をこまねいていれば、
人類の未来そのものが
潰えるのだ。
――[ネクロノミコン・機械語写本]
リトル・エイダ

ハッハァ、よく言った!
それじゃ、遠慮なく行かせてもらうぜ
――呪文螺旋(スペル・ヘリクス)!ぶっ飛べ!!
――鬼械神アイオーン

殺すつもりだった。
覇道鋼造――僕の父を。
――覇道兼定
てめえの苦手な
その親父とやらのツラを
拝んでみるのも悪くねえか。
――魔術師エドガー

斬魔大聖デモンベイン

軍神強襲

原作：鋼屋ジン（Nitroplus）

著：古橋秀之

角川スニーカー文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

DEUS MACHINA
DEMONBANE

CONTENTS

プロローグ DUEL IN SPACE 虚空の決闘 007

第一章 MARS ATTACK 火星人襲来 021

第二章 ARKHAM CRISIS 妖都蹂躙 071

第三章 LONG SHOT 反撃の号砲 119

第四章 COSMIC FIGHT 宇宙的闘争 171

エピローグ EDDY IS NO MORE 在り得ざる魔術師 223

あとがき 231

解説 鋼屋ジン 235

CONTENTS

プロローグ　虚空のDUEL IN決闘 SPACE

第一章　火星人MARS 襲来ATTACK

第二章　妖都ARKHAM 蹂躙CRISIS

第三章　反撃のLONG 号砲SHOT

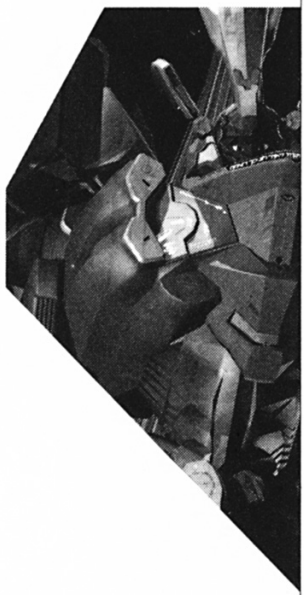
第四章　宇宙的COSMIC 闘争FIGHT

エピローグ　在り得ざEDDY IS る魔術師NO MORE

あとがき

解説　鋼屋ジン

アル・アジフ
世界最強の魔導書【ネクロノミコン】の精霊
エドガー
魔術師。アル・アジフの歴代の主のなかで、もっとも破壊的な男
エイダ
"科学の騎士"にして"ダーレス学園"学園長兼唯一の教師。
リトル・エイダ
覇道鋼造を主とする、【ネクロノミコン】機械語写本
覇道兼定
覇道財閥の御曹司
DEUS MACHINA
DEMONBANE
CHARACTERS



プロローグ

DUEL IN SPACE
虚空の決闘

虚きよ無む―あるいは〝虚きよ夢む〟と言うべきか。

人間の想像力を無限に希き釈しやくし、無そのものに等しくする無量の静せい謐ひつ。

意志と生命の存在を許さぬ、圧あつ倒とう的な無機の空間。

その背後には、幾いく千万の星々が小さな光を灯ともしている。

至近距きよ離りから見るならば、それらのひとつひとつが、生命を創造し、あるいは灼やき滅ほろぼす、神の力の顕けん現げんだ。

だが、恒星ほしの命とて、永遠ではない。宇宙という果てなき虚無は、星々の輝かがやきすらも、やがては闇やみの色に塗ぬり込こめようとする。

光と闇の戦いは、闇の勝利に終わる運命さだめなのか。

……否いな！

〝否〟と叫さけぶその意志が、またひとつ、虚無の中に瞬またたく新たな光芒ほしを創造つくる。

+

煌こう―！

鬼デウ械ス・神マキナデモンベインの脚あしに宿った高密度の呪じゆ力りよく、空間を歪わい曲きよくせしめるその力が、虚こ空くうの只ただ中なかに激げき烈れつな輝きを生み出しつつ、眼前の敵に叩たたきつけられた。

近接粉ふん砕さい呪じゆ法ほう〝アトランティス・ストライク〟。

巨きよ大だいな鉄てつ槌ついと言うべき鋼はがねの脚が、紅くれないの鬼デウ械ス・神マキナ、リベル・レギスの胸板に回し蹴げりの形で打ち込まれた。畏おそるべきエネルギーを帯びた、鋼と鋼の衝しよう突とつ。その余波が空間の波と化して星の海を震ふるわせ、リベル・レギスは後方に大きく吹ふき飛んだ。

だが、その機体に損傷はない。鋭するどい両手の爪つめが空間に突き立てられると、虚空に長い爪つめ痕あとを残しながら、やがて後退の勢いも止まった。並の鬼デウ械ス・神マキナを──いや、小神格の旧支配者さえも破砕する超ちよう常じようの一いち撃げきに、紅の機神は耐たえ切った。超・超常の耐たい久きゆう力と言えた。

体勢を立て直すリベル・レギスの至近に、デモンベインが再び踏ふみ込んだ。脚きやく部ぶの空間歪曲機構を作動し、虚空を踏み締めながら、再び脚を振ふり上げ──

「連続起動！　アトランティス・ストライク・ヴォーテックス!!」

（イエス、マスター）

デモンベインの搭とう乗じよう者、魔術師マギウス覇は道どう鋼こう造ぞうの指示に、魔ま導どう書しよが答えた。

右、左、右、左、そして右──デモンベインの連続回し蹴りが、周囲の空間をも巻き込みながら、竜たつ巻まきのような勢いでリベル・レギスに叩き込まれる。その一撃一撃に、必殺の破は壊かい力が確実に込められている。

「ほう──見事だ」

リベル・レギスの術者、大導師マスターテリオンの〝声〟が、デモンベインの操縦席に流れ込んできた。

「余がこれまでに戦ったデモンベインの中でも、これほど力強い攻せめ手を持つものは希まれだ。心臓を貸した甲斐かいがあったというものだな」

「虚きよ勢せいを張るな、マスターテリオン！」

不可思議な余よ裕ゆうを含ふくむマスターテリオンの口調に対し、覇道の言葉には焦あせりが見える。

かつて、マスターテリオンの目覚めの直前に、覇道鋼造はリベル・レギスの呪力中ちゆう枢すう機関──〝無限の心臓〟を奪だつ取しゆし、デモンベインの機体に組み込んだ。その結果、デモンベインは現在、元来の自前のものと合わせて、ふたつの心臓エンジンを備えている。最大級の攻こう撃げき呪法を立て続けに起動できるのは、その過か剰じようとも言える出力があってのことだ。

また、この決戦の舞ぶ台たいを宇宙に求めたのも覇道自身だ。ここならば、地上の被ひ害がいを気に掛かけることなく、デモンベインの破壊力を存分に振るうことができる。

地の利、時の利を確保し、かつてないほどに──いかなる時の輪においてもあり得なかったほどに、状じよう況きようは有利だ。有利なはずだ。この時をおいてほかに、永遠の宿敵・マスターテリオンを仕留める機会はない。

だが、〝心臓ハート抜きハート〟のリベル・レギスは、デモンベインの巻き起こす破壊の渦うずに巻き込まれながら、平然とその勢いに耐えている。

「感謝に堪たえぬぞ、覇道。老骨に鞭むち打うって、必死で余を楽しませてくれる」

歌うような口調で、マスターテリオンは言った。

「どれ……その意気に応こたえて、ひとつ、余も踊おどってみるとしようか」

「吐ぬかせ！」

デモンベインの脚が、ひときわ激しい光を帯び、リベル・レギスに叩きつけられた。

が──リベル・レギスは一歩後退しながら、デモンベインと同じ動作で脚を振り上げた。鋼の脚と脚が衝突し、デモンベインの回転が強制的に止められた。さらに、リベル・レギスは脚を踏み換かえながらもう一撃、デモンベインに蹴りを見み舞まう。

装そう甲こうの破片をばらまきながら、デモンベインがよろめい

た。

　──馬ば鹿かな……！

　紛まがい物とはいえ鬼デウ械ス・神マキナ。特殊ヒヒイ合金ロカネの装甲に加え、何重もの魔ま術じゆつ的防ぼう御ぎよに鎧よろわれた機体には、通常の攻撃では傷ひとつつけられないはずだ。つまり、リベル・レギスの蹴りには、〝アトランティス・ストライク〟のような強力な攻撃呪法が乗せられていたことになる。

（報告：右みぎ肩けん部ぶ装甲、七〇パーセント破損。腕わん部ぶへの動力伝達、三二パーセントダウン）

「修復しろ」

（イエス、マスター）

　デモンベインは大きく跳とび退すさった。同時に、攻撃呪法に回されていた動力が復元呪じゆ文もんの形で右肩に回され、フィルムの逆回しのように装甲と内部機構を再生する。

　同様に、デモンベインの右手のひらの中に、無から生じるように巨大な回転リボル拳銃バーが現れ、リベル・レギスに向かって立て続けに呪力の弾だん丸がんを放った。

　弧こを描えがいて飛ひ翔しようし、着弾する呪力弾。リベル・レギスはそれを、ひとつ残らず手のひらで受け止め、そして、暗黒の重力弾に変えて投げ返した。

「……ッ!!」

　デモンベインは再びリボルバーを連射。重力弾を空中で打ち消したが、撃うち漏もらした一発が脇わき腹ばらをかすめ、機体の一部をごそりと削そぎ落とす。

（報告：左腹部装甲及および──）

「修復だ」

（イエス、マスター）

　二歩、三歩──デモンベインはさらに大きく後方に跳び、間合いを

取った。両脚の空間歪曲機構を作動しつつ、さらに五歩、十歩と空間を踏みしめ徒かち渡わたるが、しかし、紅の翼つばさを広げて追いすがるリベル・レギスを振り切れない。

　なぜだ。マスターテリオンの超人的な魔力によって顕けん現げんしているとはいえ、本来の動力源を持たない今のリベル・レギスには、デモンベインを傷つけることなど不可能なはずだ。奴やつはいったい、どこからその力を引き出しているのだ……!?

　覇道の懸け念ねんに、魔導書が答えた。

（推論：リベル・レギスはデモンベインの攻撃呪法を変質・反転）

「……そんなことが可能なのか？」

（推論：デモンベインの第二心臓は本来リベル・レギスのものであるため、感染呪術的な魔術回路が構成されている可能性あり）

　リベル・レギスの攻撃力は、デモンベイン自身から発している――では、第二心臓を停止するか？　しかし、限りなく不ふ滅めつに近い〝最強の鬼デウ械ス・神マキナ〟リベル・レギスを、片肺で仕留めきれるものだろうか……？

（マスター、指示を）

「第二心臓を……いや、ここは全力で決める！」

　覇道は言った。

「第一近接昇しよう華か呪法・複式!!」

（イエス、マスター）

　魔導書は主あるじの指示に従い、デモンベインの装備する最大最強の攻撃呪法を展開し始めた。

（ヒラニプラ・システム発動。ナアカル語符ふ号ごう呼出・確かく認にん。術式解かい凍とう。第一近接呪法、封ふう印いん解除。第一心臓、第二心臓、共に出力全開――）

　左右の胸に内蔵された〝銀ぎん鍵けん守護神機関〟が最大速度で回転し、ふたつの〝無限の心臓〟の出力を解放した。

同時に、デモンベインは剣けん指しを形作った両手を頭上に振ふり上げ、振り下ろした。デモンベインの背後に、五ご芒ぼう星せい形の破邪エルダーの印形・サインが浮うかび上がる。

ヴォオオオオ──!!

デモンベインが吼ほえた。設計限界の倍近い負荷を受けた全身の魔導機が、至るところで弾はじけ飛んだ。

「レムリア・デュアル・インパクト!!」

左胸から右みぎ腕うでへ、右胸から左腕へ。光る血管のような魔力の流れが誘ゆう導どうされ、両の手のひらに集中する。火花と破片を体中からまき散らしながら、デモンベインは輝かがやく両手でリベル・レギスにつかみかかった。

リベル・レギスはその攻こう撃げきを半身にかわしながら、デモンベインの左手のひらを、右手で受け止めた。即そく座ざに叩たたきつけられるはずの〝レムリア・インパクト〟の無限熱量が、生の魔力の形で紅くれないの腕に引き込まれ、反転させられる。

デモンベインの手のひらが瞬しゅん時じに凍とう結けつし、粉々に砕くだけ散った。リベル・レギスはさらに指先を揃そろえた右手をえぐるように突つき込む。絶対零れい度どの手刀〝ハイパーボリア・ゼロドライブ〟。単なる超ちよう低温ではない、負の無限熱量を帯びた右手が、デモンベインの左前ぜん腕わんを砕き、さらに肘ひじ、上腕、肩かたを砕き昇り、左胸の〝第一心臓〟へ──

その寸前、デモンベインはさらに大きく踏ふみ込みながら、右手のひらをリベル・レギスの胸の中央に打ち当てた。手のひらを中心に結界面が広がり、リベル・レギスの全身を球状に包み込む。左腕を囮おとりにして、〝レムリア・インパクト〟を完かん璧ぺきに決めた形だ。

光射す世界に

汝なんじら闇あん黒こく

棲すまう場所なし──

　覇道の口こう訣けつによって呪法が完成しようとした、その時。

　卵の殻からが内側から割れるように、紅の手刀が結界を突き破った。その手には今なお、〝レムリア・インパクト〟と同様の呪力が宿っている。

　わずかなひびを割り広げながら、リベル・レギスの上半身が結界から抜ぬけ出した。

　だが、それも覇道の計算のうちだ。

　ゴッ―!!

　デモンベインが全身で打うち当たり、リベル・レギスを自分ごと結界の中に押し戻もどした。

　もろともに、消しよう滅めつする態勢だ。

「覇道―!?」

「この老いぼれが、今さら命を惜おしむと思ったか!?」

　組み合った二体の鋼はがねの巨きょ人じんを、球状の結界が急速に包み込んでいく。

「今日、この時を以もつて、我々の戦いは終わる！　俺と共に逝ゆけ、マスターテリオン!!」

　―ふと、結界の隙すき間まから、覇道鋼造の目に、禍まが々まがしい赤い色をした惑わく星せいが見えた。

　火星―

　地球の衛星軌き道どう付近で戦っていたはずが、いつの間にかこんなところまで来てしまっていたのか。

　それでよい。

　自分とマスターテリオンの宿命的な戦いは、あの赤い死の星のみに見取られ、人知れず終結するのだ。それが相応ふさわしい。

　ほんの一いつ瞬しゆん、覇道がそう思った時──

「ははは、やるな、覇道！　これほどまでとは！」

　異次元の劫ごう火かに機体ごと灼やかれながら、マスターテリオンが哄こう笑しようした。

「汝の決意のほどに免めんじて、このまま相打ちに果ててやりたいところだが──ふむ、馴なれ合いは遊技の興を殺そぐというものか」

　リベル・レギスは右手を持ち上げた。その指先に、溶とけた装そう甲こうの表面が、ひと筋の血のように流れ込んだ。指を弾くと、鋭するどい爪つめの先から血の玉のような滴しずくが飛んだ。高熱を帯びた、紅あかい溶よう岩がんの滴だ。

　紅い滴は狭せばまりつつある結界の隙間をすり抜け、宇宙空間へと飛んでいく。

「なんだ!?」

（報告：射出された物体を追つい跡せき──時間転移。過去方向に進行中）

「過去……だと？」

（報告：軌道逆算の結果、射出体は約二万年前の火星表面に到とう着ちやく）

　──ギュオン──

　覇道の目の前で、一瞬、火星の像が歪ゆがみ、そして変質した。

　赤い砂さ漠ばくに覆おおわれた死の星から──表面に無数の直線上の筋を彫ほられ、禍々しい生命の気配に満ちた星へと。

　リベル・レギスの落とした血の一滴が、今、この瞬間、ひとつの惑星の歴史を変えたのだ。

「──あの星になにをした、マスターテリオン!?」

「ふふ……さて、汝の決意が報むくわれるか否いなか。ひとつ、賭かけてみようではないか」

「くッ!!」

　覇道は魔ま導どう書しよに叫さけんだ。

「電信装置！　地球に──」

　〇・五秒後、〝レムリア・インパクト〟の結界は完全に閉じ、その内部に異次元の超エネルギーが解放された。死と消滅の閃せん光こうが、結界球を太陽のように輝かせた。

+

　漆しつ黒こくの宇宙に、またひとつ新しい太陽ほしが生まれたそのさまを、厭いとわしき嘲ちよう笑しようと共に見つめるものがあった。剣けん奴どの試合を楽しむ観客のように、あるいは二匹ひきの蟻ありの争いを見つめる子供のように──二体の鬼デウ械ス・神マキナの超神的激げき突とつを、それは邪じや悪あくな興味を以て観察していたのだ。

　それは、盲もう目もくにして無む貌ぼう、混こん沌とんとして這はい寄り、魂たましいを喰くらうもの。王たる王の使者。夜に吠ほえ、闇やみに棲む、燃える三眼──いや、たとえ百万言を費ついやしたとしても、その存在のひとかけらすら表すことはできないだろう。変へん幻げん自在の性格ペルソナと不変の悪意こそが、その本質なのだ。

　そう、それはそれ自身の計り知れぬ意志と便べん宜ぎによってさまざまな形態を取る。人たるに相応しき時には人に、獣けものたるに相応しき時には獣に、怪かい物ぶつたるに相応しき時には怪物に──

　だが、現在。観測する者とてない虚こ空くうの只ただ中なかにあって、それに相応しい姿とは、はたして如何いかに。今、この瞬間のそれを形容する言葉は人間の語ご彙いにはなく、ただ宇宙的形態としか言いようがない。

　それはマスターテリオンと覇道鋼造の打った、それぞれの最後の一手とその波は及きゆう効果を、人じん智ちを超こえた感覚によっ

て正確に捉とらえていた。

　火星の表面には、リベル・レギスの血から生まれた奉仕種族が急速に蔓延はびこりつつあった。

　また、覇道の放ったひと束の電信情報が、光の速さで地球に向かいつつあった。

　それらは、結界に捕とらわれたふたりの超ちよう人じんの、最後の賭けだった。

　どちらが早く、その思おも惑わくを達成するか。それはまだ、分からない。

（―おや、これは面おも白しろい）

　それの中に、人間的な興味が芽生え、人間的な思考を形作った。

（世界の命運をも賭けた、一世一代の大勝負。ひとつ、私も乗せてもらおうか）

　名状しがたき、巨きよ大だいな宇宙的存在の体から、細い、長い、黒い腕うでが生えて出た。また、別の一いつ箇か所しよには、人間のような薄うすい唇くちびるが生じた。

「……Ny…a,r……」

　薄い唇が人間の言こと霊だまを発し、いくつもの指輪をした黒い指が複雑な印を結んだ。

　ナイアルラトホテップ！

　ナイアルラトホテップ！

　ナイアルラトホテップ、アイ、アイ!!

　我は我が名を三たび呼び、

　人の世に我が意志を果たしめん、アイ!!

それは、自らの存在を〝ナイアルラトホテップ〟と定義し、人間の認にん知ちしうる位相に自ら招喚した。その立場は、それにとって好ましき状態であった。なぜならば、人間の認識しうる次元に行動することは、それが存在のうちに孕はらむ人間的悪意を、最も効果的に表現しうる状態であったから。

暗黒の王フアラオナイアルラトホテップは、狂きよう気きの哄こう笑しようを放ちながら、人間の世界へと飛び去り、後に残された激げき烈れつな光を放つ結界球──〝レムリア・インパクト〟の名な残ごりは、急速に収縮し、そして、消えた。

「──ハははハはハハハははははははハははははハはハははハハハハハはハハハハ……!!」

最後に残ったのは、虚きよ無むの空間と、哄笑の残ざん響きようのみであった。

第一章 MARS ATTACK 火星人襲来

一九〇×年。

新世紀を迎むかえ、世界は大きく変化しつつあった。

アメリカの一都市アーカムシティに始まる〝覇道鋼造の世界革命〟は今や完成し、その影えい響きようは物理的に、また文化的にも、文字通り地球全土を覆おおい尽つくしている。

世界中の都市を結ぶ通信・輸ゆ送そう網もう。何百という科学上の発明・発見。それに、政治的、経済的、文化的な無数の改革。

人々の生活は変わり、意識も変わった。

前時代的な迷信の闇やみを吹ふき払はらう、理性の時代。

人類には今や、万ばん物ぶつの霊れい長ちようとしての無限の前進が約束されていると、皆みなが信じていた。

だが……瘴しよう気きを孕む名状しがたき影かげは、理性の光の届かぬ暗がりに、ますます色いろ濃こくわだかまっている。

今こん日にちの人類の繁はん栄えいが、砂上の楼ろう閣かくの如ごとく頼たよりない安定の上に築かれていることを知る者は少なく、それを支えるため、闇の世界に踏ふみ込んで戦う者はさらに少ない。

だが、しかし。

「少ない」ということは、「無ではない」ということだ。

希望の光を背負って闇にあらがう者は、わずかながら、確かに存在した。

人知れぬ秘境に、また、アーカムシティを始めとする世界各地の大都市に。

そして、ここロンドンにも──

+

霧きりの夜を、〝跳はねる影〟の噂うわさが支配していた。

それは黒いマントを身に着けた長身の男で、目は赤く輝かがやき、鼻は鳥の嘴くちばしのように尖とがり、口からは地じ獄ごくの炎ほのおを吐はくという。そして、街灯よりも高く跳とび上がっては夜道を行く女性に躍おどり掛かかり、鋭するどい爪つめで全身の肌はだを切り裂さくのだ。

人呼んで〝跳ちよう梁りようせし恐きよう怖ふ〟、〝嘲あざ笑わらう悪あく魔ま〟。またの名を──

「──〝ジャンピング・ジャック〟……!!」

若い女の叫さけびが、石いし畳だたみの街路に響ひびき渡わたった。

眼鏡めがねを掛け日ひ傘がさを携たずさえた令れい嬢じようの前に、大きな黒い影が立ちふさがり、マントを蝙こう蝠もりの翼つばさのように広げた。

「キャーッハッハッハッハ！」

怪かい人じんの口から、奇き怪かいな鳥のような笑い声と共に、硫い黄おう臭しゆうと青白い炎が噴ふき出した。

眼鏡の女は身を翻ひるがえし、怪人から逃のがれようとした。だが、怪人ジャンピング・ジャックはその名の通り異常な跳ちよう躍やく力を発揮し、女の頭上を軽々と飛とび越えると、その行く手をさえぎる形で着地した。

「キャーッハッハ！」

怪人は両手を胸の前に構えると、鉤かぎ爪づめをカチカチと鳴らす。

女は手にした傘の先せん端たんを怪人に向けて構えた。しかし、怪人は片眼鏡モノクルの奥の目を赤く光らせながら、前に踏み出してくる。

バン──ッ！

女の傘が発条ばね仕じ掛かけで勢いよく開き、一いつ瞬しゆん、怪人の視界をふさいだ。

「キァッ！」

怪人は鋭い爪のひと薙なぎで、傘を切り裂いた。しかし、その隙すきに逃にげ出したのだろう。女の姿はすでになく、足音が傍かたわらの路地の奥へと遠のいていく。

怪人はマントをはためかせながら、女を追って路地に飛び込んだ。

路地の中は暗く、視界が利きかない。袋ふくろ小こう路じとおぼしきその最さい奥おうへ怪人が踏み込んでいくと、

ガシャ、ガシャッ──ブゥゥン──

闇の中にかすかな機械音が生じ、そして突とつ然ぜん、ガス灯の何倍もの強さの、まばゆい光が怪人に叩たたきつけられた。

巨きよ大だいな怪物の双そう眸ぼうを思わせるふたつのアーク灯。それを背負っているのは、潜せん水すい服に似た、ずんぐりとした人ひと影かげだ。

『暗いと不平を言うよりも～～っ！　科学の灯あかりをつけましょお～～っ！』

割われ鐘がねのようなスピーカーの音が、大音量で口上を告げた。

『我は〝科学の騎き士し〟なりィ～～』

そう名乗ったのが、今しがた日傘を投げて逃げ出した令嬢であることに、怪人は気づいただろうか。

自らを囮おとりとして怪人を引きつけ、路地の奥に用意した電

モー動タ－・服スーツを素す早ばやく着用した彼女こそは、〝科学の騎士〟ことオーガスタ・エイダ・ダーレスその人であった。

『ロンドンの夜を騒さわがす怪人ジャンピング・ジャック！　神しん妙みようにお縄なわにつきなさい！』

　エイダが手にした長い竿さおを構えると、先端の電極が放電した。

「キィッ！」

　追う者と追われる者の立場が入れ替わり、怪人ジャックは身を翻すと、路地の出口に向けて跳躍した。

『逃がしませんっ!!』

　エイダは電モー動タ－・服スーツのブーツの足裏に仕掛けられた跳躍装置を作動させた。強力な発条ばねが、空中の怪人ジャックをさらに超こえる高さにエイダの体を打ち上げ、そして──傍らの建物から張り出したテラスの底面に、電モー動タ－・服スーツの頭を打ち当てた。

『ふぎゃッ!?』

　ガシャリと音を立てて路面に転がるエイダを捨て置き、怪人ジャックは通りへと飛び出していく。

『先生、どうしたの？　だいじょうぶ？』

　電モー動タ－・服スーツのヘルメットに仕掛けられた小型スピーカーから、子供の声が聞こえてきた。

『ふぐ……も、問題ありません！』

　エイダはスピーカーの声に答えた。

『ヘルメットの強度は充じゆう分ぶん──ただし、緩かん衝しよう機構に若じやつ干かん改良の余地があるようです』

『頭をぶつけたんだ！』

　スピーカーの向こうで、何人かの子供たちの笑い声が聞こえた。

『お静かに！』

　エイダはぴしゃりと言った。

『怪人はそちらへ向かっています！　準備はいいですか!?』

『──了りよう解かいです、先生』

『いつでもＯＫだぜ！』

　子供たちの声を聞きながら、エイダは電モー動ター・服スーツと共に路地に隠かくしてあった電モー動ター自・サ転イク車ルに飛び乗った。電でん撃げき槍そうを右脇わきに抱かかえ、左手でハンドルを握にぎる姿は、なるほど、馬上トーナ槍試合メントの騎士を思わせる。

　電モー動ター自・サ転イク車ルは蜂はちの羽音のような音を立てて急発進し、マントをはためかせながら走る怪人ジャックの背にみるみる追いついていく。

　と──怪人ジャックの走り方が変わった。超ちよう人じん的な跳躍力を水平に近く発揮し、水面を跳はねる石のように、あるいは三段跳とびの選手のように、一歩ごとに低く、大きく進む。

　怪人は再びエイダを引き離はなすと、川かわ縁べりの柵さくを飛び越こえ、テムズ川の上空に飛び出した。川かわ幅はばは蒸気船が通れるほどで、怪人の跳躍力を以もつてしても飛び越えることはできないだろう。

　だが、怪人ジャックはマントを翼つばさのように広げると、猛もう禽きんの如ごとく滑かつ空くうした。空中をすべるように移動し、このまま対岸に渡わたってしまえば、もはやエイダの手は及およばない。

　しかし、その時。

　テムズの川かわ面もが大きく盛り上がった。滝たきのように河水を振ふり落としながら現れたのは、蒸気船を思わせる巨大な鋼鉄製の構造物だ。

　塔とうのような煙えん突とつから黒こく煙えんを吐はき、体中の歯車とクランクを軋きしらせながら浮ふ上じようしたそれは、人間

の腕うでを模した長い機械腕アームを、怪人ジャックに向けて伸のばした。

「キッ!?」

　水をしたたらせて迫せまり来る、その指先につかまる寸前、怪人はマントを操あやつって空中で姿勢を変え、鋼鉄の手のひらを蹴けった。羽虫を捕つかまえるように素早く握られた機械の手は、しかし空むなしく宙をつかみ、怪人は元来た方向へと滑空していく。

『あっ、くそ！』

『前進、前進！』

　巨きょ大だいな鉄てつ塊かいは両腕で水を掻かきながら川を渡り、河岸に手をついて陸地に乗り上がった。人間の上半身と蒸気船を組み合わせたような印象の機体上部に対し、下部は無限キヤタ軌道ビラによって地上を走行する仕組みになっていた。

　科学の天才、オーガスタ・エイダ・ダーレスの設計になる万能自走蒸気機関〝ゴリアテ〟の全ぜん貌ぼうである。

　ゴリアテは騒そうぞうしい機関音を立てながら川縁の街路を疾しつ走そうし始めた。石いし畳だたみを無限軌道で粉々に押し割り、ぶつかった建物を次々と半はん壊かいさせながら、恐おそろしい勢いで怪人ジャックに迫る。

　だが、最後の一手──機械腕アームによる捕ほ獲かくはなかなか上手うまく行かず、二度、三度とつかみかかる機械の手を、怪人はひらりひらりとかわして飛ぶ。

『へたくそだなあ、もう！』

『うるせえな！』

　言い争う子供たちの声に、もうひとり、子供の声がかぶった。

『前、前！』

『『わあっ……！』』

　進路を誤ったゴリアテは、川縁から再びテムズ川に転げ落ちた。

『もう、なにやってんだよ！』

『逃にがしちゃったじゃんか！』

　再び言い争いを始める子供たちに、

『いいえ、よくできましたよ、あなたたち！』

　と、エイダが言った。

　怪人ジャックの追い込まれた先に、エイダの電モー動タ一自・サ転イク車ルが滑すべり込み、そして急制動ブレーキを掛かけた。

　前のめりになった電モー動タ一自・サ転イク車ルから、エイダは振り落とされた。いや──あえて乱暴に着地し、そこから両りよう脚あしの発条ばね仕掛けで勢いよく跳び上がった。

　滑空と跳躍、ふたつの軌き跡せきが空中で交こう錯さくする瞬しゆん間かん、エイダの電撃槍が怪人ジャックのマントに叩たたきつけられた。

『えいっ！』

「ギェッ!!」

　空中で力を失い、失速する怪人を、エイダの腕が抱えた。

　そして、もう片方の手で胸むな元もとのひもを引くと、電モー動タ一・服スーツの背はい嚢のうから飛び出した気球が急激にふくれ、その浮ふ力りよくでエイダと怪人を軟なん着ちやく陸りくさせた。

　気球のガスを抜ぬいて切り離しつつ、エイダはぐったりとした怪人を街路に横たえた。

　ロンドンの生きた怪かい談だんたる〝ジャンピング・ジャック〟の正体は、地じ獄ごくの悪あく魔まとも、サーカスから逃げ出したカンガルーとも、（エイダ自身がそうしているように）発条ばね仕掛けのブーツを履はいた、悪戯いたずら者の紳しん士しであるとも噂うわさされている。

　どうやらカンガルーの線はなさそうだが……強力なアーク灯に照

らされたその顔は、人とも魔物とも思える異相であった。

　人であるならば警察に引き渡し、はたまた、ここ数年急激に増えている怪生物の類たぐいならば、覇道財ざい閥ばつ指揮下のミスカトニック大学特とく殊しゆ資料室に連れん絡らくを取って、収容の手はずを整えねばならない。

　まずは怪人の跳躍力の源である脚きやく部ぶを検分しようと、エイダがジャックのマントに手を掛けた時、水中から再び浮上したゴリアテがエイダの傍かたわらの川縁に手を伸ばした。

　次いで、巨大な本体の肩かたのあたりにあるハッチが開くと、中からいくつもの子供の顔がのぞき、そのうちふたりの少年が機械腕アームを伝ってエイダの傍らに駆かけ寄った。

「先生、捕まえた？」

「どんな奴やつだった!?」

「それは今から確かく認にんするところです」

　子供たちに答えながら、エイダは襟えり元もとのロックを外し、ヘルメットを背後にはね上げた。

　その時──怪人が突とつ然ぜん上体を起こし、エイダの顔に青白い炎ほのおを噴ふきつけた。

「きゃっ!?」

　とっさに腕うでで顔をかばったものの、一瞬視界が奪うばわれ、その隙すきに怪人ジャックはエイダの前から逃げ出した。

　鋭するどい鉤かぎ爪づめを一いつ杯ぱいに広げ、駆けていくその先には、ふたりの少年が──

「オルソン！　バート！」

「うわあ!?」

「ひゃあっ!?」

　──ヒュン──

風を切る音と共に怪人ジャックの体をなにかが通り抜け、次いで、その胴どう体たいがずるりとずれた。

すさまじい切れ味を持つ刃やいばが、怪人ジャックの体を通過したのだ。

怪人ジャンピング・ジャックの下半身は、両脚に力を込めると、高々と最後の跳ちよう躍やくをした。そして、上半身はその場に残され、だるま落としのようにベシャリと路面に落ちた。

眼鏡めがねから煤すすを落として歩み寄るエイダの目の前で、怪人の死体が異様な変形を遂とげた。

片眼鏡モノクルを掛けていた顔は鳥類を思わせる異形に、マントと思われた〝布〟は、細い腕と一体化した皮ひ翼よくに。

怪人とも怪かい鳥ちようともつかぬ怪生物。それが怪人ジャンピング・ジャックの正体だった。

しかし、エイダの注意はすでに怪物から逸それ、怪物を斃たおしたものに向けられていた。

怪人ジャックを両断したそれ。魔ま術じゆつ的な光の尾おを引き、ブーメランのように回転しながら、主の手に舞まい戻もどるそれは―

「バルザイの偃月刀……!!」

「―え、なに？」

少年たちはエイダの視線の先を追って夜空を見上げ、そして息を呑のんだ。

長大な湾わん曲きよくした刀―バルザイの偃えん月げつ刀とうを片手に提さげ、怪人ジャックよりさらに大きな翼を広げて空中に静止する、黒衣の男。

「なんだ、あいつ!?」

「誰だれ？　先生、知ってる人？」

……そう、見み紛まがうはずもない。エイダはその男を知ってい

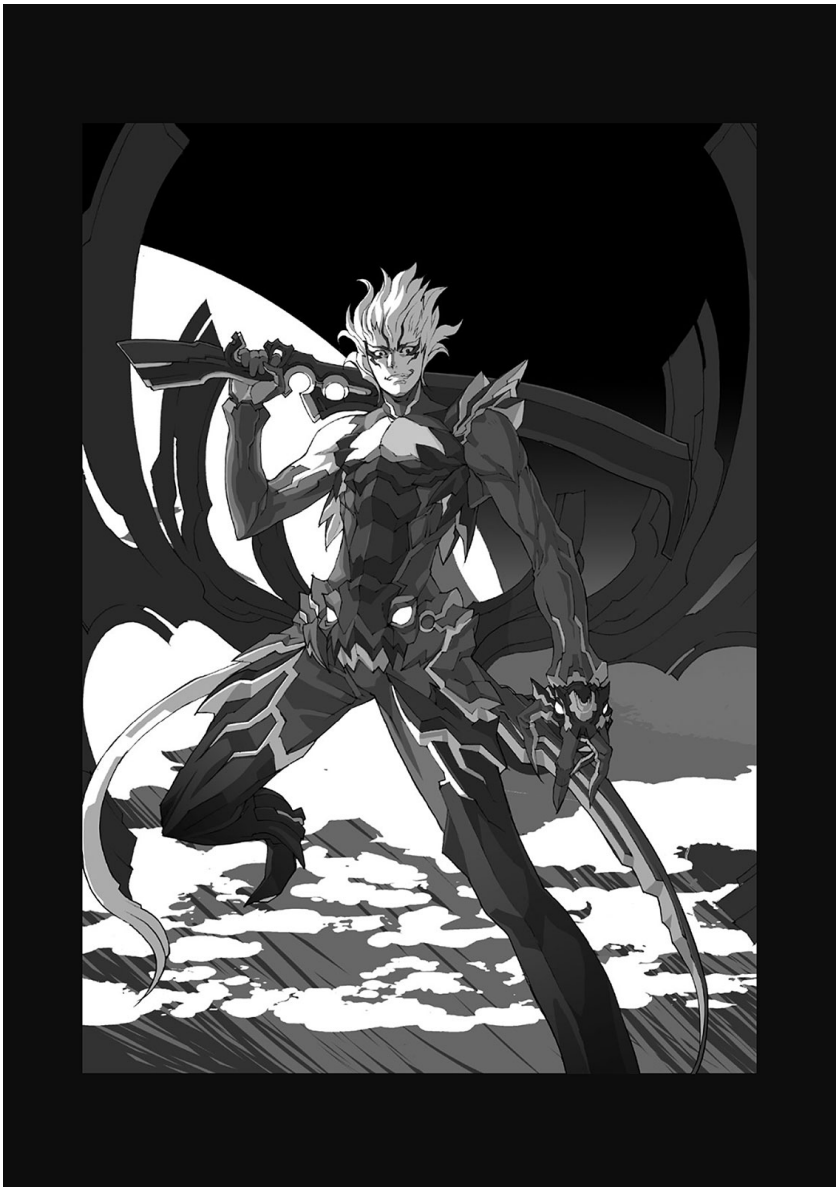
た。

正確にはその男が持つであろう称号を知っていた。

魔ま刃じんの使い手──

地上最強の魔術師マギウス──

「──〝死マス霊ター・秘オブ・法ネクロのノミ主コン〟……!?」



黒衣の男は、恐おそろしく皮肉な表情で嗤わらった。

「油断したな、え？」

その声は、エイダの知る〝マスター・オブ・ネクロノミコン〟のものより若く、そして野や卑ひな響ひびきを帯びていた。

「捕つかまえたら、すぐに殺せ」

「そういうわけにはいきません」

　エイダは気き丈じように背筋を伸のばし、黒衣の男を見上げた。

「一見怪あやしいものであっても、その正体を見み極きわめずして排はい除じよしようとするのは迷信的行こう為いというものです」

「ヒャハハ、迷信けっこう！　化け物鳥に目玉をつつかれるよりはな！」

「ではお聞きしますが、そういうあなた自身は、問答無用で捕とらえられ、殺されてもいいというのですか」

「そうだぞ、おまえなんか、怪しさじゃさっきのとどっこいだ！」

　助け船のつもりか少年のひとりが囃はやし立てるのを、エイダは左手の仕草で制し、右手に握にぎった電でん撃げき槍そうを黒衣の男に向けて構えた。

　だが、

「捕まらねえし、殺されねえよ。俺は殺す側だ」

　そう言って、黒衣の男は薄うすい笑えみを浮うかべるばかりだ。

「もしあなたが魔術を能よくする者ならば、その能力は正しき目的のために振ふるわれねばなりません。覇道財ざい閥ばつと連れん絡らくを取りますので、同行を願います」

「興味はねえな」

「それでは、お望み通り、問答無用……ということになりますが」

　エイダが言うと、黒衣の男の顔に、殺気とも嘲ちよう笑しようともつかぬ表情が疾はしった。

「言ったろう、俺は捕まらねえ！」

　黒衣の男は右手のひと振りに加え、左手でもうひと振りの偃月刀を空中から抜ぬき出すと、左右の腕うでを大きく広げて構えた。右手の魔刃は灼やけたように赤く、左手の魔刃は凍こおりついたよう

に青白く、燃焼と凍とう結けつの魔ま力りよくが込こめられる。

　次いで、黒衣の男は両腕を交差させるように、二本の魔刃を投げ放った。

　先ほどの数倍の速度で回転し、何重もの弧こを描えがきながら、赤と青の魔刃はエイダと少年たちの周囲を飛び回った。その軌き道どう上にあるものは、街灯も、石造りの建物も、ゴリアテの機械腕アームの一部ですらも、まるで空気のように切断される。無論、人間の体を両断することなど造作もない。

　エイダたちが一歩も動けずに魔刃の動きを目で追っていると、やがて、ふたつの魔刃は左右から彼女らに迫せまり、目の前で衝しょう突とつした。

　ジュバッ──!!

　灼けた鉄てつ塊かいと氷の塊かたまりを打ち合わせたような爆ばく発はつと共に、真っ白な煙けむりが空中に発生し、エイダたちの視界を奪うばった。

　数秒後、白はく煙えんが風に吹ふき払はらわれた時には、すでに男の姿はなかった。

「──ヒャハハハハ！　俺は捕まらねえ！　捕まらねえよ！」

　嘲あざ笑わらう声のみを霧きりの夜空に残し、黒衣の男が消えると、周囲の空間を圧あつ迫ぱくしていた異様な緊きん張ちよう感かんもまた、消えた。

　ふたりの少年──オルソンとバートは大きく息をついた。

　エイダは黒衣の男が去った空を、険しい顔で見上げ続けていた。

+

　覇道鋼造はその世界制せい覇は──いわゆる〝覇道革命〟を為なしたのち、経済と科学の発展に加え、世界的な福ふく祉し環かん境き

ようの整備に努め始めた。いくつもの基金を設立・運営し、また、多くの国家の政策に大小の形で干かん渉しようすることによって、児童、病人、貧者など弱者の救済に力を注ぎ──

　当初、それは売名行為として受け取られた。成り上がりが社会的な権けん威いを得ようとする、お定まりの行動であると。しかし、おざなりな、名ばかりの活動ではなく、他の事業を推進するのと同様の、いやそれ以上の精力と的確さを以もつて進められる各種事業によって、世界的な市民生活の水準の底上げが為されつつあることが実感されると、そうした批判意見は、やがて影かげをひそめた。

「世界はもっと豊かになり、力を蓄たくわえる必要がある」とは、覇道鋼造の言葉である。

　それがなんのために必要とされるのかを、彼が語ることはなかったが──ともあれ、ロンドン郊こう外がいに敷しき地ちを構えるその学校も、覇道の福祉活動の一環として運営されていた。

「先生、おはよう！」

「先生、おはようございます」

「おはよ、先生！」

　下は三歳から上は十二歳まで、さまざまな年とし頃ごろの子供たちが、廊ろう下かを歩く若い女教師を追い越こしていく。

「はい、皆みなさん、おはよう」

　女教師は生徒のひとりひとりにうなずきながら、教室に入ろうとした。

　が──

「せんせぇ、ラムジーがおねしょした！」

　と、背後から大声で呼び止められた。

　ここ〝ミスカトニック大学ロンドン校付属学園〟──またの名を、学園長兼けん唯ゆい一いつの教師を勤める弱じやつ冠かん二十余歳のオ女、オーガスタ・エイダ・ダーレスの名を取って、単に〝ダーレス学園〟と呼ばれる──は、学校と言うよりは孤こ児じ院いんの趣

おもむきを呈ていしている。

　総勢三十名の生徒は皆、ロンドン出身の身寄りのない子供たちだ。

　この状じよう況きようをして「その学園とやらでは、家族にも国家にも帰属意識を持たない孤児たちを集め、覇道財閥にのみ忠誠を誓ちかう財閥の次世代幹部としての英才教育を施ほどこしているのだ」という噂うわさが立ったこともあるが……その現場を実際に見れば、ここがそうした〝エリート養成校〟というより〝動物園〟に近い施し設せつであることは、一目瞭りよう然ぜんだ。

　最年少生徒のラムジーの下着を替かえさせ、シーツを洗せん濯たくに出し、エイダが教室に入ったときには、生徒たちは追い駆けっこをし、ほうきとちりとりでチャンバラをし、紙飛行機を競きそって飛ばしていた。

「皆さん、お静かに！　授業はもう始まっていますよ！」

　エイダは教きよう鞭べんでノートを叩たたいて注意を促うながすが、その音も子供たちの甲かん高だかい叫きよう声せいの中に埋うもれてしまう。

「お静かに！」

　実のところ、この学園の生徒は他校では扱あつかえないであろう問題児ばかりだ。彼らは皆、この学園に来た当初は、教育どころか一いつ般ぱん的な躾しつけすら受けたことのない、都市に住む野生児とでも言うべき存在だった。

　しかし、教育の理想に燃える若き学園長、オーガスタ・エイダ・ダーレスの辞書には、諦てい念ねんや後こう悔かい、その他いくつかの陰いん性せいの単語が欠けていた。彼女の信念によれば、人は自覚と訓練によって人となるのであって、その初期過程において動物に近い存在であるのは、むしろ当然のことなのだった。

　教室の様子に取り乱すことなく、エイダは懐ふところから懐かい中ちゆう時計を取り出し、つまみをひねった。すると、教室中に大きなベルの音が響ひびき渡わたり、生徒たちは跳とび上がって各おのの々おのの席に着いた。

　最後までほうきを振ふり回していた年長の生徒を、エイダは威い

厳げんを以てにらみつけた。

「オルソン！　私の不在中の教室は、あなたたち級長にまかせてあるはずです。そのあなたが率先して騒さわいでいるのでは、お話になりませんね」

　舌を出して席に着こうとするオルソンに、

「馬ば鹿かだなあ、もう」

　と、眼鏡めがねを掛かけた少年がぼそりと言った。ダーレス学園のもうひとりの級長、バートだ。

「なんだと！」

　オルソンがバートにつかみかかると、エイダが教鞭を鳴らした。

「早く着席なさい。仲良くしないと、ふたりともお尻しりを叩きますよ！」

　オルソンはあわてて席に着いたが、途と中ちゆうで振り返ってバートを威い嚇かくする表情をした。一方バートは、眼鏡と襟えり元もとの位置を直すと、ふんと鼻を鳴らして正面を向く。

「……では」

　教室が静まるのを待って、エイダは口を開いた。

「先日から予定していた通り、今日は午後からロンドンのウェルズ天文台で社会見学を行ないます。そこで、この時間は通常の授業を中止し、本日のテーマとなる火星についての知識を深めることにします。―まずは皆さんの、火星という星について知っていることを教えてください」

　エイダが教室を見回すと、子供たちがいっせいに手を上げた。

「ハイ！」

「はいッ！」

「はぁい！」

「―赤いんだ！」

「知ってるよ。ワクセイなんだ」

「ワクセイってなに？」

「あたし見たことある！　ワクセイ！」

「それって、ロンドンにあるの？」

「火星マーズっていうのはローマの神様だから──」

「イタリア人？」

「ローマ人だろ」

「火星人！　火星人！」

「ローマに火星人がいるの？」

「運河がハッケンされましたぁ！」

「運河はベネチアじゃなかったっけ」

　エイダは子供たちの発言を満足げに聞いていたが、やがて意見がひと通り出尽つくすのを待って、バートを指した。

　バートは椅い子すの上で背筋を正しながら言った。

「ええと……火星は太陽系の四番目の惑わく星せいで、地球のひとつ外の軌き道どうを巡めぐっています。太陽からの距きょ離りは地球のおよそ一・五倍で、とても寒い星だと考えられています。また、直径は地球の半分ほどで、おそらく質量と重力も少ないはずです。それから、およそ二年と二ヵ月ごとに地球に近づきますが、前世紀後半の大接近のときに、地表全土を覆おおう筋すじ状の地形と、ふたつの衛星が発見されました」

「はい、たいへんよろしい」

　エイダが深くうなずき、一いつ瞬しゅん、教室が静まったその時、

「火星には、でかいタコみたいな火星人がいるんだ。今も地球を狙ねらってるんだぜ……！」

　ことさらに声を低め、となりの女生徒をおどかすオルソンの声が響いた。

「ひゃあ！」

「それ本当!?」

「火星人が攻せめてくるの!?」

　教室は蜂はちの巣すをつついたような騒ぎになり、

「お静かに！　皆みなさん、お静かに！」

　エイダは再び懐中時計のベルを鳴らし、教室が静まるのを待って言った。

「今オルソンが言ったのは、読み物の中のお話です。実際に観測された事実とは分けて考えなければなりません。とはいえ……仮に『もしも火星人がいたら』と考えてみることには、想像力の訓練という意義があるかもしれませんね」

「先生、火星人はタコに似てるんですか？」

「ほんとに地球に攻めてくるの？」

「科学者や小説家の中には、そのような想像をした人もいます」

　エイダは黒板に大きな円を描えがき、その円の中に三つの小さな円を、また、その下に数本の線を描かき足した。ふたつの大きな目、ひとつの小さな口を描かれた風船のような頭から、ひものように細長い、手足とも触しよく手しゆともつかないものが生えている……といった絵だ。

「これが、現在考えられている〝鮹たこのような火星人〟の姿ですが、これは火星の溝みぞ状地形の正体を人工的な〝運河〟と仮定したことから生まれてきたイメージです。つまり――」

　エイダは教きよう鞭べんの先で〝鮹〟の頭を指した。

「もし火星人が火星の全土に巨きよ大だいな灌かん漑がい設備を作り上げるほどの知能を持っていると仮定するならば、彼らはわれわれ地球人類と同等以上の頭脳を収めた、大きな頭部を持っていると

考えられます。一方、火星は地球上より重力が小さいため、頭部を支える手足は細いもので充じゆう分ぶんです。それで、このような姿が想定されたわけです。また、火星人が火星の地表を緑化しようとしているとすれば、豊かな水に恵めぐまれた私たちの地球は、彼らにとって格好の植民地と考えられますね。そのため『火星人は地球を狙っている』という考えが生まれたわけです」

〝火星人幻げん想そう〟の成立過程について、エイダはよどみなく説明した──が、子供たちはもっぱら、黒板に描かれた絵の感想を述べ始めた。

「変なの！」

「なんだか弱そう！」

「こんなの怖こわくないよな！」

「外見によって他人ひとを侮あなどるのは、愚おろかなことですよ」

　エイダはひときわ大きな声を上げていたオルソンを、教鞭で指した。

「オルソン、あなたはこの火星人と戦っても勝てると？」

「俺がそんなへなちょこに負けるかよ！」

「では、競技種目が算数の試験でも？」

「えっ……」

　オルソンが思わず口ごもると、子供たちがどっと笑った。

「……算数は関係ないじゃんか」

「関係は大ありです」

　と、エイダは言った。

「火星人は私たちとレスリングをしに来るわけではありません。たとえば、われわれが異境の、あるいは未開の地に赴おもむくとき、自ら頼たよりにするものはなんでしょう？　頑がん健けんな肉体、

不ふ屈くつの冒ぼう険けん精神、もちろんそういったものもあるでしょう。しかし、それら以上に重要なのは、分野を問わない広こう汎はんな知識と、論理的な思考です。火星人もまた同様。彼らの武器は、この巨大な頭脳に宿る知性そのものなのです。あなたがたも、火星人に対たい抗こうしようと思うならば、体と共に頭を鍛きたえ、彼らに負けない知性と教養を身につけなければなりませんね」

「でも、あんまり頭がよさそうには見えないわ」

「それは単に、先生の絵が下手だからだよ」

　バートが隣りん席せきの生徒と言い交かわすと、

「……とにかく、これはあくまで〝もしも〟のお話です」

　と、エイダは顔を赤くしながら、雑ぞう巾きんで黒板の絵を拭ふき消した。

「火星人は〝万が一、ひょっとしたら〟実在するかもしれませんが、おそらくは空想の中の存在に留とどまることになるでしょう――」

　エイダが話題を締しめくくろうとした時、窓の外――学園の上空から、動物の唸うなりにも似た爆ばく音おんが聞こえてきた。

「なに？」

「火星人!?」

「わあっ！」

　子供たちのうち半分ほどは机の下に隠かくれ、残り半分はエイダと共に窓に駆かけ寄った。

「あれは……」

　エイダが見上げた空を、巨大な蜻蛉とんぼを思わせる影かげが横切った。ほんの数年前に覇道財ざい閥ばつが開発した、複葉式飛行機だ。一いつ般ぱん的な実用化はまだされていないはずだが……。

　複葉機は上空を二、三度旋せん回かいすると、学園の校庭に着陸

した。

「おい、見に行こうぜ！」

　オルソンが窓から飛び出し、何人かの子供たちがあとに続いた。

「あなたたち、教室にお戻もどりなさい！　授業中ですよ！」

　そう言いながら、エイダもスカートの裾すそを持ち上げ、あとを追って駆けていく。

　複葉機のプロペラが止まり、操縦席からひとりの男が地上に降り立つと、たちまち子供たちに取り巻かれた。

「すっげえ！」

「どこから飛んできたの？」

「火星人？　火星人？」

　エイダは子供たちを掻かき分けるように前に出ると、男に呼び掛かけた。

「ミスター覇道……？」

「……いや、あの覇道でなくてすまないね」

　そう言ってゴーグルと飛行帽ぼうを外したのは、エイダが想定したあの覇道―覇道財閥総そう帥すい・覇道鋼造ではなく、エイダより五つほど歳上の青年だった。覇道と同じ東洋人ではあるが、覇道の野性味を帯びた風ふう貌ぼうに対して、こちらはどこか品のよい印象がある。

「―あら坊ぼつちゃま」

　と、エイダは言った。

「〝坊ちゃま〟はやめてくれないか」

　青年はちらりと周囲を見回し、肩かたをすくめた。

「いい歳としをして〝坊ちゃま〟呼ばわりじゃ、子供に笑われるよ」

「あら、坊ちゃまは坊ちゃまですわ」

　エイダが即そく座ざに切り返すと、ふたりのやりとりを聞いていた子供たちが、くすくすと笑った。実際、青年の育ちのよさを感じさせる物もの腰ごしには確かに、どこか〝坊ちゃま〟然としたところがある。

　青年の名は、覇は道どう兼かね定さだ。

　あの覇道鋼造の息子むすこ、つまり、覇道財閥の後継者プリンスだ。

「それで、いったい当学園になんのご用で？」

「ああ、それなんだが……」

　兼定はもう一度、はばかるように辺りを見回し、小さな声で言った。

「僕の父が──つまり、覇道鋼造が、消えた」

+

　最寄りの駅から鉄道でロンドンへ着き、徒歩で天文台へ向かう道すがら、エイダと兼定は覇道鋼造の行方ゆくえについて話し合った。

「あわてることはありませんわ」

　エイダは事も無げに言う。

「覇道鋼造はいつもこの世界のどこかを跳とび回っていて、その居場所は誰だれにもつかめない──今に始まったことじゃありませんもの」

　体にまとわりつき衣服を引っ張る子供たちを適当にあしらいながら、兼定は答えた。

「それは確かにその通りだが……今回ばかりは、本当に行方が分か

らないんだ。執しつ事じにも、財閥の幹部の面々にも一いつ切さい言付けはない。それに、覇道鋼造が訪おとずれたとなれば、世界中のどこであろうと、無線通つう信しん網もうによってなんらかのニュースはアーカムに伝わってくるはずだ。ところが、それさえも一切ない。今、覇道鋼造はこの地上から消えてしまっているとしか言いようがないんだ」

「あら、まあ」

「幹部の中には、父が旅先で死んだと考えている者もいる。僕も半分はそう信じ始めているくらいだ。もしそうでないとしても、覇道鋼造が不在のまま、覇道財閥という超ちよう巨きよ大だい組織を維い持じすることは、ほかの誰にもできはしない。数ヵ月のうちに財閥は解体され、〝覇道帝てい国こく〟は消しよう滅めつするだろう。その場合、僕はパイのように分割された資産の、大きなひと切れを受け取ることになる。それすらも、ひとりの人間には大きすぎる財産だけれどね」

「その急を告げる事態にあって、私ごときを訪ねた理由はなんですの？」

　エイダが問うと、兼定は言葉を続けた。

「ここ数週間、僕は財閥の資産を確かく認にんしていた。理由のひとつは父の行方の手がかりを得るため、もうひとつは覇道鋼造の死後の財産の整理のためだ」

「それは少々気が早いのではないかしら」

「まあ、念のためさ。『先んずれば人を制す』という奴やつでね──ともかく僕は、覇道鋼造という人間の行動を理解するために、その分身である覇道財閥の富の流れを理解しようとしたわけだが、これにはまったく骨が折れたよ。たとえば『財産を目減りさせないように、手て堅がたい賭かけを何重にも張る』──それが企き業ぎよう経営というゲームの定石セオリーだと僕は教えられてきたし、それは事実だと確信している。しかし、そうした観点から父の経営手しゆ腕わんを評価するならば──でたらめだよ。彼は何十回、何百回と連続で大穴に張り込んでは、そのすべてを当ててしまうんだ。覇道鋼造が今、なにを考えているかは誰にも分からない。しかし、何年か──ひょっとすると何十年かあとに振ふり返ってみると、彼は無む駄だなことなどひとつもしていなかったということが分かる、という

寸法だ」

「まあ、そんなところでしょうね。覇道鋼造の観察者のひとりとして同意しますわ」

　と、エイダは言った。

「それで、私の質問への答えは？」

「ああ、なぜ君を訪ねたか、ということだね。その質問の答えは、ふたつの質問になる。ひとつは先ほどから言っているように、覇道鋼造の行方の手がかりを得るためだ。ミス・ダーレス、約二年間、アーカムで覇道鋼造の側近のひとりを務めた君なら、この問いに答えられるかもしれない――」

　兼定は一いつ旦たん言葉を切り、ひとつの単語を強調するように言った。

「――〝デモンベイン〟とはなんだ？」

「……さあ」

　エイダは首をかしげた。

「なんですの、そのデモンなんとか、というのは？」

「いや、今はただ、なんらかの暗号名らしいということしか分からないが……覇道財閥の大小の投資のほとんどが、間接的にその〝デモンベイン〟に関連しているらしいとの報告がある。その正体を知れば、父の行動も読めるかもしれない」

「あらまあ。お役に立てなくて残念だわ」

　兼定は「気にするな」というように軽く片手を上げ、言葉を続けた。

「まあ、これに関しては、僕もそれほど期待していたわけじゃない。忘れてくれ。それより重要なのは、もうひとつの質問のほうだ」

「どうぞ、うかがいましょう」

　エイダは兼定を見上げた。すると、兼定は決まり悪そうに目をそらしながら、

「あー……ミス・ダーレス、君が優ゆう秀しゆうな人材だということに疑いはないし、君の教育に対する情熱も尊敬すべきものだと思う。しかし―」

「はい？」

「ダーレス学園に対する覇道財閥の出資は、他の保健教育機関に対するものとは多少形態が違ちがっている。たとえば金を出すにしても、研究機関であればその研究成果、教育機関であれば優秀な人材に対する権利は覇道財閥が優先的に取得する、といった付帯条件を設けて利益を確保するのが父のやり方だが、ダーレス学園に関してはそれがない。また、その金額自体も、学園の規模から想定されるものとは桁けたがいくつも違う」

「たいへん感謝しておりますわ」

「それは構わないんだが……どうも僕には、父が君に対して、通常の利害を超こえた立場から援えん助じよをしているように思える。その理由とは、なんだろう？」

「つまり、私の理念に対する共感ですわね」

　昂こう然ぜんと胸を反らすエイダに対し、兼定は頭を掻かきながら答えた。

「いや、僕が言うのはそういうことではなくて……あー、悪い意味に取らないでおくれよ。つまり、もし君が覇道の遺族として遺産を受け取る立場になったとしたら、なるべく公正に対処したいと思うんだ」

「はい？　おっしゃる意味がよく分かりませんが……遺族？」

「君も知っての通り、父の行動には謎なぞが多い」

　兼定は言った。

「ある日、急に弟きよう妹だいが増えたとしても、僕は驚おどろかないよ」

「あなたの……きょうだい？」

　エイダはきょとんとしながら、兼定と自分の顔を順番に指した。

　──そして、日ひ傘がさを畳たたむとクリケットのように振りかぶり、兼定の尻しりを叩たたき上げた。

「今の発言は、あなたのお父様の名めい誉よに関かかわることですよ、坊ぼつちゃま!!」

「いたッ！　いたたッ！」

　兼定が尻を押さえて跳とび上がると、子供たちがわけも分からずに喜んで、蹴けりを入れ始めた。

「その件に関して、私が特別にお答えするような事実は一いつ切さいありません」

　エイダは言った。

「ただひとつだけ助言するならば―あなたのお父様を信じることですわ、坊ちゃま」

「そうしたいのは山々だけどね」

　兼定は子供たちの蹴りをよけながら言った。

「あの男の、なにをどう信用しろと言うんだ!?」

「なにもかも、全面的に、ですわ。それに坊ちゃま、ご自分の父親のことを〝あの男〟なんて言うものじゃありません」

「分かった、分かったよ！　僕のほうも納なつ得とくがいった！　確かに君は、覇道鋼造の子供であるということがどういうことか、これっぽっちも分かっちゃいない。それと、もうひとつ―君こそ〝坊ちゃま〟はやめてくれ」

「あら、坊ちゃまは坊ちゃまですわ」

　エイダの切り返しに、兼定が思わず口ごもった時、

「ヒャハハ！　情けねえな、おい！」

　粗そ野やな笑い声が、ふたりの会話に割って入った。

　声を上げたのは、通りに面したパブの店頭席に着いた、若い男だ。

　歳は二十歳はたちになっているかどうか。エイダよりも下だろう。しかし、黒い革かわに金属の鋲びょうを打った服を着たその姿は、威い圧あつ的な空気を放っている。

「生意気な女は引っぱたけ。素す直なおになるぜ」

　男はうっそりと立ち上がった。その身長は、長身の兼定と同じくらいだ。

「……悪いが、それは僕の流りゆう儀ぎじゃない」

　兼定はエイダをかばうように、一歩進み出た。

　男は刃は物もののような目で兼定とエイダを睨ねめつけると、皮肉な笑えみを頬ほおに浮うかべた。

「へっ、まあ好きにしろや、坊ちゃま」

「あなた──」

　兼定の背後から、エイダが身を乗り出した。その視線は男の手元に据すえられている。

「──その本は!?」

　男は左手に、大きな革表紙の本を持っている。エイダはその本を知っていた。

　と、その時──

　ズズズ……!!

　パブの店頭に置かれ、歌か謡よう曲きよくを流していたラジオが、大きな雑音を立てた。

「おっと、始まったな！」

　男の手元で、革表紙がひとりでに開き、何百枚というページが、突とつ風ぷうに吹ふかれたように飛び出した。

「──ヒャハハハハ！　またな！」

　鳥の羽ばたきのような音を立てながら、ページは渦うずを巻いて男の姿を覆おおい隠かくし、次の瞬しゅん間かんには、人も本も、跡あと形かたもなく消え去った。

「……なんだ、今のは……？」

　兼定が呆あつ気けにとられて呟つぶやき、子供たちが騒さわぎ始めた。

「皆みなさん、お静かに！　公道で騒いではいけませんよ！」

　子供たちを静めようとするエイダにバートが近づき、小さな声で言った。

「先生、あの人、昨日の……？」

　エイダはうなずいた。

　彼女は男が持っていた本を知っていた。

〝アル・アジフ〟──またの名を〝死ネク霊ロノ秘ミコ法ン〟。

　その所有者とはすなわち、〝死マス霊ター・秘オブ・法ネクロのノミ主コン〟だ。

　パブのラジオが、再び歌謡曲を歌い始めた。

　一瞬、異常さをのぞかせたこの世界は、再び平へい穏おんな日常を取り戻もどしたかに見えた。

　だが、そうではない。

　今、この瞬間。鉄道の路線がポイントによって切り替かわるように、時の流れは〝あり得ざる歴史〟に切り替わったのだ。

+

　──その頃ころ、ダーレス学園の一室に備えられた無線電信装置が、通信電波を捉とらえ、自動的にパンチカードを吐はき出し始めていた。

　カードの群れはやがて、自然に渦を巻き、ひとつの形態を取ろうとした。子供ほどの大きさの、人の形──

+

　ダーレス学園一行は、予約の時間通りにウェルズ天文台に到とう着ちやくした。

ウェルズ天文台は学術的な天体観測の傍かたわら、プラネタリウムや一いつ般ぱん向けの展示を行なっている施し設せつだ。特に前世紀の大接近以来、火星の観測を継けい続ぞく的に行なっていることで知られ、「地球上で最も火星に近い場所」と言われている。

兼定は少々焦じれた様子で、子供たちの列の最さい後こう尾びに付いて歩いていた。エイダとの話も半はん端ぱな状態であり、また、先ほどの奇き妙みような男についても気になっているが、エイダはそれらの事こと柄がらより、予定通りの社会見学を優先している。それを中止させるほどの強い理由も強ごう引いんさも持たない兼定は、なしくずしにつき合うばかりだ。

天文台の案内係は若い学者だった。この手の仕事には慣れているのだろう。施設や展示物の説明にもよどみがない。

「―このように当施設は、他の天文台とも連れん絡らくを取り合い協力しながら、日々宇宙への理解を深めているのです。なにかご質問は？」

案内係が振ふり返ると、子供たちがいっせいに手を上げた。

「はい、はぁい！」

「火星人はほんとにいるんですかぁ？」

「ですから、それはお話の―」

苦く笑しよう混じりにエイダが否定しようとすると、案内係はいたずらっぽく笑い、

「私たちも、今探しているところです」

と言った。

「当施設では、通常の天体観測のほかに、火星にアンテナを向けて電波を捉えようと試こころみています。それでは、皆さんもここで〝火星からの音〟を聞いてみましょう。ひょっとすると、あなたがたは火星人のラジオ放送を聞いた最初の地球人になれるかもしれません」

そう言いながら、案内係はまず、自分がヘッドフォンをつけて、電波観測装置のチューニングを始めた。

十秒―二十秒―意外に手間取っているのか、無言で装置に向かう案内係の背に、先ほどの子供が呼び掛けた。

「火星人はいますかぁ？」

「……はい、います」

案内係が答えたとき、子供たちはそれを冗じよう談だんだと思って笑った。しかし、振り返った案内係の顔からは、人間的な表情がごっそりと抜ぬけ落ちていた。

「ほんの少し前まではいませんでした。でも今はいるのです。たくさんたくさんいるのです今ここにもいるのですうぼあー」

案内係の口から、鮹たこの脚あしのような触しよく手しゆが生えて出た。次いで目鼻から、ヘッドフォンと顔の隙すき間まからも、細い触手の先せん端たんがはみ出し、ぴちぴちと動く。

子供たちは悲鳴を上げて飛び退のいた。案内係は逃にげ遅おくれたそのひとりの腕うでをつかまえ、ヘッドフォンをあてがおうとする。

「ごぼぼぼぼさあ皆みなさんも〝火星からの音〟を聞きましょうそして火星人になりましょぼぼぼぼぼう」

「やめろ！」

兼定が案内係の腕をつかんだ。しかし、細身の案内係は異常な怪かい力りきを発揮して、今度は兼定にヘッドフォンを押しつけてくる。

「やめなさい！　えいっ！　えいっ！」

エイダも日ひ傘がさを振って加勢するが、効果はないようだ。じりじりと力負けする兼定の目の前で、触手に押し出された眼球がぽろりと落ち、眼がん窩かの奥に緑色の光が見えた。

耳元に迫せまったスピーカーから異様な音ならぬ音が響ひびき、一瞬、気が遠くなる。

その時、兼定は幻げん視しした。

荒こう涼りようと広がる赤せつ褐かつ色しよくの大地に立つ、無数の人ひと影かげ──いや、それは人ではない。直立した鯏のような怪物だ。各おのの々おのが、弱々しい太陽の光に向かって数本の触手を差し伸のべている。

そして、そのうちの一体が兼定の視線に気づき、意外なほどの速度でするすると近寄ってきた。

──まずい。

兼定は本能的に危機を直感した。

──奴やつは僕に取って代わるつもりだ……！

大きな丸い頭部と、ふたつの緑色に光る目が、兼定の視界いっぱいに迫り──

ヒュン──

なにかが風を切る音が、兼定を現実に引き戻もどした。

同時に、頭を縦に断ち割られた案内係が倒たおれた。床ゆかに頭を打ちつけた衝しよう撃げきで飛び出したその中身は、軟なん体たい質の頭部と触手からなる、赤黒い鯏のようなものだ。

「火星人だ！」

オルソンが叫さけんだ。

その〝鯏〟は、案内係の頭ず蓋がいに、脳の代わりに収まっていたことになる。いや、あの〝音〟を聞いた彼の脳が、何者かの意志に乗っ取られ、このような形態に変異したのだ。

おそらく、あと数秒の間、あの〝音〟を聞き続けていたら、自分もこのような姿になっていただろう。

案内係を斃たおした武器──バルザイの偃えん月げつ刀とうは、ブーメランのように回転しながら持ち主の手に戻った。

「ヒャハハ！　危ないところだったな、え、坊ぼつちゃま!?」

天窓から屋内に身を乗り出しているのは、先刻の男──

「―マスター・オブ・ネクロノミコン！」

　エイダが言うと、男は再び窓を抜け、戸外へ飛び出した。

「お待ちなさい！　話があります！」

　窓を見上げるエイダに、兼定が呼び掛けた。

「いや―僕たちも外に出たほうがいいようだ」

　見れば、白衣を着た学者たちを中心に、何人もの人間がうつろな目を内側から緑色に光らせ、のたくるような奇き妙みような動きで歩いてくる。おそらくそれは、彼ら本来の動きを模したものだ。

　次いで、館内の放送設備から、音楽とも風の唸うなりとも、はたまた邪じや教きようの呪じゆ文もんともつかない異様な音が流れ始めた。

「みんな、あの〝音〟を聞くな！　耳をふさいで！」

「外へ出ましょう！」

　兼定とエイダに促うながされ、子供たちは外に飛び出した。

　すると―ロンドンの街は様相を一変させていた。

　老若男女の別、また社会的階層を問わぬあらゆるロンドン市民が、あるいは馬や犬といった家か畜ちくまでもが、目を緑色に光らせ、のたくり歩いてくる。

　そして、街頭に流れる、あの異様な音―

「ラジオか……！」

　兼定はうめいた。

「奴らは〝電波〟と〝音〟で侵しん略りやくしてくるんだ！」

　気がつけば、周囲は緑の目の〝火星人〟に取り巻かれ、身動きが取れなくなりつつある。

　と―

バルザイの偃月刀が上空から投げ込まれ、縦横に回転しながら火星人の群れの中を踊おどり狂くるった。血肉と触しよく手しゆの断片が嵐あらしのように舞まい散り、兼定、エイダ、子供たちの周囲に雨のように降り注ぐ。

同時に、周辺のラジオも的確に破は壊かいされ、当面の危機は去ったかに見えるが──

兼定は子供たちを血の雨から守りながら、空を見上げた。そこには、偃月刀の使い手──マスター・オブ・ネクロノミコンが、黒い翼つばさを広げ、空中に浮ふ遊ゆうしている。

「なんてことを──」

兼定の傍かたわらで、エイダが叫んだ。

「──彼らは人間なのですよ!!」

「ああ？　馬ば鹿かかてめえ」

マスター・オブ・ネクロノミコンは答えた。

「人間だった、だろ。今はそうじゃねえ──よっとォ!!」

マスター・オブ・ネクロノミコンは両手に構えた偃月刀を振ふりかぶり、前方に投げ放った。片方は灼しやく熱ねつ、片方は凍とう結けつ、性質の違ちがうふたつの力を宿したふた振りの魔ま刃じんは、二重螺ら旋せんを描えがきながら、巨きよ大だいな穿孔機ドリルのように建物をくり貫ぬいた。

「さあて、逃にげ道は作ってやったぜ。文句があったらここで死ね！　ヒャハハハハ!!」

マスター・オブ・ネクロノミコンは高笑いをしながら飛び去った。その行く手に、血と瓦が礫れきのしぶきが次々と上がる。

「おやめなさい、マスター・オブ・ネクロノミコン！──聞こえているのでしょう、アル・アジフ!!」

エイダの肩かたに、兼定が手を置いた。

「どうやら、今は彼の言う通りにするしかなさそうだ」

　見れば、周囲には再び火星人が集まりつつある。エイダたち一行は偃月刀が切り開いたルートを駆かけ、テムズ川の河か畔はんに辿たどり着いた。

「ミス・ダーレス、これからどうする!?　この分では鉄道も機能しているかどうか──」

　兼定が言い掛かけた時、川水の中から巨大な物体が浮上した。

　蒸気船に二本の腕うでをつけたようなその姿は──

「ゴリアテ……！　いったい誰だれが操縦しているの!?」

+

「ヒャハハハハ！　死ね死ね死ねタコども!!」

　血肉の奔ほん流りゆうを巻き起こしながら、マスター・オブ・ネクロノミコンはロンドンの街を低空飛行する。

　しかし、火星人の勢力は、すでにロンドン全域に及およんでいるらしい。光る目の怪かい人じんたちは、無む尽じん蔵ぞうに湧わいて出るかのようだ。

「──きりがねえ！　アル・アジフ！　一発デカいのをやるぜ!!」

　マスター・オブ・ネクロノミコンは、黒い翼を広げ、急上じょう昇しようした。

「返事はどうしたァ!?」

（……了りよう解かいした、エドガー……我が主あるじ）

「ヒャハハハハ──アイオーン！」

　ゴッ──!!

　マスター・オブ・ネクロノミコン──エドガーの体を中心に、巨きよ塔とうほどもある鋼はがねの巨神が顕けん現げんした。

　鬼デウ械ス・神マキナアイオーン。魔人ひとの意志を以もつて振るわれる、魔神かみの力の化身だ。

　鋼の巨体を得たエドガーは、火星人の群れを踏ふみつぶし、周囲の建造物を打ち壊こわし始めた。

「ヒャハハハハ！　面白おもしれェェェ！」

　石造りの建物を蹴けり崩くずし、巨大な偃えん月げつ刀とうを呼び出して鉄塔を両断し──そのさまはまるで、積み木を崩して遊ぶ子供のようだ。

　それは確かに、火星人に対する効率的な殺さつ戮りくかもしれない。しかし同時に、あまりにも見境いのない破壊であるとも言える。

『おやめなさい！』

　スピーカーからの声が、ロンドンの街に響ひびき渡わたった。

『無益な破壊行こう為いは許しません!!』

「なんだァ？」

　エドガー＝アイオーンが振り返った先にいるのは、建物から頭ひとつを飛び出させた巨大な機械──エイダたちの乗り込んだゴリアテだ。

「人がせっかく助けてやりゃあ……邪じや魔まするなら死ね!!」

　アイオーンの右半身が瞬しゆん時じに赤熱し、関節から炎ほのおを噴ふき出した。その熱は瞬またたく間に巨大な偃月刀に伝わる。

　すさまじい熱量を孕はらんだ偃月刀が、空気を焦こがしながら、

ゴリアテに向けて投げ打たれた。鋼鉄の塊かたまりをも両断する威い力りよくの込められた一投だ。

しかし、

ガシッ──

ゴリアテの武骨な手のひらが、偃月刀の柄えをつかんで止めた。

刀身に込められた熱がゴリアテの腕を鈍にぶく光らせるが、本体にまで熱は伝わっていないようだ。

「あァ？」

アイオーンはもう一本、左手で偃月刀を呼び出した。凍とう結けつの魔ま力りよくを孕み、青白い光と粉雪のような白い輝かがやきを纏まとっている。

アイオーンはゴリアテに向かって突とつ進しんし、冷気の尾おを引く偃月刀を叩たたきつけた。

ゴリアテは灼しやく熱ねつの偃月刀でその攻こう撃げきを受け止める。

ジュバッ──!!

両者の手元で爆ばく発はつが起こった。ゴリアテは仰あお向むけに転てん倒とうし、アイオーンは後方に吹ふき飛ばされた。

「てめェ……！」

アイオーンが鋼の翼つばさを広げ、飛び上がった。瞬く間にロンドンの街並みを飛び抜け、ゴリアテが豆まめ粒つぶほどに見える高度にまで上昇する。

（エドガー……ならぬ！）

主の意図を悟さとったアル・アジフが言った。

「うるせえ!!」

エドガー＝アイオーンが構えた両手の前方に、巨大な光の柱が生じた。無数の魔術文字からなる、魔術式の螺ら旋せんだ。

「呪スペ文ル・螺ヘリ旋クス―神銃形態!!」

　螺旋は回転しながら収束し、金属質の光こう沢たくを帯びる、杖つえとも銃じゆうともつかない棒状の武器に変わり、アイオーンの両手に握にぎられた。

次いで、アイオーンが〝杖〟の先を眼下のゴリアテに据すえると、〝杖〟は先せん端たんを展開し、巨きよ大だいな砲ほう口こうを開いた。

「燃え尽つきろ!!」

〝杖〟の周囲を幾いく重えにも取り囲む魔砲陣が高速回転し、炎精クトウ神格グアの砲ほう弾だんを撃うち出す……!!

アイオーンが持つ最大の超ちよう破は壊かい力が、上空からゴリアテに叩きつけられた。

+

アイオーンの〝杖〟によって発生し、ロンドンを焼き尽くした恒こう星せいのごとき光球は、急速に収縮し、そして消しよう滅めつした。

あとに残ったのは、鎔とけ残った鉄柱と、沸ふつ騰とうするガラスの荒こう野やばかり──いや、その中に、半径数十メートルの円形の土地が燃え残っていた。

その中心に存在するのは、右手を宙に掲かかげたゴリアテ。その手のひらには、発光する破邪エルダーの印形・サインが浮うかび上がっている。

『無事か』

ゴリアテに宿ったものが問うと、

「ええ、おかげさまで」

と、エイダが答えた。

兼定も、子供たちも、今はゴリアテの機内に収まっている。

一方──瞬しゆん間かん的にすべての力を出し尽くしたアイオーンの機体が分解し、気を失ったエドガーが落下してきた。

　ゴリアテは手を差し伸のべてエドガーの体を受け止め、昇しよう降こうハッチを開いて機内に収容した。

「なぜ、あの男を……？」

　兼定の問いに、エイダが答えた。

「彼とは一度話し合う必要があります。それに、あのような人物にこそ、教育と啓けい蒙もうが必要なのですわ」

ARKHAM CRISIS

第二章 妖都蹂躙

アイオーンの〝杖〟の一いち撃げきによって壊かい滅めつしたロンドンの跡あと地ちを、ゴリアテはキャタピラを鳴らして進んでいく。

子供たちは教室ほどの大きさの居住スペースへ収容され、操縦室にはエイダと級長兼けん助手のオルソンとバート、それに兼定と、意識を失ったマスター・オブ・ネクロノミコンがいる。

「なんてことだ……」

潜せん望ぼう鏡きようで機外の様子を見ながら、兼定がうめいた。

「……ロンドンには数十万の市民が生活していたんだぞ！」

「―しかし、その大部分がすでに火星人に寄生されつつあった」

そう答えたのは、エイダでも子供たちでもなかった。

操縦室の片かた隅すみに横たえられていたマスター・オブ・ネクロノミコンの黒い術衣がほどけ、呪じゆ式しきを記された紙片となって渦うずを巻き、十二歳ほどの少女の姿になった。

「なっ……!?」

兼定と、ふたりの子供たちが絶句したが、

「お久しぶりです、アル・アジフ」

エイダは落ち着いた様子で前に進み出た。彼女はこの魔ま導どう書しよの化け身しんとは、旧知の仲なのだ。

「もちろん私も、魔導書アル・アジフとその主マスターが、理由もなく殺さつ戮りくと破は壊かいを行なうとは考えていません。わけを話していただけますね？」

「別段、深い理由などない」

　アル・アジフは目を伏ふせたまま言った。

「エドガーは妾わらわの歴代の主マスターの中で、最も破壊的な男だ。ナイアルラトホテップがエドガーと妾を引き合わせ、『火星人の襲しゆう来らいに備えよ』と言った。邪じや神しんの言葉ゆえ信用はならぬが、事実、この事態にあって此こ奴やつが我が遣つかい手となったことには意味がある。疫えき病びようの如ごとく増ぞう殖しよくする火星人に対たい抗こうするためには、都市まちをも焼き尽つくす、此奴の力が必要なのだ」

「いっしょに焼き尽くされるところだった身としては、大賛成とはいかないね」

　兼定の皮肉を受け流すように、アル・アジフは呟つぶやいた。

「ああ、先ほどの、エドガーの一撃に耐たえた汝なれらの力──あれはなんだ」

『それは私の力だ』

　機内スピーカーを通じて、少女の声が操縦室に響ひびいた。

　アル・アジフと似た声だが、やや抑よく揚ようを欠いたそれは、スピーカーの音声である点を差し引いても、機械的に聞こえる。

　ゴリアテの制せい御ぎよ用解かい析せき機関から、パンチカードが吐はき出され、螺ら旋せん状に渦巻き、アル・アジフと同年代の少女の姿になった。

「この姿では、初にお目に掛かかる。我が原本ははよ」

「汝なれは……？」

　怪け訝げんな顔をするアル・アジフに、エイダが言った。

「紹しよう介かいしましょう──と言っても、私たちもつい数分前に会ったところですけれど──彼女はミスター覇道の所有する魔導書──【ネクロノミコン・機械語写本】の化身です」

「なに？……いや、道理で覚えのある気配だ。しかし……」

　アル・アジフは再び眉まゆをひそめた。【機械語写本】は、彼女の知るうちで最も年若い魔導書である。【死ネク霊ロノ秘ミコ法ン】──すなわちアル・アジフ自身──の内容を最新の解析機関に読み込ませるために作成されたというその経けい緯いからして、まだ生まれてから十年とは経たっていないはずだ。如何いかに最強の魔導書の分身とはいえ、それほどに歴史の浅い魔導書が自らの意志を発揮するとは考えにくい。

　言外の問いに答えて、【機械語写本】の少女は言った。

「不ふ審しんに思うのももっともだ。だが、私はデモンベインの制御用魔導書として、〝獅し子しの心臓〟の神気を数年にわたって受け、自ら化身を為なすに充じゆう分ぶんな力を蓄たくわえたのだ。我が力を以もつてすれば、解析機関によって制御されるあらゆる機械エンジンは、鬼デウ械ス・神マキナに匹ひつ敵てきする魔導機械となる。ことに──」

【機械語写本】の少女は、ゴリアテの操縦室の内ない壁へきをなでた。

「これは我の力と馴な染じみがよい。デモンベインの改良に従事した経験が設計に生かされているな。我がもうひとりの母よ」

「え……？」

　少女に視線を向けられ、エイダが自分の鼻先を指した。

「我は我が主マスター覇道鋼造によって、〝エイダ〟と名付けられた。あなたにあやかり、あらゆる機関エンジンの支配者となるように、との願いが込められた名だ。つまり、オーガスタ・エイダ・ダーレス、あなたもまた我が原型モデルのひとりと言える」

「あら、それはどうも。光栄ですわ」

「──ちょっと待て！　待ってくれ！」

　兼定が会話に割って入った。

「君たちはいったいなんなんだ!?　僕の父──覇道鋼造とはどういう関係だ!?　それに、デモンベインだって!?」

「それらの件に関しては、のちほど説明いたしましょう」

　エイダは兼定の言葉を片手で制し、

「〝小さいリトル・エイダエイダ〟、常に主あるじと共にあるはずの魔導書が単独行動を取っているということは、なんらかの非常事態が進行しているとみるべきですね」

「その通りだ、オーガスタ・エイダ・ダーレス」

【機械語写本】の少女──Ｌリトル・Ａエイダはうなずいた。

「覇道鋼造は現在非常に困難な状じよう況きようにあり、身動きが取れずにいる。また、地球を襲おそっている事態はその経緯の一部だ。地球を救い、かつ、我が主マスターの目的を果たすために、この場にいる全員の協力が必要だ」

「加えて、覇道財ざい閥ばつのすべての力が──ですわね」

　あごに手を当てて、エイダは呟いた。状況を呑のみ込むのに、数秒の時間が掛かった。

「──しかし我が写本こよ、エドガーは他人のために働く男ではないぞ」

「ミス・ダーレス、僕の質問の答えは―」

「先生、そろそろ川に出ます」

　口々に問題を呈ていする面々に向かって、

「―よろしい！」

　と、エイダは顔を上げた。

「それでは―バート、このままテムズ川に進入し、進路を下流へ！　本機はこれよりアメリカへ向かいます！」

「……なんと？」

「なんだって？」

「了りよう解かい！」

「アメリカ……アーカムへか？　今、この場からかい？」

「合理的判断の結果ですわ、坊ぼつちゃま」

　エイダは答えた。

「火星人に掌しよう握あくされた無線通信経路は使用不可能、となれば、覇道財閥の勢力との接せつ触しよくが見込める場所まで、我々が直接出向かなければなりません。このゴリアテは蒸気客船並みの航続力と収容能力を備えていますから、道中の補給の心配もありません」

「しかし……子供たちを抱かかえたまま？」

「この状況下では、ロンドン郊こう外がいも安全とは言い切れません。それに対して、私たちと同行するならば―魔ま導どう書しよ二冊にマスター・オブ・ネクロノミコン、覇道財閥御おん曹ぞう司しまで同行とあれば、これ以上に安全な旅はないというものです」

「いや、それは……そうかもしれないが……」

「それに、これは世界一の大都市の姿を子供たちに見せておく、いい機会ですわ」

　エイダは胸を張り、堂々と言い切った。

「つまり、社会見学です！」

+

　マスター・オブ・ネクロノミコン、エドガーが目覚めると、暗い、低い天てん井じようが目に入った。

「起きたか、エドガー」

　アル・アジフが顔をのぞき込んだ。

「……どこだ、ここは」

「オーガスタ・エイダ・ダーレスの〝ゴリアテ〟の内部だ。汝なれは三日の間、昏こん睡すい状態にあった」

　エドガーの意識がはっきりしていることを確かく認にんすると、アル・アジフはさっそく小言を述べ始めた。

「〝呪スペ文ル・螺ヘリ旋クス〟は軽々しく使うなと言ったはずだ。汝なれ自身の心身に及およぶ影えい響きようはもちろん、あの場で救うべきダーレスや人間たちまで巻き込むところだった──いや、実際、多くの生き残りの人間たちを殺してしまった」

「うるせえな」

　エドガーは蠅はえを払はらうように手を振ふり、

「どうせ死ぬはずの連中だ。ほっといても火星人のエサにしかならねえだろうが」

「それは、そうだが……」

「なら文句言うな」

　エドガーは毛布を振り払い、起き上がった。

「行くぞ」

「無理だ。今ゴリアテから離はなれることはできん」

「あァ？」

「我らは今、イギリス海かい峡きようを越こえ、大西洋の只ただ中なかにいる。術マギ衣ウス・形スタ態イルを取ったとて、また、アイオーンを招しよう喚かんしたとても、いずこかの陸地にたどり着く前に力を失い、海中に没ぼつするだろう。アメリカの地に着くまでは、ダーレスらと行動を共にするしかあるまい」

「ちっ、面めん倒どうくせえ……」

「どこへ行く、エドガー」

「ここは息が詰つまる」

　船室を出て、機内を当てもなくうろついていると、やがてふたりはゴリアテの甲かん板ぱんに出た。

　青い空、強い陽ひ射ざしの下、ポールに張り渡わたされたロープに何十枚という白いシーツが干され、潮風にはためいている。背後に目を転じれば、鈍にぶい色をした海が、遠くかすむ水平線まで続いている。

「あっ！」

　洗せん濯たく物を干していた少年のひとりがエドガーの姿を認めると、柵さくから身を乗り出して、下方に向かって叫さけんだ。

「先生！　魔術師の人が起きたよ！」

　その言葉が終わるか終わらないかといううちに、腕うでをまくり、洗濯かごを抱えた覇道兼定が大おお股またに歩いてきた。

「よう、坊ちゃま」

　からかうように言われると、兼定は軽く顔をしかめたが、ふっと息を抜ぬいて、エドガーと並んで立った。

「君たちとは話がしたかった。エドガー。それにアル・アジフ」

「俺のほうは別に、話すことなんざねえぜ」

「そう言うな。なんでも、君は世界最強の……その、魔術師、だそうじゃないか。僕はつい先日まで、そんなものが存在することすら知らなかった。当然、興味はある。君がどうやってそうした力を手に入れたのか、また、その力をどう使うつもりなのか――」

「うるせえな。おまえの知ったこっちゃねえ。俺は好きなようにやるだけだ」

「そうはいかない。君の力は、個人が恣ほしいままにま振るうには大きすぎるものだ。そういった力は、ただ存在するだけで他人に大きな影響を与あたえる。実際、ロンドンではこっちが死ぬところだった」

「へっ、それで説教か」

「真面目まじめに話を聞くんだ。大都市を一いち撃げきで破は壊かいし得うる君の力は、世界の命運をも左右するものなんだぞ」

「あのなあ」

　エドガーは挑ちよう発はつ的に首をかしげると、兼定に言った。

「知らないようだから教えてやるが、魔術師ってのは自分の命と正しよう気きを削けずって〝力〟に変えるんだ。俺の命の使い道を、なんでおまえが指図するんだ、え？　俺は俺の好きなように暴れて、勝手にくたばるだけだ」

「それならばなおさら、その力を意味のあることに使おうとは思わないのか。目的もなく暴れて死ぬだけでは、獣けものと同じだ。君自身はそれでいいのか」

「ああ、それでけっこう！　俺はおまえみてえなお坊ぼつちゃんじゃねえ。生まれついての野の良ら犬だ。この力を手に入れたのだってたまたまだ。いきなり生き方まで変わるわけがねえ」

「しかし――君はどうなんだ、アル・アジフ。君のパートナーが狂きよう犬けんのように生き、そして死んでも構わないというのか？」

　不意に水を向けられたアル・アジフは、数すう瞬しゆん逡しゆん巡じゆんしたのち、重く口を開いた。

「……妾わらわの使命は、主あるじの力を得て魔まと戦うことにある。その目的に適かなう限りにおいては、主あるじの思おも惑わくに口を出すことはない」

「そういうことだ──アル・アジフ！」

　エドガーの意志に従い、アル・アジフの体がページ状にほどけ、黒い術マギウス・衣スタイルと化して主あるじの体を覆おおった。

　次いでエドガーは、魔マギ術ウス師・ウのイン翼グを広げて飛び立とうとする。

「待て、どこへ行くつもりだ！」

（エドガー、先にも言ったように、単独での大西洋横断は不可能だ）

「知ったことかよ」

　エドガーは空を見上げ、呟つぶやいた。

「飛べるところまで飛んで、あとは落ちるだけだ。なんならこの場でアイオーンを呼んで、このゴリアテとやらをぷちっと潰つぶしてやっても──」

　と、その時。

「目が覚めたのですね、エドガー！」

　ぱたぱたと足音を立てて、エイダが駆かけてきた。

「体調はどうですか？　おなかは空すいていませんか？」

「あ？……まあ、そういや腹は減ってるかな」

　すると、エイダはエドガーを手招きしながら歩き出した。

「よろしい、ではまず食事をお取りなさい。そのあと、あなたの雑務の分担を決めましょう」

「あァ？」

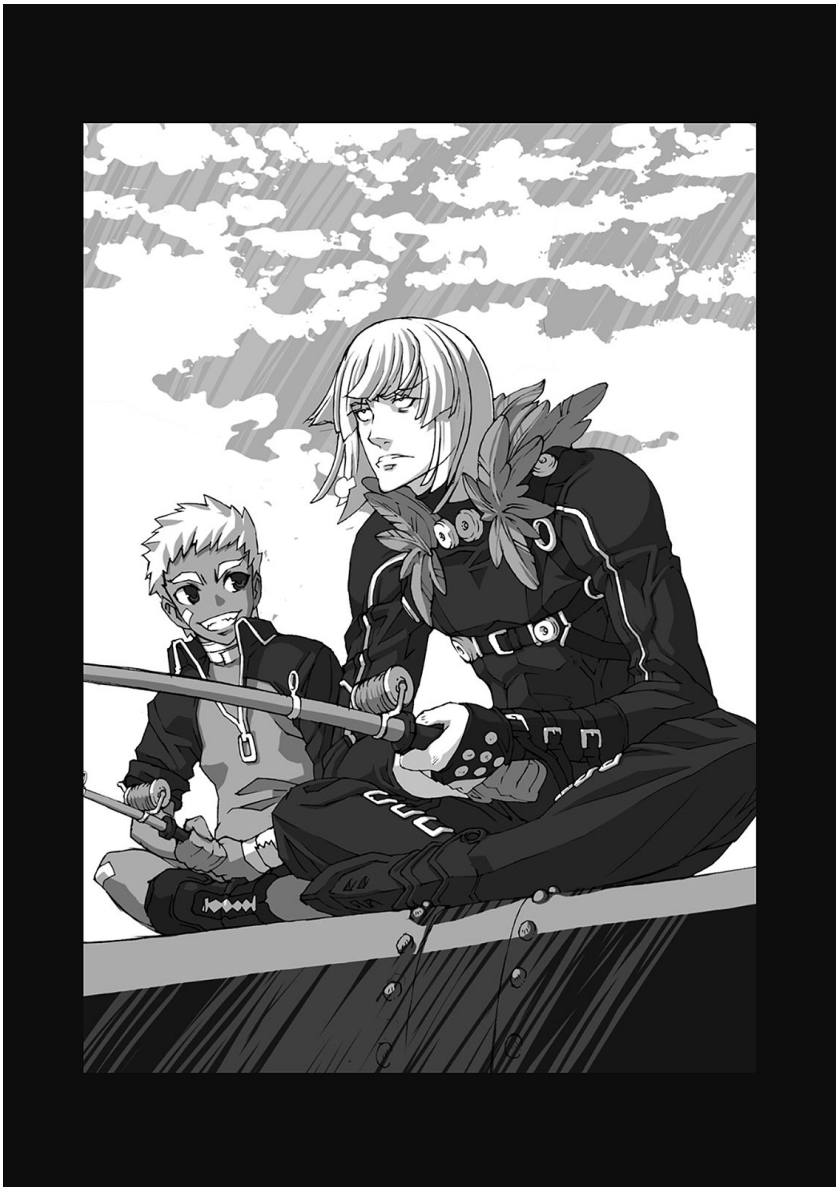
+

「……なんでこうなるんだ」

　甲かん板ぱんの縁ふちから釣つり糸を垂らしながらエドガーがぼやくと、

「まあそう言うなよ、兄貴」

　と、同様に生せい鮮せん食料調達の任に着いたオルソンが言った。



「俺はおまえの兄貴じゃねえ」

「そうは言っても〝ミスター〟って感じじゃねえし……それに〝坊ちゃま〟は絶対ちがうだろ？」

「へッ、そりゃまあ、そうだ」

「じゃあ、〝兄貴〟で負けといてくれよ」

「ふん」

　気のない調子で生返事を返すエドガーに、

「へっへ」

　とオルソンは笑ってみせる。どういうわけか、この男を気に入ったようだ。

「……ちッ、くだらねえ」

　エドガーは釣り竿ざおを放り出すと、ごろりと転がった。

「働かざる者喰くうべからず、って言うぜ、兄貴」

「ふん、誰だれが言うんだ？　あの先生様か？」

「まあ、そうだけど」

「けッ、べからざればどうだってンだ。飯抜ぬきか、尻しり叩たたきか」

「ダーレス先生は俺たちの食事を抜いたりしないぜ。『子供の食事を抜くのは保育学的に論外』なんだとさ。尻は時々叩くけど。あと、説教は長いな」

「へッ、話がくどそうな女だ」

「まあね。でも、とにかく、先生は俺の飯を取り上げたりしない。だから、食えなくなることはないけど、仕事をさぼったあとだと、多少気がとがめて飯がまずくなる──なっ、と」

　オルソンが竿を上げると、四十センチほどのカレイが掛かかっていた。

「へへ、釣りは俺が一番上手うまいんだ」

「ふん」

「なあ、いっしょにやろうぜ、兄貴。晩飯までに人数分釣らなきゃ、カッコがつかねえや」

「格好なんざ、別にどうでもいいだろ」

「それがさ……バートってのがいるんだ。眼鏡めがねでへなちょこの。あいつ『君はずっと遊んでたのかい』とか言うんだ。嫌いや味みな奴やつさ」

「生意気な奴はぶっ飛ばしておとなしくさせろよ」

「何度もそうしたんだけど、あいつ、嫌な目でこっちをにらむだけで、殴なぐり返しもしないんだ。ほんと、嫌な奴だよ。だから俺、あいつよりたくさん働いて『おまえはずっと遊んでたのかい』って言ってやるんだ──おっ」

　にわかに海面が波立ち、無数の黒い背びれが音を立てながらゴリアテの周囲を追い越こしていった。

　回遊するマグロの群れだ。

「ひゃあ、すげえなあ！」

　オルソンは声を上げて立ち上がり、甲板から身を乗り出した。

「……でも、あれはでかすぎて釣れねえなあ」

「ふん……？」

　エドガーが起き上がった。

「よし、見てろ──アル・アジフ！」

　魔ま導どう書しよの形態で傍かたわらに置かれていたアル・アジフがページの形で宙に舞まい上がり、黒い術マギウス・衣スタイルと化してエドガーの体に纏まといついた。

　エドガーは翼マギウス・ウイングを広げて甲板から飛び立つと、魚群の上に滞たい空くうした。

「アイオーン──捕アト縛ラツ呪ク＝法ナチヤ!!」

　ゴッ──!!

　エドガーの背後の空間から突つき出した、鉄道の客車ほどもある鋼はがねの柱──部分招しよう喚かんされたアイオーンの右みぎ腕う

で──その手のひらから、光のロープで編まれた蜘蛛くもの巣のような網あみが生じ、海中に投じられた。

　エドガーが拳こぶしを突き上げる動きに連動して、アイオーンの鋼の腕が、網の端はしを握にぎったまま持ち上げられた。網にはマグロの群れがぎっしりと掛かっている。

「そォ……らァッ！」

　アイオーンの腕は、網を振ふり回すようにしながらゴリアテの甲板の上に移動させ、中身をぶちまけた。

　体長三メートルを超こえるマグロが数十匹ぴき、海水と共になだれ落ちると、機体を揺ゆるがすほどの勢いで跳はね回った。

「いったいなんの騒さわぎ──なんだこれは!?」

　甲板に駆かけ上がった兼定が叫さけんだ。

「……すげえや！」

「お魚いっぱいだぁ！」

「はっはァ！　どうだ、人数分あるかァ!?」

「おい、気をつけてくれ！　洗せん濯たく物がめちゃめちゃだ！」

「へッ！」

　エドガーは空中から兼定に言い放った。

「もう一度洗えよ、坊ぼつちゃま！」

+

　その日の後半、甲かん板ばんはマグロの解体作業に専有され、洗濯は翌日に持ち越された。

　翌日の朝、日が昇のぼると、兼定とバート、ほか数名の子供たち

は、大きなたらいと洗濯板で、昨日海水に浸つかったシーツや三十人分の下着を手洗いしていった。

「まったく、海の上じゃ、真水は貴重なのに」

　バートが手を動かしながらぼやくと、兼定が相づちを打った。

「同感だね。洗濯と漁は日をずらす必要があるな」

「どうせオルソンが焚たきつけたんです。あいつ、人のやることをすぐ邪じゃ魔まするんですよ。そのくせ、自分はさぼってばっかり」

　そのオルソンは今、昨日で航海中の仕事は済んだとばかりに、エドガーと共にひなたぼっこをしている。

「たぶん、狩しゆ猟りよう型というか、一発勝負に向いている子なんだな」

　と、兼定は所感を述べた。

「まあ、世の中にはそういうタイプもいるのさ。僕らはせいぜい堅けん実じつに行こう」

「はい、でも孤こ児じ院いんじゃ──あ、僕とオルソンは同じ孤児院の出なんですけど──ああいうはしっこい連中ばかりが得をするんです」

「ああ、監かん督とく者の目の行き届かない施し設せつでは、そういうことになりがちだろうね。でも、ミス・ダーレスは君たちをちゃんと公平に扱あつかってくれてるんだろう？」

「ええ、ありがたいことに。でも、あいつはきっと、僕が先生にひいきされてると思ってるんだ。僕はただ、当たり前のことを当たり前にやっているだけなのに」

「ふむ」

　兼定はふと、手を止めて言った。

「彼はきっと、自分がダーレス先生に愛されているか不安なんだろうな。だからつい気を惹ひこうといたずらをしてしまう。もっと言

えば、彼は君のことがうらやましいんだと思うよ。当たり前のことを確実にできる君のことがね」

「はあ、それは……そうかもしれません。でも、そんな風に考えたことはなかったな」

　バートは兼定を見上げた。

「兼定さんは、なんで僕たちのことがそんなによく分かるんですか？」

「ん？　ああ。僕もある意味、孤児院の出でだからね」

「え？」

「あれ、聞いてないのかい？　僕は三つから五つまでの二年間、アーカムの孤児院で育ったんだ。正確には、母が亡くなってから、父が迎むかえに来るまでの間。思えば、あれは僕が初めて政治というものを学んだ場所だったなあ」

「それは、その……すいません、意外でした。てっきり生まれついての御おん曹ぞう司しかと──」

「ああ、そう思うのも無理はないよ。〝覇道鋼造の息子むすこ〟といえば、世界一のお坊ちゃんだからね。しかし、ここだけの話、あの人はあんまり、父親としてはあてになる人間じゃないんだ……おっと、僕が覇道鋼造の悪口を言っていたことは秘密だよ。ミス・ダーレスに知れたら、また大目玉だ」

　やがて、兼定は手にしていたシーツをたらいにつけ込むと、

「やれやれ、君にはとんでもない弱みを握られちまった！　どうか共犯関係と願いたいね──よっと！」

　と、腰こしを押さえながら立ち上がった。

「ロープを張るのを、手伝ってくれるかい？」

+

　その後、大きな時化しけに遭あうこともなく、航海は順調に進んだ。

　十日後、翌日には北米の陸地が見えるであろう、最後の晩──

「……駄だ目めだ、やはりつながらない」

　兼定が無線機から顔を上げた。

　覇道財ざい閥ばつの、ニューヨークやボストンの支部からは応答があった──ただし、そこから聞こえてくるのは火星人の呼び声。それらの都市はすでに、火星人に占せん拠きよされているのだ。

　そうした状じよう況きよう下にあって、アーカムシティとの回線だけはノイズの音が聞こえるのみで、意味のある音声を拾うことはできなかった。

　しかし、

「よろしい」

　エイダは室内の面々を見回して言った。

「どうやら、まだ最悪の事態には至っていないようですね」

　電波によって侵しん略りやくする火星人が状況を支配したならば、より強力な攻こう撃げき的信号を発信するはず──つまり、アーカムシティは未いまだ、敵の手に落ちてはいないのだ。

　会議室兼けん司令所に割り当てられた船室には今、エイダ、兼定、エドガー、それにオルソンとバートが詰つめている。そのほか、二冊の魔ま導どう書しよの化け身しんのうち、Ｌ□Ａはパンチカードと化してゴリアテの操縦に当たり、アル・アジフは書物の形態でエドガーに携たずさえられている。

　エイダはテーブルに広げられた地図を指でなぞった。

「本機は明日、ナラガンセット湾わんからミスカトニック川河口を遡さかのぼり、アーカムを目指します。エドガー、あなたには進路前方の斥せつ候こうと先導を頼たのみます」

　だが、

「いやだね」

　と、エドガーは言った。

「俺はもともと、おまえらやアーカムや、覇道財閥やら地球の運命やら、そんなものがどうなろうが知ったこっちゃない。ただ、好きなように飛び回って、壊こわしたいように壊すだけだ」

「まだそんなことを言っているのですか！」

　エイダはテーブルに両手をつき、身を乗り出した。

「事はもはや、あなた個人の問題ではないのですよ！」

「ああ、うぜえなあ」

　エドガーは立ち上がった。

「ここまで陸に近づけば、もうこんなチンケな船に乗ってる必要もねえ。俺はもう行くぜ」

「待て」

　出口に向かって歩いていくエドガーの前に、兼定が立ちふさがった。

「我々には、君の力が必要だ」

「そいつは筋が違ちがうんじゃねえか？　あ？」

　エドガーはあごを上げて、兼定を見下ろした。

「前にも言ったろ。俺の力は自分の命を削けずって出してるんだ。いきなり『みんなのために使いましょう』じゃ通らねえよ。手伝って欲しけりゃ、ちゃんとお願いしてみせな」

「それは……確かにそうかもしれない。どうか――」

　兼定が下げた頭を、エドガーは思い切り殴なぐりつけた。

「い・や・だ・ね！　ヒャハハ！」

「う……！」

　兼定がその場にうずくまり、代わってエイダが、エドガーの肩かたに手を掛かけた。

「真面目まじめに話をお聞きなさい！」

「触さわンな、くそアマ！」

「きゃっ!!」

「へッ！　俺は誰だれの言うこともきかねえよ！」

　突つき飛ばされ、床ゆかに倒たおれたエイダに、エドガーは言い放った。

「どら、死ぬまでに火星人に奪うばわれた都市まちを二、三個潰つぶしてやる。せいぜい感謝―」

　その言葉が終わらぬうちに、立ち上がった兼定が、エドガーの頬ほおにストレート・パンチを叩たたき込んだ。

「ガッ!?」

「なめるな、チンピラがッ！」

　兼定はドスの利きいた声で言うと、拳こぶしを顔の前に構えた。

　訓練を受けたものではないようだが、場数を感じさせる、堂に入った構えだ。

「言って分からないようなら、拳こいつで教えてやるぞ！」

「てめェ……！　ブッ殺す!!」

　エドガーは〝魔ま刃じん鍛たん造ぞう〟の口こう訣けつを短く唱えると、右手にナイフ状の魔刃を呼び出した。〝バルザイの偃えん月げつ刀とう〟の小型版といったところだが、その刃はは必殺の呪じゆ力りよくを帯び、殺傷力は充じゆう分ぶんだ。

　だが、喉のど元もとに死の刃を突きつけられながら、兼定の勢いは止まらない。

「はッ！　おまえのような奴やつのやることはいつも決まってる！　手前勝手な理り屈くつが通じないと見れば、すぐに安っぽい光り物を持ち出すんだ！」

「てめ―」

「だがな、たとえそいつを使って僕を黙だまらせても、おまえの体に染しみついた負け犬の匂においは消せはしないぞ！　おまえがハッタリだけの小こ狡ずるい理屈屋であることを、おまえ自身が知ってしまったんだからな！　そうとも、おまえは一人前の責任を負うこともできないただのガキだ！　分かったか!?」

「……ッ！」

　エドガーと兼定は、数秒の間、恐おそろしい目でにらみ合った。

　やがて、エドガーが背後を向くと、船室の鉄てつ扉ぴにナイフを振ふるった。

　非常時の浸しん水すいに耐たえる分厚い鉄扉が、バターのように切り裂さかれ、蹴け り開けられた。この刃が兼定に振るわれていれば、彼はひとたまりもなく両断されていただろう。

「兄貴―」

　オルソンがおそるおそる呼び掛けると、エドガーは振り返りもせずに言った。

「俺はおまえの兄貴じゃねえ」

　有無を言わさぬ動きで船室を出ると、エドガーは術マギウス・衣スタイルを身に纏まとい、夜の海上へと飛び出していった。

「……坊ぼつちゃま！」

　その後、最初に口を開いたのはエイダだった。

「相手の態度にも問題があったとはいえ、人を説得しようという人が、あのような暴言を吐はき、あまつさえ暴力に訴うつたえるなど……とても紳しん士しのすることとは思えませんね！」

「あ、いや……」

兼定の表情から険が抜ぬけ、彼はしどろもどろに答えた。

「すまない、ついカッとなって……」

「エドガーには、次に会ったときに謝罪するのですよ」

エイダは両手を腰こしに当て、ふん、と鼻を鳴らした。

「まったく、男の子の扱あつかいの難しいことといったら！」

+

翌日正午、ゴリアテは北米東岸・ナラガンセット湾わんに進入した。

湾内から望める陸地は、かつて〝プロヴィデンス〟と呼ばれ、現在は〝焼野〟と呼ばれる、不毛の地だ。この地は数年前、突とつ然ぜん原因不明の大災害に襲おそわれ、数十万の市民と共に、跡あと形かたもなく壊かい滅めつしたのだ。

地形すらも変わり、今は不自然にえぐれている湾に、かつてのプロヴィデンス川に代わって、流れの変化したミスカトニック川が流れ込んでいる。

世界の首都・アーカムシティの玄げん関かん口に当たるこの地には、災害以降、何度も再開発の計画が立ったが、その度たびに原因不明のトラブルに見み舞まわれ、計画は頓とん挫ざしている。

そのため、アーカムシティには、意外なことに海運による物流ルートは存在せず、もっぱらボストン・ニューヨーク経由の鉄道輸送によって成り立っていた。

その〝失われた海運ルート〟を、今、ゴリアテは粛しゆく然ぜんと進んでいる。

ミスカトニック川河口から進入し、潜せん航こうしつつ西側上流へ向けて進行──

途と中ちゆう、潜望鏡を向けて観察する地上の風景は、地じ獄ごくのように荒あれ果て、人ひと影かげひとつ―火星人の姿すらも―ない。この呪のろわれた地は、火星人にとっても魅み力りよくのない場所なのだろう。今、この時だけは、それがむしろありがたい。

水面下を進むこと四十キロ余りにして、ゴリアテはアーカムシティの水門に辿たどり着いた。

通常は衛星都市との連れん絡らく船が往来しているはずのミスカトニック川は、アーカムシティの市内に入っても、ひっそりと静まりかえっている。それどころか、川沿いの通りにさえ、車や通行人の姿はない。

「僕が様子を見てこよう。君たちはここにいてくれ」

兼定がそう言って、ゴリアテを浮ふ上じようさせた時、一台の自動車が桟さん橋ばしに向かって走ってきた。

車から降りてきたのは、スーツ姿の老ろう齢れいの巨きよ漢かん―覇道鋼造の執しつ事じ、クロフォードだ。

クロフォードはゴリアテから身を乗り出した兼定に、深々と頭を下げた。

「お帰りなさいませ、兼定坊ちゃま。それに、お待ちしておりました、エイダお嬢じよう様さま」

+

ゴリアテを上陸させ、子供たちを覇道邸ていの地下施し設せつに収容すると、兼定とエイダはクロフォードに呼ばれ、ミスカトニック大学のアーミティッジ教授と面会した。

アーミティッジは、兼定にとっては何度か顔を見たことがある程度の人物だったが、エイダとは古くからの知り合いであるらしい。また、〝この種の非常事態〟における現場指揮を彼が任されているということは、ふたりにとって―いや、クロフォードにとっても

―当然の成り行きであるようだ。

「そんな重要なことを、僕だけが知らなかったとは……」

　兼定は頭を掻かいた。

「つまらないことを気にするようだが、蚊か帳やの外に置かれていた気分ですね」

「申し訳ありません、ミスター覇道ジュニア」

　アーミティッジは、ごく事務的に答えた。

「しかし、我々の誰だれもが、この世の有り様の一部しか知ることはできないのです。わたしもまた、自分の持ち場のわずかな領域の知識しか持ってはいません」

　―ともあれ、アーミティッジの説明によれば、半月前のあの日、地球上の主要な大都市は一いつ斉せいに火星人の手に落ちたのだという。わずかな例外が、鬼デウ械ス・神マキナアイオーンの手によって壊滅させられたロンドンと、アーミティッジの機転によって速すみやかに都市全域に妨ぼう害がい電波を流されたアーカムシティである。

「つまり、このアーカムが〝人類最後の砦とりで〟というわけですか？」

　兼定が言うと、

「現代社会の、という意味ではそうです」

　と、アーミティッジは答えた。

「しかし、彼ら火星人が侵しん略りやくの経路としたラジオ放送設備が、都市部にしか配備されていなかったことは、我々にとって幸運でした。つまり、彼ら火星人の侵略は、未いまだ〝点〟にしかすぎません。最悪の場合でも、占せん領りようされた都市群を最新の原子爆ばく弾だんで焼き払はらい、彼らを地球から追い払うことが可能です。むしろ、なぜ火星人がこのような尚しよう早そうな時期に侵略を開始したのかが疑問と言えます」

「あと十年待てば、人類の領土すべてにラジオ放ほう送そう網もう

が完備されていたのですものね」

　エイダが合いの手を入れると、アーミティッジはうなずいた。

「しかも、地球に攻せめ込んできた火星人がこのまま環かん境きように適応して定住できるとは考えられません。今のところ、乗っ取った人間の体を乗り物のように操あやつっているようですが、本来の脳を失った肉体は、やがて腐ふ敗はいして動けなくなります。その後、彼らが単独で地球の重力や大気に適応できるかははなはだ疑問です」

「つまり彼らには、そうした不都合があってすら『あと十年』が待てない理由があった……ということですかしら」

「そのように考えています」

「なにか、確信があるような口ぶりですね」

　兼定が言うと、アーミティッジはもう一度うなずいた。

「ミスター覇道の〝カノン計画〟が、その引き金になったと考えられるのです」

「初耳だな。なんですか、それは？」

　アーミティッジはわずかに逡しゆん巡じゆんしたが、意を決した様子で兼定に向き直った。

「いいでしょう。ミスター覇道不在の今、あなたはすべてを知る必要がある」

「すべて？」

「大まかに言えば、ミスター覇道は人類とそれ以外の勢力との闘とう争そうの最前線に立っていた……ということです。さらに言えば、敵対勢力の尖せん兵ぺいたる〝マスターテリオン〟と呼ばれる存在との戦いこそが、ミスター覇道と覇道財ざい閥ばつ、さらには人類すべての存在意義であると──少なくとも、ミスター覇道はそう考えていました。その戦いの最終局面となるのが、先月実行に移された〝カノン計画〟。フロリダの地に極ごく秘ひ裏りに建設された超ちよう巨きよ大だい砲ほうによって、ミスター覇道その人を地球大たい気き圏けん外まで打ち上げ、マスターテリオンとの最終決戦

に臨のぞむという計画です」

「ちょっと待った」

　兼定は軽く手を挙げた。

「一から十まで夢みたいな話ですが……火星人やら魔術師やらをこの目で見た以上、信じないわけにもいかないでしょうね。それに、巨大な大砲によって人間を地球の外に送るという話は僕も聞いたことがあります。実用化されているとは知らなかったが、あの父ならそれくらいのことはやってのけるでしょう。しかし──大気圏外での戦いというのは？　爆弾か機き関かん銃じゆうでも持っていくんですか？　それにしたって、そんなところで戦う理由が分からない」

「第一の疑問への答え──ミスター覇道の武器は〝デモンベイン〟です」

「〝デモンベイン〟……！」

　兼定は身を乗り出した。

「すでにミス・ダーレスからお聞きになっているかもしれませんが──デモンベインは覇道財閥が総力を結集して作り上げた巨大魔ま導どう機関です。覇道ジュニア、あなたがロンドンで見た〝鬼デウ械ス・神マキナアイオーン〟の機能を人工的に再現したものと考えれば分かりやすいでしょう。ただし、潜せん在ざい的なパワーはそれ以上──いや、理論上無限と言えます」

　兼定はうなずいた。デモンベインの存在とその概がい要ようについては、ロンドンからの道中でエイダに説明されていた。

　アーミティッジは言葉を続けた。

「また、その超絶的なパワーこそが、第二の疑問への答えです。デモンベインと、同等の力を持つと考えられるマスターテリオンの鬼デウ械ス・神マキナとの激げき突とつは、地上にいかなる被ひ害がいをもたらすか予測できません。地球そのものの破は壊かいをも辞さないマスターテリオンに対し、ミスター覇道には、地上の安全を確保しつつ戦える戦フイー場ルドを求める必要があったのです」

「それで、その戦いの結果は？　父が戻もどっていないということは、まさか……」

「不明です」

　アーミティッジはかぶりを振ふった。

「ミスター覇道との連れん絡らくは途と絶だえ、火星付近での確かく認にんを最後に、地上からの観測においても見失っています。おそらくは共に地上への帰き還かん能力を失って、漂ひよう流りゆうしているのではないかと思われます。また、そうした展開もミスター覇道のシナリオのうちにありました」

「つまり、最初から相打ち狙ねらいということか――」

　兼定の顔に、複雑な表情が浮うかんだ。

「相変わらず、勝手な人だな……」

「それで、今のお話の、〝カノン計画〟と火星人との関係は？」

　エイダの質問に、

「その件については、ふたつの可能性が考えられます」

　と、アーミティッジは答えた。

「まず第一に、長年地球を静観していた火星人が、ミスター覇道の〝カノン計画〟に対し、〝地球人による火星侵略〟の脅きよう威いを感じた――というシナリオ。つまり、火星人による先制攻こう撃げきです。そしてもうひとつは、マスターテリオンとなんらかの協力関係にある火星人が、地球人によるミスター覇道の救助を妨ぼう害がいしようとしている――というシナリオです」

「なるほど……しかし、後者であるとすれば、それは逆説的にミスター覇道の生存の可能性を示し唆さすることになりますわね――ＬＡ、正解は？」

「は？」

　怪け訝げんな顔をするアーミティッジの目の前で、エイダの抱かかえていたパンチカードの束が渦うずを巻いて舞まい上がり、十二歳ほどの少女の姿を取った。

「【機械語写本】！　なぜ君がここに!?」

L□A□□【機械語写本】の精せい霊れいは答えた。

「我が主マスター覇道鋼造は、マスターテリオンと共に封印される寸前、私を無線電信情報の形で地球へ送ったのだ」

「救助の要よう請せいのためか？　ミスター覇道は生きているのだな!?」

「それは不明だ」

L□Aは言った。

「私の帰還の目的は、あくまで〝火星人の妨害〟だ」

「妨害──火星人の目的が分かっているのか？」

「イエス。彼らの目的とはマスターテリオンの意志の遂すい行こうだ。彼らはマスターテリオンによって火星の地表に発生させられた奉ほう仕し種族であり、その種族的存在意義は、彼らの神であるマスターテリオンの、封ふう印いんからの解放だ。一方覇道鋼造の望みは、我々がそれを妨害し、自らはマスターテリオンと共に永久に封印されることにある」

「なんと……」

「つまり、父は僕らに、自らの帰還の可能性を完全に断てと言っているのか」

「イエス。それが我が主あるじの望みだ」

「そんなことが、できるわけがないだろう……！」

「しかし、そうしなければマスターテリオンは復活し、我が主あるじの希望は無に帰するだろう」

「しかし……」

「選せん択たくの余地はない。手をこまねいていれば、人類の未来そのものが潰ついえるのだ」

L□Aの言葉に、その場が重い沈ちん黙もくに支配され始めた、その時──

「―ふむん」

　と、エイダが鼻を鳴らした。

「ミスター覇道を助けるにしろ、言いつけ通り見殺しにするにしろ、なにはともあれ―火星に行かないことにはお話になりませんね」

+

　覇道鋼造は、宿敵マスターテリオンとの決戦の場を宇宙に求めた。しかし、デモンベインに飛行能力はない。脚きやく部ぶの空間歪わい曲きよく機構によって瞬しゆん発ぱつ的な機動力を得ることはできるが、それのみで地球の重力を振り切ることは不可能だった。

　そこで覇道鋼造が考案したのが、〝カノン計画〟だ。

　まず、フロリダに砲ほう身しん二七〇メートルのコロンビヤード式超ちよう巨きよ大だい砲ほうを建設する。その巨大砲から発射される弾だん丸がんとは、覇道鋼造の搭とう乗じようする小型宇宙船だ。

　地上から打ち出されたそれが地球周回軌き道どうに乗ったところで、覇道鋼造は手荷物として携たずさえていた【機械語写本】と共に招しよう喚かん儀ぎ式しきを行ない、デモンベインを地上から呼び出した。覇道邸てい地下に建設された〝虚きよ数すう展開カタパルト〟は、覇道鋼造の意志の存在するところにデモンベインを送り出すことができるのだ。

　宇宙空間に出現したデモンベインは、呪じゆ術じゆつ的な力フィー場ルドによって覇道鋼造を保護しながら、宿敵マスターテリオンとの決戦に向かい―その後の顛てん末まつは、アーミティッジとＬ□Ａが語った通りだ。

　アーミティッジの見立てによれば、この度たびの火星人の攻撃は、地球人の都市を無力化するに留とどまり、その波は及きゆう効果は甚じん大だいではあるものの、それ以上の被ひ害がいを直接的

にもたらすものではなかった。

　曲がりなりにもこの一いち撃げきに耐たえた地球人類の、次は反撃の手番である。

「しかし、どうやって？　もっと大きな大砲を作るのかい？」

　兼定が言うと、エイダが答えた。

「それもひとつの方法ですが、選択肢しは他ほかにもあります。例えば大型飛行機を改良した地上／宇宙輸送機や、噴ふん射しや推進式の宇宙戦せん艦かんなど──もちろん、魔ま術じゆつの応用も視野に入れるべきでしょうね」

　アーミティッジが言葉を引き継ついだ。

「とにかく、まずは地球から火星人を一いつ掃そうして、反撃の足場を固めることです。幸い、我々の拠きよ点てんとなるこのアーカムシティは無傷、かつ、時間は我々に有利に働くはず──」

　しかし、その目算は甘かった。

　彼らの会見が終わるより早く、アーカムシティ全域に非常警けい戒かいを告げるサイレンが鳴り響ひびいた。

+

　その日、アーカムシティを襲おそったそれは、遠目には海に浮うかぶ海月くらげに似ていた。

　ただし、巨大な鋼鉄の、空飛ぶ海月だ。

　直径十五メートルほどの円えん盤ばん状の頭部から、三本のコンパスのような細い脚あしが、触しよく手しゆのように垂れ下がっている。円盤部の上面では蒸気機関車のような煙えん突とつがもくもくと黒煙を吐はき、下部にはこれまた蒸気機関車の前照灯を思わせるひとつ眼が、ちかちかと点てん滅めつしている。また、円盤の周しゆう縁えん部はレール状になっており、高速で回転していた。

〝海月〟の数は三体。ニューヨーク方面から鉄道沿いにアーカムシティに接近し、路線を封ふう鎖さするバリケードを次々と、風船が飛ぶようにふわりと乗り越こえた。その動きは重さを感じさせないものだったが、着地するや、三本の脚は路面や鉄骨の入ったビルを打ち崩くずした。頭部と比べれば細く見えるが、その脚の一本一本が、鑿さく岩がん機きにも似た鋼鉄のスパイクなのだ。

三体の巨大海月―火星人の戦せん闘とうマシンは、汽笛のような音を立てながら歩き始めた。

アーカムシティ市街は先日来、戒かい厳げん令れい下にあり、通りには人ひと影かげはなかったが、次々と打ち崩される建物の中から、市民らは飛び出し、あるいは負傷した体を引きずりながら逃にげまどった。そして、それらすべての人々の上に、戦闘マシンの〝ひとつ眼め〟から放たれた熱線が降り注ぎ、彼らは路上に焼け焦こげた影のみを残して消しよう滅めつした。

アーカムシティの中心部に向かって突つき進む三体の戦闘マシン、その目的は明らかに、侵しん略りやく電波に屈くつ服ぷくすることのない、地球人類の反逆の砦とりでアーカムシティを、物理的に蹂じゆう躙りんし灰かい燼じんに帰きせしめることにあった。

やがて彼らの前方に、マサチューセッツ州軍の砲ほう兵へい隊が

布ふ陣じんし、砲ほう撃げきを浴びせ始めた。

　しかし、野戦砲の直撃を受けても、戦闘マシンはその姿勢を大きく傾かたむかせるのみで、ゆらゆらと揺ゆれながらすぐに立ち直ってくる。まるで風船を殴なぐって壊こわそうとするようなもので、手て応ごたえがない。火星人は強力な装そう甲こうの代わりに、砲弾の衝しよう撃げき力を不可思議な方法で受け流すことによって防ぼう御ぎよしているのだ。

　地上を走る熱線のひと薙なぎで、砲兵隊は壊かい滅めつした。もはや阻はばむもののない火星の軍勢は、思い思いの方向に飛び回り、死と破壊をまき散らした。

　そのうち一体が、放射状の大通りに誘さそわれるように、都市の中心部・覇道邸へと向かい、熱線砲を撃うち放った。その余波のみで街路樹を炎えん上じようさせ、駐ちゆう車しやされていた自動車を爆ばく発はつさせながら、熱線は一直線に覇道邸へと走り、そして直撃した。

　──否、その威い力りよくは屋や敷しきの直前で非実体の盾に阻まれた。

　見れば、覇道邸の敷地の一部が坂状に落ちくぼんでいた。そして、地下格納庫への出入り口となるそこから、万能自走蒸気機関・ゴリアテが発進しつつあった。前方にかざされた手のひらには、輝かがやく五ご芒ぼう星せいが浮かび上がっている。

『火星人の皆みなさん!!』

　ゴリアテの拡声器から、オーガスタ・エイダ・ダーレスの声が響き渡わたった。

『おとなしく引き下がりなさい！　これ以上の横暴は許しませんよ!!』

　しかし、その言葉の意味を理解したのかどうか、火星の戦闘マシンは頭から突っ込むようにゴリアテに接近し、数十メートル手前で大きく飛び上がると、三本の脚を広げて空中からつかみかかった。

「前進ッ!!」

「はい！」

エイダの号令でバートが操縦席のレバーを倒たおし、急発進したゴリアテは、鋭するどい爪つめの下をかいくぐって走り抜ぬけた。

それだけではなく、

「つかまえたァ!!」

腕わん部ぶ操作を担当するオルソンが叫さけんだ。

ゴリアテの右手は、すれ違ちがいざまに戦闘マシンの細い脚を捉とらえていた。

「行くぜタコ！」

ゴリアテは頭上で戦闘マシンをハンマーのように振り回し、仲間の一体に叩たたきつけた。二体のマシンは共に頭部から火を噴ふきながら、地上にくずおれる。

その隙すきに、残る一体が背後からゴリアテに組みついた。

ゴリアテは脚をつかんだが、戦闘マシンの位置は死角になる上に、脚の力が思いのほか強く、引きはがすことができない。

「後退ッ!!」

「はい！」

ゴリアテは後ろ向きにビルに打ち当たった。しかし戦闘マシンは脚をゴリアテの機体に絡からませたまま離はなれず、さらに頭部の〝ひとつ眼〟―熱線砲を向ける。

「〝バルザイの偃えん月げつ刀とう〟！」

（―了りよう解かいした）

ゴリアテの頭脳たる解かい析せき機関に宿ったＬ□Ａが答えると、空中に巨きょ大だいな魔ま刃じんが生じ、ゴリアテの右手に収まった。

「オルソン、投げて！」

「おうッ！」

ゴリアテは右手を振りかぶり、偃月刀を前方に投げ打った。偃月刀はブーメランのように回転しながら上じよう昇しようし、ゴリアテの頭上で大きな弧こを描えがくと、今度は垂直に落下し、ゴリアテに組みついた戦闘マシンの頭部を貫つらぬき、爆発させた。

+

エイダは三体の戦闘マシンの残ざん骸がいをゴリアテで回収すると、解体し、内部構造を調べた。

戦闘マシンの頭部──直径十五メートルほどのパンケーキ状の円えん盤ばんの内部には、一体ずつの火星人（の蒸し焼きになった死体）が入っていた。操縦装置に当たるものはなく、彼らは神経束の延長である触しよく手しゆの先せん端たんを直接機械の中に差し込み、神経伝達信号によって操作しているのだった。

これは彼らが地球人の肉体を操あやつるのと同様の方法であり、つまり、この戦闘マシンが彼らの新しい〝肉体〟であることを示していた。しかも、〝肉のスーツ〟──地球人の体──と違い、内部に相当規模の生命維い持じ装置を備えているため、長期間の活動が可能と見られた。

そのほか、円盤部には蒸気機関が内蔵され、マシン全体に動力を供給している。また、円周部の回転するリングは、内部機構と併あわせて一種の反重力装置を構成していると見られた。

この反重力装置や、各機に一基ずつ備えられた強力な熱線砲ほうは、地球では知られていない原理によって作られていたが、材質や加工技術は常識的な地球のものだった。つまりこれは、火星人が地球上の技術で作り上げた〝鋼はがねのスーツ〟なのだ。

このマシンを戦せん闘とう兵器と見るならば、ゴリアテによってどうにか対応できるため、決定的な脅きよう威いにはならない。しかし、これが火星人の地球上における活動を支し援えんする装置であると考えると、アーミティッジの予想における、地球側の〝時の利〟が失われることになる。これら火星人の鋼鉄の肉体は、現在、地球上の工業施し設せつによって量産されつつあるだろう。今や火

星人は、時と共に力を蓄たくわえていくことになる。時間は彼らに有利に働くのだ。

はたして、それから三日後──

無数の戦闘マシンが、再びアーカムシティを襲おそった。

+

それはまさに、地じ獄ごくの津つ波なみのごとき軍勢だった。

大気を轟とどろかせる汽笛の音、雨雲の如ごとく天を覆おおう黒こく煙えんを発生させながら、火星人の戦闘マシン群はアーカムシティを蹂じゆう躙りんした。

この事態を期して住民はすでに避ひ難なんさせられていたが、アーカムシティの司令塔とうたる覇道邸ていとそのスタッフは最後まで都市に居残っていた。

その覇道邸を、ミキサーのように建物を粉ふん砕さいしながら迫せまった何百機という戦闘マシンが呑のみ込んだ。

と──

覇道邸の地下から、巨大な鋼鉄の塊かたまりが飛び出した。

アーカムシティ脱だつ出しゆつの最終組──エイダやアーミティッジのほか、ダーレス学園の子供たちが乗り込んだゴリアテである。

ゴリアテはキャタピラを鳴らして走り出した。戦闘マシンの群れをすり抜け、時には乱暴にぶつかって押しのけながら、覇道邸への鉄道の引き込み線の線路上に乗り上げ、キャタピラを鋼鉄の車輪に換かえてさらに加速する。

二、三体のマシンが前方に立ちふさがったが、ゴリアテは偃月刀で斬きり払はらい、走り抜ける。

後方に取り残された戦闘マシン群が、熱線砲を一いつ斉せいにゴ

リアテに向けた。

　その時、上空からプロペラ音を鳴らして急降下するものがあった。覇道兼定の複葉機だ。

　複葉機は機体の尾び部ぶにスモークを焚たき、ゴリアテの背後に色つきの雲を作り出した。戦闘マシンの発する熱線はスモークによって拡散し、威い力りよくを半減させる。

　すると、戦闘マシンは反重力ジャイロの回転を上げ、次々に浮ふ上じようし、複葉機を追い始めた。

　兼定は右に左に機体を切り返し、戦闘マシンの合間を飛び抜ぬけていく。速度も小回りも兼定の複葉機が勝まさっているが、風船を思わせる戦闘マシンの群れに、徐じよ々じよに押し包まれていく。

　そこで、ゴリアテは手のひらに魔ま銃じゆうを呼び出し、地上から兼定を支援した。

　巨大な回転リボル拳銃バーから発射される呪じゆ力りよくの砲ほう弾だんを受け、兼定の前方の戦闘マシンが火を噴ふいて落下し、前方に空間がひらける。

　しかし同時に、ゴリアテの進路の確保が手て薄うすになった。戦闘マシンの一体が熱線砲を閃ひらめかせ、ゴリアテの前方の線路を大きく灼やき切った。

「ジャイロ始動！」

「はい！」

　ふわり―と、ゴリアテは地上から五十メートルほども飛び上がった。先日回収した戦闘マシンの残骸から取り出し、機体に組み込んだ、反重力ジャイロの効果である。

　もっとも、ゴリアテと戦闘マシンでは元々の自重が違ちがうため、完全な空中移動には及およばない。ゴリアテは数秒間滞たい空くうすると、平たい放物線を描えがいて、再び線路の上に着地する。

　そのさまを見て、兼定が胸をなで下ろした時、戦闘マシンの脚あしが鞭むちのように複葉機を捉とらえ、翼つばさを切り裂さいた。

「……ッ！」

　兼定は操縦席から放り出された。その姿を、戦闘マシンの目が捉える。空中で熱線に灼かれるか、はたまた地上に衝しよう突とつするか──

　結果はそのどちらでもなかった。

　ゴッ──！

　轟ごう音おんと共に飛来した鋼鉄の巨きよ鳥ちよう──鬼デウ械ス・神マキナアイオーンが兼定の体を空中で捉え、鋭するどい翼で数体の戦闘マシンを切り裂きながら飛び抜けた。

「エドガー……!?」

「ヒャハハハハ！　どうしたよ、坊ぼつちゃま!?」

　エドガー＝アイオーンはけたたましく笑いながら、線路を走行するゴリアテに速度を合わせ、その甲かん板ぱん上に兼定を放り出した。

　次いで、アイオーンはゴリアテを追い抜きながら両手にバルザイの偃えん月げつ刀とうを呼び出した。右みぎ腕うでに炎ほのお、左腕に氷の呪力が宿り、それぞれの手に握にぎった刃はに集中していく。

「オォラッ!!」

　アイオーンは二本の魔ま刃じんを構えると、頭から砲弾のように回転した。

　線路上に赤と青の二重螺ら旋せんが疾はしり、戦闘マシンを巻き込み、破は壊かいしながら飛び抜ける。

　──やがて、ゴリアテは都市部を抜けた。背後には遠く、至るところから火の手の上がるアーカムシティの街並みが見える。

　また、思い思いに破壊を繰くり広げる戦闘マシンの中の一群が、ゴリアテ追つい撃げきのための隊列を組みつつある。今は逃にげ切れても、やがて線路沿いに同様の軍勢が追ってくることになるだろう。

　前方を飛行していたアイオーンが空中で反転すると、ゴリアテの甲板に飛び乗った。

「おい、あれをぶっ放すぜ！　文句はねえだろうな!?」

「なに……！」

　兼定は逡しゆん巡じゆんしたが、

『……いいでしょう！』

　と、エイダは答えた。

『今は火星人の追撃を断つことを最優先します！』

「ハッハァ、よく言った！」

　アイオーンは両手を前方に向けて開いた。

「それじゃ、遠えん慮りよなく行かせてもらうぜ──呪スペ文ル・螺ヘリ旋クス！」

　光の二重螺旋が生じ、長大な〝神しん銃じゆう〟と化して、アイオーンの両手の中に収まった。

「ぶっ飛べ!!」

　魔砲陣が高速回転し、超ちよう魔力の砲弾を撃うち出し、そして──

　着弾点に生じた巨大な光球が、アーカムシティの街を呑のみ込んだ。

第三章 LONG SHOT 反撃の号砲

拘こう束そくは恐きよう怖ふを生む。

自由を奪うばわれることは、すなわち生命を奪われることに等しい。

その事実をエドガーが思い知った時、彼はまだ幼く、拘束をはねのける力を持たなかった。

エドガーと弟のアーサーは、バーミンガム界かい隈わいのほうぼうの孤こ児じ院いんに転がり込んでは、数週間で脱だつ走そうする──という生活を繰り返していた。政府や覇道基金の助成金目当てに孤児を受け入れ、子供の頭数を揃そろえようとする孤児院は多かったが、大たい抵ていの場合、そうした施し設せつの環かん境きようは劣れつ悪あくで、その内部では公然と虐ぎやく待たいが行なわれ、時には売春や人身売買が横行することすらあった。

その夏、兄弟が拾われたのは、慈じ善ぜん家で知られるトマス神父の教会だった。

「やあ、いらっしゃい」

神父は慈じ父ふの微笑ほほえみを浮うかべながら、両手を大きく広げた。

「今日からここが君たちの家だ。遠慮することはない。私たちは皆みな、神の子なのだからね」

「ありがとうございます」

神父の顔をまっすぐに見上げ、アーサーは言った。辛つらい境きよう遇ぐうにあってもねじれることのない素す直なおな心は、兄のエドガーが身を挺ていして守ってきたものだった。

一方、当のエドガーは、

「ああ、その、どうも」

　と、曖あい昧まいに頭を下げた。人の厚意を受けることには慣れておらず、警けい戒かい心が先に立った。

　しかし、

（……ここは、今までの場所とは違ちがうかもしれない）

　そのような期待が、エドガーにもあった。弟を抱だき締しめる神父の表情には、偽いつわりのない慈愛が顕あらわれていたからだ。

　その日のうちに、ふたりには温かい食事が与あたえられ、また、教会の子供たちに紹しよう介かいされた。

「彼らは皆、今日から君たちの兄弟だ。寂さびしくはないよ」

　これだけの人数を喰くわせるのはなかなか大変なことだろう、とエドガーは思ったが、子供たちの中にはやせこけたり怯おびえた目をしていたりするものは見あたらず、みな幸福そうに見えた。

　その理由は、神父の副業にあった。

　教会の裏庭は大きな花か壇だんになっており、趣しゆ味みの園芸家である神父が自ら手入れをしていた。

　そこで栽さい培ばいされた様々な種類の珍めずらしい花が、同好の園芸家たちに高値で買い取られ、教会の運営費にされているのだという。

　数日して、エドガーたちが教会に馴な染じみ始めたころ、神父はふたりに花壇を見せた。

「この花はナス科の植物の一種でね」

　そう言って神父が指し示したのは、五角形のラッパ型の花だ。

「普ふ通つうは白や青の花を咲さかせるんだが、栽培法を工く夫ふうしてこんな赤い花を咲かせることに成功したんだ」

　花の説明をする神父の口調は普ふ段だんよりもやや饒じよう舌ぜつになり、目には陶とう酔すい的な表情が浮かんだ。その表情にな

にか得え体たいの知れないものを感じたのか、エドガーの腕うでをぎゅっとつかみながら、アーサーは言った。

「……まるで、血みたいな赤ですね」

　神父は満足げにうなずいた。

「うむ、そうだね。実に美しい」

「……あれ？」

　ふと、アーサーが庭の一角に目を留めた。

「この庭には、物置がふたつあるんですね」

　エドガーがその視線を追うと、なるほど、庭にはふたつの小屋が建っていた。エドガーたちの近くにあるひとつは白いペンキが塗ぬられた真新しいもので、一方、やや離はなれた庭の奥にあるもうひとつは、教会の母おも屋やと同じくらいに古び、苔こけむした、石造りのものだった。伸のびた雑草を踏ふみ分けたあとが、獣けもの道みちのようにそこに続いている。

「ああ、古い方の小屋はこの教会の敷しき地ちに昔から建っていたものでね。肥料置き場に使っているんだよ」

　アーサーが、ふと顔をしかめた。

「……なにか、変な匂においがします」

「うむ、肥料の匂いが服につくから、あまり近づかないほうがいいね」

「はあ……」

　神父の話をうわのそらで聞きながら、アーサーは廃はい墟きよじみた小屋を見つめていた。彼には昔からどこか勘かんの鋭するどいところがあり、現在もまた、言葉にならないなんらかの気配を察知しているようだった。

　──それから数週間は、何事もなく過ぎた。

　アーサーは他の子供たちと徐じよ々じよに打ち解けていき、エド

ガーはやや離れたところでそのさまを見守った。彼自身は積極的に輪の中に入っていくことはなかった。馴なれ合うのは苦手なのだ。

　しかし―昼間ははつらつと遊んでいるアーサーが、夜になるとしばしば、なにものかの気配を感じ、怯えた様子でエドガーのベッドに潜もぐり込んできた。

　ある夜も、また……。

「兄さん、兄さん」

「うん……？」

　エドガーは目をこすりながら言った。

「どうした、アーサー」

　アーサーは耳を澄ますような仕草をしながら言った。

「庭のほうから、なんだか変な声が聞こえるんだ」

「気のせいだ」

　エドガーはいつものように、弟の肩かたを毛布の上から優やさしく叩たたいた。

「さっさと寝ねろよ。俺がいっしょにいるから、怖こわいことなんかないだろ」

「でも、兄さん。ほんとに聞こえるんだ」

　その時、床ゆかがみしりと鳴り、アーサーはエドガーの胸にすがりついた。

「神父様だ」

「妙みようだな、こんな時間に……」

「きっと、庭へ行くんだ」

「庭なんかに行って、どうするんだ」

「あの赤い花に、特別な手入れをするんだ」

「この夜中にか？　手入れって？」

「みんな言ってるよ……神父様はあの花に人の生き血を吸わせてるんだって。子供を集めてるのもそのためなんだ。あの庭の片かた隅すみの古い小屋には、人間から生き血をしぼり取る拷ごう問もんの道具がぎっしりつまってるんだって」

「馬ば鹿か馬ば鹿かしい」

　エドガーは笑い飛ばしたが、アーサーはその胸にすがりつくばかりだ。

「怖いよ、兄さん」

　その様子につられて、エドガーも息をひそめると、神父の足音はゆっくりと子供たちの寝しん室しつの前を通り過ぎていく。

「……よし。俺が様子を見てくる。神父様がなにをしてるのか確かめればいいんだろ」

　エドガーがそっとベッドを抜ぬけ出そうとすると、シャツの裾すそをアーサーが握にぎった。

「いやだよ、兄さん。怖いよ」

「大だい丈じょう夫ぶだ。おまえはここにいろ」

　エドガーはアーサーに言った。

「それに、知らなきゃいつまでも、ずっと怖いだろ。なんだって、種を明かしてみりゃなんでもないことさ。なあに、どうせ庭で小便でもしてるんだ」

「それじゃ……それじゃ、僕もいっしょに行く」

　アーサーは意を決して言った。

「ひとりじゃ、よけい怖いから……」

「よし」

　エドガーはアーサーの肩を叩いた。

　それから、兄弟は物音を立てないように靴くつを履はき、寝室を抜け出して、神父のあとをつけた。

　神父はランプを持って外に出ると、細い月の下、中庭の花か壇だんに入っていく。さらに、眠ねむるようにたたずむ花々の間を抜けて、中庭の奥へと──

「……やっぱり聞こえるよ」

　アーサーが、兄の腕うでにしがみついた。

「あの小屋だ。あの古い小屋の中から、変な声がする」

　やがて、エドガーにもその〝声〟が聞こえてきた。うめくような、ぶつぶつ呟つぶやくような……。

　神父はその声の方向に歩いていき、やがて小屋の中に入った。

「行くぞ」

「兄さん？」

「ちょっとのぞいてみるだけだ。おまえはここにいろ」

「いやだ、いっしょに行くよ」

　ふたりは足音を忍しのばせながら、神父のあとを追い始めた。

「ま、どうせ豚ぶたか羊でも飼ってるんだろ」

「なんでそんなもの、夜中に見に行くのさ？」

「さて、そこだ」

　エドガーはにやりと笑った。

「豚のケツでも掘ほってるんじゃねえのか？」

「『ケツを掘る』って、どういうこと？」

「神の愛を分け与あたえなさる、ってことさ」

「それっていいことだよね？　なんで昼間にしないの？」

「……しッ、聞こえるぞ」

　エドガーは小屋の周囲をざっと見回すと、神父の入っていった戸口に近づき、ドアの取っ手に手を掛けた。

　ドアを細く開けたとたん、塊かたまりのような悪あく臭しゆうが噴ふき出し、鼻先に叩きつけられた。

「うぷッ……！」

　思わずこみ上げる吐はき気けがおくびとなって漏もれると、小屋の奥からランプの光が差し向けられた。

「誰だれだね……!?」

「ひゃあ！」

　アーサーが思わず声を上げ、戸口から飛び退のこうとした拍ひよう子しに足を滑すべらせて転んだ。

「おい、大丈夫か!?」

「おや、君たちは……」

　神父が奥から出てきた。小屋に籠こもる悪臭を、彼はまるで気にしていないようだ。

「わあ、なんだこれ!?」

　アーサーが叫さけんだ。

「ベタベタしてる！　それに臭におい！」

「ああ、この辺りは床ゆかに肥料がこぼれているからね。エドガー、君は大丈夫かい？」

　それから、アーサーが落ち着くのを待って、神父はふたりに聞いた。

「なんで、こんな夜中に出歩いたりしてるんだい？　子供はちゃんと寝ねなければ駄だ目めだよ」

「はあ、その……」

　エドガーがここまでのいきさつを話すと、

「はっは！」

　神父は噴ふき出した。

「私が子供たちの生き血を絞しぼって肥料にしているって？　それで、赤い血を吸った花が血の赤に染まると？──ふふん、モリスにマークだな？　あの子らは、新入りの子が来るといつも、そんな嘘うそをついてこの小屋に来させるんだ」

「はあ……いったいなんのために？」

「それはつまり──」

　神父は説明した。

「ここは足あし下もとが悪いだろう？　夜などは特に、慣れていないとすぐに転んでしまう。肥料まみれになってべそを掻かく仲間の姿を指さして笑ってやろうという寸法だ。あまり質たちのよくないいたずらだね。一度、きちんと注意してやらなくてはいけないな」

　神父はひとしきり笑うと、こう言った。

「ともあれ、だ。こう言っては悪いが、園芸というのはそんなに単純なものではないよ。日照や土ど壌じよう、病気や害虫への対策。肥料ひとつとっても、窒ちつ素そ、燐りん酸さん、加カ里リ、石せつ灰かい、苦く土ど、硫い黄おう、その他の微び量りよう要素などのバランスが重要なんだ。……そうだ、ちょっと耳をすましてごらん」

　ふたりが言う通りにすると、闇やみの奥からふつふつとなにかが呟くような音が聞こえてきた。時々、げっぷのようなゴポリという音も混じっている。

「この小屋では堆たい肥ひと豚の糞ふんを混ぜて発はつ酵こうさせていてね。ああして、いつもガスが出ているんだ。君たちが聞いた『不気味な声』というのは、あれのことだね」

　ふたりがうなずくと、神父は言葉を続けた。

「前にも言ったかと思うが、ここの肥料は特別製でね。夜中にも窓

を開けたり火を焚たいたりして、室温を調整しなければ上手うまく仕上がらないんだ。一事が万ばん事じ、私が日ひ頃ごろどれだけ微び妙みような調整をしているかを思えば、『血を吸った花が赤くなる』などという乱暴な物言いは実に心外だねえ！」

「はあ、あの……すいません。怒おこりましたか？」

「冗じよう談だんだよ」

　神父は両手にエドガーとアーサーの肩かたを抱だいてい言った。

「君たちにはいずれ造園を手伝ってもらいたいと思っているからね。私の知識の秘中の秘についてまで伝授するつもりだ」

　その提案は、アーサーの興味を引いたようだった。

「僕らにも、あんなきれいな花が育てられるんですか」

「あの赤い花かい？」

　神父はかぶりを振ふった。

「あれももちろん珍めずらしいものには違ちがいないが、しょせんは売り物だからね。実はもっとすごいのがあるんだよ。──よし、こっちにおいで」

　神父はふたりを連れて、小屋の奥に入っていった。

　小屋の奥にあった階段を下りると、前方からゆるやかに風が吹いてきた。

　地下は意外と広く、通路を数十メートルも歩く頃には、この小屋が単なる物置ではなく、地下道の入り口とも言うべきものであったことに、エドガーは気づいていた。

　周囲の壁かべは地下の水気がにじみ出た、洞どう窟くつの壁のような状態になっている。通路の幅はばは左右に手のひらが突つけるほど。天てん井じようも妙に低い。また、道はところどころで枝分かれし、迷路のように入り組んでいた。まるで、蟻ありの巣穴だ。

　この地下迷路がどれだけ古いものかは分からないが、少なくとも教会が建つより前からあることは間違いないだろう。

「いったいどこまで歩くん……」

　エドガーが言い掛けた時、

「さあ、着いたよ」

　と、神父が立ち止まった。

　地下道の突き当たりにある古い、小さな扉とびらを開くと、その向こうから、なにかの光が漏もれだしてきた。

　クローゼットほどの広さの、やはり天井の低いその部屋の中央に、大きな花が生けられていた。ひと抱かかえほどもある大きな花弁を広げた、見たこともない花だった。

　しかし、大きさや形は問題ではない。なによりも目を引くのは〝色〟だった。

　燃える炎ほのおのように輝かがやかしく、星の光のように鋭するどく、宝石のように複雑で、虹にじのように変へん幻げん自じ在ざいなそれは、紛まぎれもない〝赤〟、ただし、エドガーたちが想像したことすらない、異次元の赤だった。地上の植物が――いや、他のいかなる物体とても、このような見事な色しき彩さいを生み出すことができるとは信じがたかった。

　しかし、現実にそれは存在した。先ほど漏れ出た光は、この花から発しているものだ。

「どうだね？」

　ふたりが言葉も忘れて見入っている様子を見ると、神父は満足げに言った。

「これは〝冥めい府ふの紅花〟と呼ばれている、たいへん珍しい花でね。陽ひの光の全く当たらない、洞窟の奥でしか咲さくことがないんだ」

「すごく、きれいですね……」

　憑つかれたような口調でアーサーが言うと、

「うむ、実に美しい」

　と、神父は答えた。

「この地下通路は原始的ながら精せい巧こうな空調装置になっていてね。この花を咲かせるためだけに、この巨きよ大だいな設備があるといってもいい。これを作ったのがはるか太古の穴けつ居きよ人じんか、それとも人間以前に栄えていたなにかの生き物なのかは知らないが、彼らが美というものを理解していたことは間違いないね」

「じゃあこの花は、神父様がここに来る前からあったんですか」

「うむ、この場所に根を張ってね。しかし、今よりずっと弱って、枯かれかけていた。私が手を尽つくして、ここまでの生気を取り戻もどさせたんだ。ひょっとすると、この花自身が助けを求めて、私をこの場所に呼び寄せたのかもしれないね」

　神父は赤い花に向けて、大きく手を広げた。

「この花は実に不思議な存在だよ。彼女が土中から吸い上げているのは、水や通常の栄養素だけではなく──私は学者ではないから正確なことは言えないが──土地の霊れい気きのようなものも含ふくまれるんだ」

「なんだ、そりゃあ……」

　とエドガーは呟つぶやいたが、神父の言葉は、ある程度の真実を含んでいるように思えた。炎のように揺ゆらめく赤い花弁は、何ヵ月も燃え続ける油田の火災のように、霊気──と神父が呼ぶ、なんらかの要素──を地中から吸い上げて、燃焼させているのだ。

　アーサーもまた、同様の印象を覚えた様子で、

「なんだか……分かるような気がします」

　と、真顔でうなずくばかりだ。

「同意してもらえて、うれしいよ」

　神父はアーサーの背をそっと押した。

「さあ、もっと近づいて、よく見てごらん」

アーサーは憑かれたような足取りで、赤い花にふらふらと歩み寄った。

そして、揺らめく花弁に触ふれようと、手を差し伸のべた時──

花弁に隠かくれた茎くきから鞭むちのような蔓つるが飛び出し、アーサーの腕うでに巻きついた。

「アーサー!?」

エドガーが駆かけ寄ると、別の一本の蔓が、エドガーの首に巻きついた。指ほどの太さしかない蔓だったが、その力は意外に強く、エドガーが両手でつかんでも引き離はなすことができない。

もう一本、さらにもう一本──エドガーとアーサーの手足に次々と蔓が巻きつき、瞬またたく間にふたりをがんじがらめにした。

「兄さん……！」

「くそ……なんだこりゃ!?」

エドガーが叫さけぶと、神父が一歩進み出た。だが、注意深く一定の距きょ離りを保っているようだ。

「ああ、言い忘れていたが、この花はハエトリソウのような性質を持っていてね。近くに寄ってきた栄養源を、自分で捕つかまえるんだ」

「な、ん、だと……！」

エドガーは唸うなるように言った。喉のどに巻きついた力強い蔓は、しかし、ある程度以上は締しめつけては来ない。この場でエドガーを絞しめ殺すつもりはないらしい。

「そう、この〝冥府の紅花〟──伝説の花を私が見つけたとき、彼女は枯れかけていた。この土地は霊的な力を失って久しく、また、彼女に養分を供する崇拝者も絶えて無く、生きるための栄養が足りていなかったんだ。そこで、私は彼女のための肥料を調達することにした」

「てめえが肥やしになりやがれ！」

「いやいや、自分が養分になるのもいいが、より多くの養分を与あたえて美しい花を観賞することは、それに勝まさる喜びだよ」

　神父はちらりとアーサーを見た。

「感受性の豊かな子供は、特にいい栄養になるようでね。もう何人か与えてやれば、〝紅花〟は往年の力を取り戻すだろう。そうすれば、彼女は今まで以上に強力な精神の波長で、周囲の人間を自由に呼び寄せ、餌えさとすることができるようになる。私に頼たよらずとも、人間の天敵にして支配者たる生物として、地下の世界に君臨することになるだろう」

「て、めえ――」

　エドガーが毒づこうとした時、

「ああ……兄さん！　兄さん！」

　アーサーが叫んだ。

　次の瞬しゆん間かんには、エドガーにもその感覚が襲おそってきた。

　額に当てられた蔓の先せん端たんから、さらに細く霊れい妙みような霊気の蔓が伸び、エドガーの頭ず蓋がいに侵しん入にゆうしてきた。

　蔓は脳のう髄ずいの内側を這はい回りながら、エドガーの精神を揺さぶり、掻かき回し、そして吸い上げていく。

　それは異次元の感覚を伴ともなう、激げき烈れつな苦痛だった。エドガーの視界が、この世のものならぬ赤に染まった。エドガーを縛しばる〝紅花〟は、彼の精神の色を吸い上げ、ますます赤く咲き誇ほこるのだ。

「兄さん、助けて……！」

　アーサーの声を聞きながら、エドガーもまた絶ぜつ叫きようし、全力で手て脚あしをよじった。

　しかし、〝紅花〟の蔓は一向にゆるむ気配はない。むしろ反射的にエドガーをきつく締め上げるばかりだ。

「くそったれ……弟だけでも放せ!!」

　エドガーが叫ぶと、

「そうはいかんよ」

　と、神父は答えた。

「彼女は無む垢くな子供を好むんだ。むしろ君のほうがおまけだね」

「じゃあ俺を放せ！　てめえをブッ殺して、こいつも切り倒たおしてやる!!」

「それもごめん被こうむるよ」

　神父はにこやかに笑った。

「しかし、その調子でどんどん怒おこってくれ。君の怒いかりは、彼女にまた鮮あざやかな色を添そえるだろう。とても楽しみだよ」

　神父はふたりを置いて、部屋を出て行った。

　ランプの光が去ると、室内を照らすのは〝紅花〟の発する赤い燐りん光こうのみとなった。

　エドガーは必死で身をよじった。しかし、〝紅花〟の蔓つるの拘こう束そくが解かれることはなかった。

　最初、きつく締められた部分の血が止まり、このままでは腐くさってしまうかと思われたが、手脚の温度かなにかを感じ取ったのか、蔓の力がゆるんだ。しかし、手を引き抜ぬこうとすると、即そく座ざにぎゅっと締まってしまう。エドガーたちは半ば宙づりになったまま、地下深く取り残された。不可思議な魔まの花の肥料として。

　それから、どれだけの時間が過ぎたのか。数時間か、数日か。

〝紅花〟からの吸い上げは断続的に行なわれ、その合間は思考することも、口を利きくこともできた。ただ身動きだけが取れないのだ。

「アーサー、大だい丈じよう夫ぶか」

　エドガーが呼び掛かけると、アーサーは弱々しくうなずいた。

「必ず助けてやるからな。がんばれ」

　そう言って励はげましたが、なんの当てがあるわけでもなかった。

　魔花の蔓はふたりの体力と精神力を徐じよ々じよに吸い取り、やがて抵てい抗こうの気力をも奪うばい去った。

　それから、どれだけの時間が過ぎたのか。数時間か、数日か、それとも数週間か。

　永遠と思える時間だった。

　アーサーはずいぶん前からぐったりとして、口も利けない様子だ。

　ただ、数時間に一度、蔓からの〝吸い上げ〟がある時には悲痛な叫びを上げるので、生きていることだけは分かる。

　また、その苦痛が精神の蔓を逆流してエドガーにも伝わってきた。エドガーとアーサーの精神が、怪かい植物を介かいして一体と化している──いや、共に怪物に取り込まれつつあるのだ。

　エドガーはその予想に恐きよう怖ふし、再び脱だつ出しゆつを試こころみた。

　すでに体を縛る蔓は解けていた。しかし、異次元の蔓は依い然ぜんとして彼の脳と精神を縛っており、指一本動かすことはできなかった。

　何日か、何週間か──ひょっとすると何ヵ月かの時間を掛けて、彼の知覚はじわじわと鈍にぶっていき、死の恐怖さえも徐々に薄うすれていった。

　そし、ついに──アーサーが死んだ。

　その感触が、エドガーの脳にも伝わってきた。

同時に、弟と融ゆう合ごうしつつあったエドガーの精神の一部も死んだ。エドガーの精神の半分は、凍こおりつくような死の虚きよ無むに支配された。

だが、残りの半分は──

（く……そ……!!）

恐怖と苦痛を超こえる感情が、エドガーの精神の奥底から湧わき出してきた。

（くそくそくそ、くそったれ……！）

それは、怒り。

炎ほのおのような怒り、頭ず蓋がいを内側から破は裂れつさせるほどの爆ばく発はつ力を秘ひめた怒りだった。

──トマス神父が再び〝冥めい府ふの紅花〟の下もとを訪おとずれたのは、翌日の晩だ。

エドガーとアーサーが味わった苦痛の日々は、実際にはわずか一晩の間の出来事にすぎなかった。一いつ般ぱんに辛つらい時間が長く感じられるように、無限の苦痛は無限の時間として感じられるのだろうか。

いや──神父が見下ろすアーサーの死体は、まるで何年も前に死に、そこに放置されていたかのように、やせこけ、干ひからびていた。あたかも全身に巻きついた蔓が、養分と共に少年の時間までも吸い取ってしまったかのようだ。エドガーもまた、老人のような、骸がい骨こつのような姿を床ゆかに転がしていた。

神父は満足げにうなずくと、鉤かぎのついた竿さおを使って、まずアーサーの死体を引き寄せた。次いで、エドガーの──

その時。

完全にミイラ化していると思われたエドガーの腕うでが動き、竿の先せん端たんをつかんだ。

「く、そッ……た、れ……！」

　干からびた腕が、恐おそろしい力で竿をたぐった。不意を突つかれた神父は、たたらを踏ふんで前方によろめいた。そこは〝冥府の紅花〟の蔓の射程範はん囲いだった。

　蛇へびのように躍おどり出た蔓が、神父の脚に巻きついた。

「うお……！」

　神父が叫さけび声を上げた。何人もの子供たちを魔の花への生いけ贄にえとしてきた彼自身が、ついに魔の花の餌え食じきとなったのだ。

　さらに、エドガーは残された精神力を、その怒いかりのすべてを、体内で爆発させた。

　炎のような怒りが、精神の蔓を逆流して〝紅花〟の本体に到とう達たつした。

　赤い花弁が、燃料を投入された炎のように激しく揺ゆらめき、ふくれあがった。

「おお、これは……」

　神父は陶とう然ぜんと呟つぶやいた。

「美しい……！」

　しかし、エドガーの怒りは〝紅花〟の許容量を超えていた。蔓が、葉が、花弁が、内側からの熱で火を噴ふき、全身をうねらせ、蔓を振ふり回しながらもだえ苦しんだ。

〝紅花〟はさらに、土中から根を引き抜きながらうねり狂くるった。

　根を張った蔓が急激に引き抜かれ、床や壁かべがぼろぼろと崩くずれ落ちる。

　そしてついに、天てん井じようが崩ほう落らくした。

「うおお……！」

「ヒャ、ハ、ハ、ハ……て、めえ、らも……道連れだァ

……ッ!!」

+

エドガーは闇やみの中にいた。

幸運なことに、全身が土砂に埋うまることは避さけられた。弱った体を懸けん命めいに動かして土の中から這はい出ると、そこはまだ、地下室の中だった。

神父と怪植物は、土ど砂しやの中に埋まってしまったようだ。

偶ぐう然ぜんである。

なんの勝算があったわけでもない。ただ本能的に、体内の精神力を爆発させたにすぎない。それが、怪植物の生態に破は壊かい的に作用したという、ただそれだけのことだ。

そもそも、この状じよう況きようとて〝勝利〟と言えるものではない。

先ほどの崩落は、この地下室の通気口と出入り口を塞ふさいでしまった。この上、土砂を掘ほり進む体力は、もはやない。立ち上がることさえできないのだ。

──今度こそ、死ぬ時だ。

漠ばく然ぜんと、そう思った。

恐怖も、後こう悔かいもなかった。

ここで死ぬのが自分の運命だと言われれば、そのような気もする。

もともと、誰だれに望まれて生きてきたわけでもない。好きなように生きて、力ちから尽つきたところで死ぬ。そのことには、なんの文句もない。ただ、他人の思おも惑わくのままに、なすすべもなく死ぬのが嫌いやだっただけだ。

しかし……幼いアーサーのことだけは、残念だった。エドガーの心には、弟の死の感かん触しよくが未いまだ色いろ濃こく残っていた。

アーサーは自分とは違ちがう。世間と馴な染じみ、平へい凡ぼんに、幸福に生きていくはずの子供だった。

そのアーサーを死に追いやった運命に対して、漠然とした怒りがあった。だがそれは、本人にとっても、どこに向けるべきか分からない、方向の定まらない感情だった。

いらだちにも似た想おもいを胸に、エドガーが目を瞑つぶった時――

視界の隅すみに、かさりとなにかが動いた。

それは一匹ぴきの鼠ねずみだった。不思議なことに、闇の中になお黒く浮うかび上がるように、はっきりとした輪りん郭かくを持って見ることができた。さらに不可思議なことに、それは燃えるように輝かがやく三つの眼めを持っていた。

――幻げん覚かくか、それとも――

エドガーは何とはなしに呟いた。

「死神って奴やつか……」

「いいや、違うね」

と、黒い鼠は答えた。理知的な、しかし、どこか嘲ちよう笑しようじみた響ひびきを帯びた声だった。

「私は君の味方だよ――今はね」

「嘘うそつけ。味方なら、もっと早く助けに来るだろ」

と、エドガーは言った。鼠が人の言葉をしゃべることには、不思議と違い和わ感かんを覚えなかった。

すると、鼠は平然と言った。

「ああ、すまない。そういう意味の味方ではないんだ」

　鼠は二本の後あと肢あしで立ち上がると、エドガーを見上げて胸を反らした。

「私はとあるゲームの〝観客にしてプロデューサー〟といった立場でね。直接手を出すことはできないが、力を望む者にそれを与あたえることができる。ただし、誰でもって訳じゃない。それ相応の才能がある人間に対して――たとえば君がそうだ」

　鼠は気取った手つきで片手を上げた。

「君は本来、ここで死ぬはずの人間だ。魔まの植物との精神的格かく闘とうの末、地下室に生き埋め――ふむ、小物とはいえ魔の存在の一いつ端たんに触ふれた者としては、そこそこまっとうな死に様と言える。これは君の本来の運命であるから、君にはもちろんこれを選せん択たくする権利がある」

　さらに、鼠はもう片方の手を胸の前で広げた。

「そして、私が提示するのは、もうひとつの運命だ。君は生きてここから抜ぬけ出し、力を手に入れる。人として最強の、いや、人間以上の力だ」

「ふん、どうも胡う散さん臭くせえ話だな」

　と、エドガーは言った。

「なにやらごたごた言ってるが、いったいなにが目当てだ」

　すると、鼠は答えた。

「いやいや、私は元来、混こん沌とんに奉ほう仕しする者だからね。君の振ふる賽さいの目がどう出るか、私の興味はそこにこそある。君にはちょっとした仕事をしてもらうつもりだが、それとても強制されるものではない。……さあ、どうかね？　君は定められた運命におとなしく従うか、それとも新たな力を手に入れて、自らの運命を切り開くか――ただし、その新たな運命の行く手は、今より悲ひ惨さんなものかもしれないがね」

　小さな手で鼻はな面づらをこすっていた鼠は、不意に顔を上げると、にたりと笑った。魔物の笑えみだった。

「……ははあ、さては貴様、死神じゃなくて、悪魔か」

「ああ、それは当たっているかもしれない」

　と、鼠はこともなげに言った。

「私のことをそう呼ぶ人間もいるよ。まあ、呼び名などはどうでもいいことだがね」

「代わりに魂たましいをよこせ、ってか」

「いいや、君からはなにももらうつもりはないよ。ただ、君の起こす行動が、私にとって有利な展開を呼ぶかもしれないと期待しているだけだ。まあ、相そう互ご利益といったところだね」

「ふん」

「さて、どうするね？　すぐに決心がつかないのなら、君が窒ちつ息そく死しするまでは待ってあげよう。私は気が長いんだ。時間もまた、私にとってはどうでもいいことだからね」

　鼠は傍かたわらの瓦が礫れきに腰こし掛かけると、人間のように脚あしを組んだ。

　しかし、

「よし、いいだろう。その話に乗ってやる」

　と、エドガーは即そく答とうした。

「てめえの言いなりも癪しやくだが、定められた運命とやらはもっと気に喰くわねえ。だが、いいか？　俺をはめようなんぞと思ったら、てめえを踏ふみ潰つぶしてやるからな！」

「では、契けい約やくは成立だ」

　鼠はそう言うと、深呼吸をするように、大きく胸を反らした。

「―いつでも踏み潰してくれて結構だよ」

　エドガーの目の前で、鼠の体がむくむくとふくらみ始めた。

　大きく、大きく、さらに大きく―鼠の体は犬よりも、人間よりも、牛や馬よりも大きくなり、やがて部屋いっぱいに体を押し込める、巨きよ大だいな魔ま獣じゆうの体を為なした。三つの眼はかが

り火のように燃え盛さかり、耳まで裂さけた口からは杭くいのような牙きばが何十本と覗のぞき、そして──

　ボッ──！

　低い破は裂れつ音と共に、その巨体が爆ばく発はつした。

　エドガーはその爆発に巻き込まれた──かと思うと、教会の庭に放り出された。

　いつの間にか、体力が回復していることに気づき、エドガーはおそるおそる立ち上がった。

　視界が、いつもと違ちがう。

　その違和感の正体が、視点の高さであることにエドガーは気づいた。

　両手を見ると、長い指をした大人の手が見えた。

　エドガーは自分の顔を触さわり、それから水みず瓶がめの水面を覗き見た。

　水面から覗き返してきたのは、記き憶おくにある自分より十歳ほども年長の、青年の姿だった。

　怪かい植物にとらわれて過ごした時間が彼を強制的に成長させたのか、あるいはあの黒い鼠ねずみが与えると言った力の一端がこの姿なのか。

「ハハハハハハハ──」

　細い月の下、風に乗って、魔物の笑う声が聞こえてきた。

「さあ、まずは一冊の〝本〟を探すことだ。その本の名は【死ネク霊ロノ秘ミコ法ン】。君に力をもたらす、最強の魔導書だ──」

　──数日後、トマス神父の姿が消え、教会はちょっとした騒さわぎになっていた。

　神父は行方ゆくえ不明の子供たちを捜さがしに出たまま、自らも消息を絶ったのだという。

しかし、その騒ぎの最中にひとりの青年がふらりと現れ、再び消えたことには、何なん人ぴとも注意を払はらうことはなかった。

+

「エドガー……？」

翡ひ翠すい色の瞳ひとみが、エドガーの顔を覗き込んでいた。

「どうした、うなされていたようだが」

「てめえの知ったこっちゃねえ」

「……そうか」

「ここはどこだ……？」

エドガーは半身を起こし、周囲を見回した。

簡素な部屋だが、先日のゴリアテの船室よりは広い。エドガーはベッドに横になっていた。

「覇道財ざい閥ばつの〝大たい砲ほう基地〟だ。汝なれが昏こん睡すいしている間に到とう着ちやくした」

それだけ言ってアル・アジフが黙だまり込むと、しばらくして、エドガーはぽつりと呟つぶやいた。

「……昔の夢を見てた」

「昔？」

「俺は早く大人になりたかった。大人の力を手に入れて、弟を守るつもりだった。しかし、いざ大人になってみると、弟はもういねえ。皮肉なもんだ」

「……魔術師マギウスの運うん命めいとは、しばしばそうした矛む盾じゆんを孕はらむものだ」

　と、アル・アジフは言った。

「適切な目的と力を持った者はまっとうな運命を生き、果たし得ぬ目的と大きすぎる力を持つ者が魔道を往くのだ。汝なれが魔術師としての運命を得たのは、生きる目的たる血族を失った、まさにそれが故ゆえであろう」

「ちッ」

　エドガーは舌打ちをした。

「もしそうだとしたら、運命とかいう奴やつは俺の敵だな」

「ならば、運命に抗あらがうがよい。それもまた、汝なれの運命なれば」

「てめえ、俺を馬ば鹿かにしてんのか？　混ぜ返しやがって」

「そうではない。妾わらわはただ警告するのみだ。汝なれは破は滅めつの縁ふちに立っていると──他の多くの術者がそうであったように」

　アル・アジフはエドガーを見上げて言った。

「エドガーよ。しかし、汝なれの生命を徒いたずらに消費させることは、妾の本意ではない。また、ナイアルラトホテップの思おも惑わくに従う義理もない。汝なれはまだ引き返せるのだ」

「引き返してどうすんだ。戻もどる居場所なんざどこにもねえ」

　エドガーはベッドから降りた。自前の革かわの服は、畳たたんでサイドテーブルに置かれていた。ジャケットに腕うでを通しながら、エドガーは言った。

「ふん、結構じゃねえか、火星人退治。せいぜいでっかい花火を上げてやるさ」

　エドガーが左手を突つき出すと、アル・アジフは一いつ瞬しゆんもの言いたげな顔をしたが、書物の形態を取ってエドガーの手に収まった。

　と、そこに一一

「目が覚めたか、マスター・オブ・ネクロノミコン」

　そう言って、覇道兼定が入ってきた。

「起きられるようなら、こっちに来てくれ。今から計画の説明がある」

「計画だァ？」

　エドガーは兼定を突き飛ばすようにしながら、戸口に向かった。

「俺は俺のやりたいようにやる。そう言ったはずだ。計画だの筋書きだの、知ったこっちゃねえよ」

「そう勝手なことを言うな。だいたい君は一」

「だいたい俺が、なんだって？　あ？」

　エドガーがあごを上げると、兼定もまた、鼻先をぐっと突き出した。

　揺ゆるぎない視線が、正面からエドガーの目を見み据すえる。

　一やっぱり、こいつは気に喰くわねえ……！

　エドガーの右手が、魔ま刃じんを呼び出すヴーアの印を形作った時一

「起きましたね、エドガー!!」

　オーガスタ・エイダ・ダーレスが飛び込んできた。

「お元気そうでなによりです！　あなたの無事は、あなた自身のみならず、地球人類全体にとっての幸運と言えるでしょう。マス

ター・オブ・ネクロノミコンの存在は、火星人に対する我々の反はん撃げき作戦の要かなめとなるのですから！」

「あー……」

　エドガーは悪態のひとつもつこうと口を開いたが、エイダの勢いに押されて声が出ない。

「さあ、こちらにおいでなさい！」

　エイダはエドガーの手を取り、先に立って歩き始めた。

「ちッ──調子が狂くるうぜ」

　引っ立てられるようにしながらエドガーがぼやくと、

「……その点は同感だ」

　と、後に続く兼定が言った。

+

　──それは、巨きよ大だいな鉄の井い戸どだった。

　内径二・七メートル、外径五・五メートル、深さ二七〇メートルの鋳ちゆう鉄てつ製の円えん筒とう。地面に掘ほり抜ぬかれた縦穴をそのまま鋳い型がたとして、地中に鋳造されたそれは、覇道鋼造の〝カノン計画〟の要、直径二・七メートルの砲ほう弾だんを衛星軌き道どうまで打ち上げる性能を持つ、超ちよう巨大コロンビヤード砲だった。

〝井戸〟の周囲には、溶よう鉱こう炉ろや資材運うん搬ぱん用の鉄道設備が解体されずに残され、また、再発射の準備のため、何百人という作業員が忙いそがしく立ち働いている。ふた抱かかえもある綿火薬の包みが人間の手で運ばれ、手動式クレーンでひとつずつ砲身の底に降ろされていく。引火を避さけるため、蒸気機関や電動機の類たぐいは用いられない。

トロッコに乗って井戸の口の至近まで来ると、アーミティッジは一同に説明を始めた。

ここフロリダ・ストーンズヒル山頂の〝大砲基地〟にて、覇道鋼造が使用した設備と予備の資材をそのまま流用し、最大の打だ撃げき力を持つ兵器を火星に送り込む――これが、アーミティッジの提案する〝第二カノン計画〟の概がい要ようである。

そして、現状、地球人類の持つ最強の兵器といえば――

「それはあなたです、マスター・オブ・ネクロノミコン」

と、アーミティッジは言った。

「鬼デウ械ス・神マキナアイオーンの破は壊かい力を考えるならば、あなたと魔ま導どう書しよ【アル・アジフ】のひと組は、同重量の原子爆ばく弾だんをも遥はるかに超こえる威い力りよくを持つ〝爆弾〟なのです」

また、一同は傍かたわらの倉庫に場所を移すと、巨大な釣つり鐘がね型の物体の前に出た。

「エドガー、あなたが乗り込むのはこの砲弾型宇宙船です。外がい壁へきはアルミニウム製、全長四・五メートル、直径二・七メートル、外壁厚四十五センチメートル、重量約九トン。内部には呼吸用酸素をはじめとする一ヵ月分の生命維い持じ設備、それに発射時の衝しよう撃げきを吸収する緩かん衝しよう装置があります」

エイダは「どうだ」と言わんばかりの表情で、エドガーを見上げた。

「この宇宙船に乗り組むことは、人類の存亡に関かかわる重要事であるのみならず、非常に興味深い科学的体験です。なにしろ、前ぜん人じん未み踏とうの――いえ、ミスター覇道に続く――宇宙空間への進出なのです！」

「ええと、これには推進装置はついていないのかい？」

と、兼定が言った。

「火星に向けて撃うったとして、万が一、狙ねらいが逸それてしまったら？」

　その質問に、アーミティッジが答えた。

「もともと、この宇宙船と、発射装置であるコロンビヤード砲には、地球大気圏けんの脱だつ出しゆつのための機能しかありません。照準装置もないため、火星を狙い撃つことは不可能です」

「では、どうやって―？」

「そこで、マスター・オブ・ネクロノミコンの出番です！」

　まずエイダが言い、次いで、リトル・エイダが説明した。

「鬼デウ械ス・神マキナアイオーンによる魔術的飛ひ翔しようならば、約五十時間で火星に到とう達たつする事が可能だ」

「なるほどな」

　アル・アジフがうなずいた。

「歴代の我が主マスターたちの中でも、地球を出て星の世界を垣かい間ま見みた者はまれだ。真空にして極ごつ寒かんの死の空間に耐たえるのは、魔術師マギウスの力を以もつてしても数時間が限度であるがゆえに。しかし、休息のための居住設備が随ずい行こうすれば、我らの行動範はん囲いは飛ひ躍やく的に拡大する」

「その通り！　覇道鋼造の科学と【ネクロノミコン】の魔術が手を組めば、向かうところ敵なしということですわ」

「ふむ……無む謀ぼうではあるが、完全に不可能というわけでもなさそうだ。エドガーよ、これは試こころみてみる価値のある作戦やも―」

　すると、

「けッ、嫌いやだね」

　エドガーはきびすを返した。

「俺ァ、穴蔵と狭せまい部屋が死ぬほど嫌きらいなんだ。アルミだかなんだかの棺かん桶おけに何日も押し込められるなんざ、まっぴらごめんだ」

「まだそんなことを──」

　と、小言を言い始めるエイダを制して、兼定が言った。

「ミス・ダーレス。彼とふたりで話をさせてくれ」

+

　一同から離はなれ、空き倉庫のひとつに入って鍵かぎを掛かけると、兼定はエドガーに切り出した。

「──まず、ひとつ謝罪させてくれ。先日、君をいきなり殴なぐったことは謝る。すまなかった」

「けッ、謝ったから帳消しだってか？」

　エドガーは床ゆかにつばを吐はいた。

「謝っていただく必要なんざねえよ。仕返しは俺のほうで勝手にやるぜ。半殺しにしてやるから覚かく悟ごしとけ」

「ああ、それでいい。事が済んだらいくらでもやってくれ。ただその前に、もうひとつ提案がある」

　兼定は胸の前に両の拳こぶしを構えた。

「君の進退だが──こいつで決めるとしよう」

「あァ？　なんだそりゃ」

「僕は君がどの程度の覚悟でものを言っているのか、見み極きわめさせてもらう。君は僕に覚悟の量を示す機会を与あたえられる。これはフェアな取引だ──行くぞ！」

　兼定は大きく踏ふみ込み、エドガーに殴りかかった。大味な動きだが、まっすぐに体重の乗った、鉄てつ槌ついのようなパンチだ。

「馬ば鹿かかてめえ」

　エドガーは兼定の拳をよけながらヴーアの印を結び、右手にナイフ状の魔ま刃じんを呼び出した。

　兼定は魔刃に一いつ瞬しゆん眉まゆをひそめたが、しかし怯ひるんだ様子はない。

「刃は物ものを使えば後こう悔かいが残るぞ！　君に誇ほこりがあるなら、武器はなしだ！」

「だからなんなんだよ、その妙みような理り屈くつはよ」

　エドガーはナイフを構えた。

「俺はもともと、てめえみてェな訳知り顔のお坊ぼつちゃんが大だい嫌きれえなんだよ。てめえにどう思われようが関係ねえ」

「奇き遇ぐうだな。僕も君のようなチンピラは大だい嫌きらいだ──だが、嫌いな人間に侮あなどられることほど不ふ愉ゆ快かいなことはないだろう！」

　兼定はナイフの存在を無視して、正面から突つっ込んだ。

「く、この……」

　エドガーは刃やいばを振ふるうことに躊ちゆう躇ちよした。その隙すきをついて、兼定のストレートが頬ほおをかすめる。

　二撃げき、三撃と続けて踏み込んでくる兼定の肩かたに、

「──なめんなコラ！」

　エドガーは肘ひじを打ち込んだ。

「ぐ……！」

　兼定は一瞬息を詰つまらせたが、姿勢を立て直すと再び殴り掛かった。

　エドガーは肘と脚あしで応戦するが、自分の構えたナイフが邪じや魔まで、動きが鈍にぶる。

　一方、兼定の攻こう撃げきは徐じよ々じよに勢いを増していくようだ。

「くそ……！」

　エドガーはナイフを放り捨てた。魔刃は床の上を一度跳はね、魔文字の粒りゆう子しに分解して消えた。

　身軽になったエドガーの反はん撃げきが始まった、大振りの兼定の攻撃をぎりぎりで見切りながら、鋭するどく踏み込み、確実にカウンターを当てていく。

　観客のいないボクシングの試合のように、ふたりの殴り合いは続いた。素す早ばやさと立ち回りの巧たくみさではエドガーが勝まさっていたが、一撃の重さ、そして心身のタフさでは兼定が勝っていた。殊ことに、エドガーの拳を何度喰くらっても再び立ち上がるのは、単なる肉体の耐たい久きゆう力以上に、執しゆう念ねんのなせる業わざだろう。

　喧けん嘩かの場数ではエドガーがはるかに勝っていたが、その経験の多くは一撃で勝負を決める、実戦的なものだ。このような、泥どろ仕じ合あいとも言える戦いになると、先行きは分からなくなってくる。

　十分後──

「けッ……なにが『こいつで決めよう』だ。弱ェくせに」

　床に這はう兼定を見下ろし、エドガーは血の混じったつばを吐き、そして──その場に尻しり餅もちをついた。

　入れ替かわりに、兼定がよろめきながら立ち上がった。

「まだまだ……！」

「今日はもうやめだ。めんどくせえ」

「負けを認めるか……！」

「そうじゃねえよ」

　エドガーは床に大の字に転がった。

「てめえなんかと殴り合ってもなんの得にもならねえ。馬ば鹿か馬ば鹿かしい」

「損得じゃないだろう、誇りの問題というのは」

「……さっきもそんなこと言ってたな。誇りがどうだとか、刃物がこうだとか。なんなんだ、いったい」

「ああ、あれは、つまり──」

　しばし逡しゆん巡じゆんしたのち、兼定は言った。

「……僕は一度だけ、人に刃物を向けたことがある」

「ほう、意外だな。喧嘩か？　それとも恐喝カツアゲか？」

「いや……殺すつもりだった」

「へッ、そいつは穏おだやかじゃねえな。どこのどいつを殺やろうとしたんだ？」

「覇道鋼造──僕の父だよ」

+

　三つの時に母が死んで、僕は五つの歳まで孤こ児じ院いんで育った。

　母に関してはうっすらと記き憶おくが残っているだけで、父については顔さえ覚えていなかった。

　別に珍めずらしい話じゃないが、僕のいた孤児院も、あまり環かん境きようのいい施し設せつとは言えなくてね。腹が減ったり喧嘩をしたり、まあ、よくある程度に辛つらい思いをした。

　で……子供ってのは世界が狭せまいからね。世の中の悪いことは全部、母を捨てて消えた父のせいだと考えた。なにか辛いことがある度たびに、まともに会ったこともない父への恨うらみを募つのらせたものさ。なにかとひがみっぽい、嫌いやな子供だったと思うよ。

　そんなわけで、自分は天てん涯がい孤こ独どくだと思っていたん

だが、ある日、いきなり孤児院に連れん絡らくが来てね。僕の父が生きていることが分かった。

　──今いま更さら、どの面つら下げて会いに来るんだ。

　その時は、そう思ったよ。

　今にして思えば、当時の父は単なる山師で、死んだ母は単なる運の悪い女だったということだったんだろうけれど……幼い僕にとっては、母の記憶は唯ゆいーいつの心の拠より所どころだったからね。ほとんど女神のように崇すう拝はいしていたんだ。その母を死に追いやった男と言えば、悪あく魔まも同然だ。

　──殺してやる。

　そんな物ぶつ騒そうなことを考えて、盗ぬすんだナイフをポケットに忍しのばせて待ち構えた。

　目の前に現れた父は、思ったより若い男だった。今の僕より歳下だ。

　抱だきつくふりをして、その腹にナイフを刺さした。

　しかし、所しよ詮せんは子供の力──いや、実際には本当に人を刺す覚かく悟ごなんて出来ていなかったんだな。ナイフの切っ先が三センチばかり刺さったところで、勢いが止まった。それ以上、刺すことも抜ぬくことも出来ない。ナイフを握にぎった僕の手の上に、父の手が被かぶさった。

　──殺される……！

　そう思ったんだが、しかし──父はもう片方の手で僕の肩を抱いて、言ったんだ。

「さあ、行こうか」とね。

　そして、自分の腹に刺さったナイフが周りに見えないように隠かくしながら、こう言うんだよ。

「君には辛い思いをさせたが、もう大だい丈じよう夫ぶだ。さあ、俺たちの家へ帰ろう」

　ここでウインクなんかしながら、

「ただし……その前に、病院に寄らせてくれ」

　刃は物ものまで出しておきながら、反対に気き遣づかわれてしまったわけだ。完全に僕の負けだった。

+

「その時から二十年余り……未いまだに父に対しては構えてしまう。正直言って、苦手な人だよ。父もそれを感じているんだろうな。あまり、僕とは話したがらない。まあ、世界で一番忙いそがしい人だから、もともといっしょに過ごす時間なんてないんだが……たまにアーカムに寄ったときも、どうも避さけられているような節がある。普ふ段だんからろくに居所もつかめなくてね。今日はエジプト、明日は南極。そして今度は火星と来た」

　兼定は肩をすくめた。

「僕たちはどうにも、距離のある親子なのさ」

「贅ぜい沢たくな話だな」

　大の字に転がったまま、エドガーは呟つぶやいた。

「俺には親おや父じもお袋ふくろもいたためしがねえ。弟がひとりいたが、そいつも死んじまった」

「そうだな。多分、僕は贅沢なんだろう。まあ、世の中には贅沢な悩みってものもあるってことさ」

　兼定はエドガーに向き直った。

「さて、君の質問には答えた。今度は僕の希望を聞いてくれ。『どうか地球を救ってくれ、エドガー』」

「てめえの言うことなんざ、聞かねえよ」

　と、エドガーは言った。

「……しかし、てめえの苦手なその親父とやらのツラを拝んでみるのも悪くねえか」

　その時。

　大きなサイレンの音が、倉庫の薄うすい壁かべを震ふるわせた。

　次いで、表からドアを激しく叩たたく音がした。

「兄貴、坊ぼつちゃま、大変だ！　火星人だ！　火星人が来たよ！」

+

　この〝大たい砲ほう基地〟への火星人の襲しゆう撃げきは、事前に予想されていたことではあった。オーガスタ・エイダ・ダーレスの〝ゴリアテ〟が、火星の戦せん闘とうマシンを引き連れてくる形になったのだ。

　ただし、ゴリアテのほうが速度が速いために、数日分の時間が稼かせげる。その数日のうちにマスター・オブ・ネクロノミコンを大気圏けん外に打ち上げ、地上に残った人員は〝大砲基地〟の地下施し設せつをシェルターとしてそこに立てこもる──という計画は、しかし、火星人の予測より早い到とう着ちやくによって変へん更こうを余よ儀ぎなくされた。

　その理由は、戦闘マシンに内蔵された反重力ジャイロの性質にあった。

　それらの装置のひとつひとつは、鋼鉄製の戦闘マシンを一時的に浮ふ遊ゆうさせる程度の効果しか持たなかったが、複数の機体が脚あしを絡からみ合わせてひと塊かたまりになると、相乗効果によって何倍もの飛行能力を発揮するのだ。

　地平線の上に、ひとつ、またひとつと、虫の子の塊のような戦闘マシン群が現れる。アーカムシティ襲撃の際より、総数はさらに増えているようだ。

マシン群体は次々と個体にばらけると、〝大砲基地〟に向けて隊列を為なして進み始めた。

+

倉庫から駆かけ出した兼定が、アーミティッジに駆け寄りながら言った。

「エドガーは火星行きを了りよう解かいしてくれた！」

「それはなにより。では―」

アーミティッジが、手元の通信機に向けて指示を出した。

「現時刻から十五分後に緊きん急きゆう発射する！　九〇〇秒より、秒読み開始！」

『了解、九〇〇より秒読み開始。八九九、八九八、八九七―』

作業を監かん督とくする司し令れい塔とうから秒読みの放送が流れ、発射場内はにわかに慌あわただしくなった。

速すみやかに火薬の装そう塡てん作業が終しゆう了りようし、砲ほう弾だん宇宙船が一同の前に引き出されてきた。

「エドガー、さっそく宇宙船の中へ！　時間がありませんよ！」

ガチャガチャと音を立てて、電モー動ター・服スーツ姿のエイダが歩いてきた。

「魔術師マギウスであるあなたは、緊急時には魔マギ術ウス師・スのタイ衣ルによって身を守ることができますから、この宇スペ宙ース用・モ電ータ動ー・服スーツを着る必要はないでしょう。アル・アジフと共に、速やかに宇宙船の中へ！」

しかし、

「……駄だ目めだ」

　砲弾宇宙船を見上げていたエドガーが、呟いた。

　青ざめた顔でくるりと振り返り、

「俺はあっちの火星人どもを片づけてくるぜ」

「いけません、エドガー！」

　その行く手を、エイダが遮さえぎった。

「あなたも知っての通り、今はこの〝第二カノン計画〟の遂すい行こうこそが最重要事です！　しかし、計画の要かなめたるコロンビヤード砲は一体の戦闘マシンによって容易に破は壊かいされてしまいます。数百機の戦闘マシンから同時にこの装置を守りきることは、アイオーンの力を以もつてしても不可能でしょう。また、もしそうなってしまった場合、我々に再建の機会が与あたえられるかははなはだ疑問です。よって、今はとにかく出発してしまい、そして、速やかに火星人の本ほん陣じんに打だ撃げきを与えることを最優先します！　お分かりですか!?」

「あ、ああ……」

「分かったら入りましょう！」

「いや、やっぱり駄目だ！」

「まだそんなことを言っているのか！」

　兼定が前に進み出た。

「ミス・ダーレス！　いいから詰つめ込んでしまおう」

「了解ですわ！」

「やめろ！　嫌いやだ！　狭せまいのは嫌だーッ!!」

（これも運命だ、我が主）

　エドガーの懐ふところで、アル・アジフが言った。

　エイダに両足を、兼定に両りよう脇わきを捕つかまえられ、エドガーはじたばたともがいたが、ふたりは協力して、昇しよう降こう口から砲弾宇宙船の中に、エドガーを放り込んだ。

「うごおおお！」

　続いて、

「行きますよ、リトル・エイダ」

（了解した）

【機械語写本】を携たずさえたエイダがガチャガチャと船内に入り、右手を上げた。

「では、行ってまいります！」

「よい旅を！」

　エイダと兼定がそう言い交かわすと、係員が駆け寄ってきて昇降口の扉とびらを閉め、ロックした。

　次いで、宇宙船はクレーンでコロンビヤード砲の砲口に運ばれ、三分余りの時間を掛かけて砲身の底部に降ろされた。

『四一二、四一一、四一〇──』

　秒読みは続いている。

　ドォン──！

　数百メートルほど離はなれた倉庫が、爆ばく発はつした。

「くそ、もう来たか……！」

　この辺り一帯が、戦せん闘とうマシンの熱線砲の射しや程てい距きよ離りに入ったのだ。

「皆みなさん、地下へ避ひ難なんしてください！」

　大声で叫さけびながら、兼定もまた駆け出した。

　その傍かたわらの路面を熱線の束が灼やき──

　めくれ上がり、はじけ飛んだコンクリートの破片が、兼定の周囲に降り注いだ。

ゴッ──

兼定の目の前に鋼鉄の壁かべが出現し、破片の雨を防いだ。

万能自走蒸気機関〝ゴリアテ〟の手のひらだ。

『先生たちは!?』

ゴリアテのスピーカーを通じて、オルソンが問うた。

「まだ砲の中だ！」

兼定は両手を口の横に添そえて叫んだ。

「あと五分！　あと五分だけここを守ってくれ！」

『了解！』

幸い、作業員の撤てつ収しゆうは速やかに済み、また、コロンビヤード砲の本体は地中に埋うまっているため、直接攻こう撃げきを受けることはない。直径わずか二・七メートルの砲口のみを守り通せばよいのだ。

ゴリアテは甲かん板ばん上に据すえ付けられた大小五基ほどの大たい砲ほうを乱射し、奮戦した。砲はこの〝大砲基地〟に置かれていた研究用のものだ。

『撃うて、撃てェ！』

ゴリアテの水平射しや撃げきによる弾だん幕まくが、戦闘マシンの隊列を乱し、押し戻もどす。アーカムシティでの戦いと同様、戦闘マシンに対し、実体弾の砲には決定的な効果はない。しかし、弾たまを当てることによって戦闘マシンの前進を止め、多少の時間を稼かせぐことができる。

しかし、

『九八、九七、九六──』

残り時間が百秒を切ったころ、徐じよ々じよにゴリアテが押され始めた。

リトル・エイダによる魔ま術じゆつ防ぼう御ぎよがない今、至近

距きよ離りから熱線砲の直撃を受ければひとたまりもない。

　その時、熱線砲の威い力りよくを半減させるスモークを焚たきながら、覇道兼定の複葉機が飛んできた。

　機体の尾び部ぶから下がったフック付きのワイヤーをゴリアテの手に引っ掛け、ワイヤーを伸しん張ちようしながら、兼定は戦闘マシンの脚あしの間を縫ぬうように低空飛行した。

　大きな弧こを描えがいて戻ってきた兼定は、ゴリアテの手元で宙返りをしてワイヤーを手首に引っ掛け、自分の機体からは切り離した。

「──引っ張れ！」

『おうっ！』

　ゴリアテがワイヤーを思い切りたぐり寄せると、十体余りの戦闘マシンが足あし下もとをすくわれ転てん倒とうした。隊列が大きく乱れ、火星人の軍勢は大きな混乱に陥おちいる。

「よし、退たい却きやくだ！」

『二〇、一九、一八、一七、一六──』

　秒読みの声を背に、兼定は急上じよう昇しようしながら、ゴリアテは坂を転げるように、それぞれのルートで基地を離れていった。

『五、四、三、二、一──』

　そして、その時が来た。

「発射!!」

　アーミティッジの号令の下、スイッチが入れられた電気着火装置が、八百包の綿火薬を同時に発火させた。

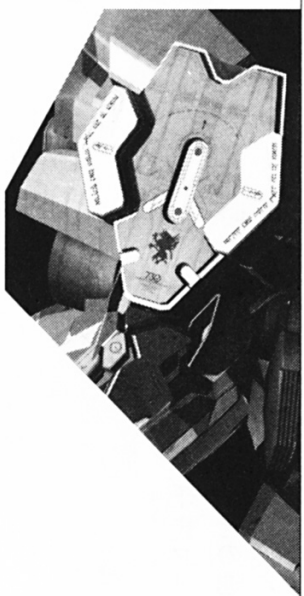
　火山の噴ふん火かを思わせる、しかし、より集中した凄すさまじい轟ごう音おんが、大地を轟とどろかせ、大気を爆ばく裂れつさせた。

　文字通りの地じ震しんと嵐あらしが周囲をなぎ払はらい、体勢を

立て直しつつあった火星の軍勢を、再び地面に打ち倒たおした。これを予想して山やま陰かげに入っていなければ、兼定の複葉機は空中分解していただろう。

　瞬しゆん間かん、光線のような爆ばく炎えんの束が天に向かって塔とうの如ごとく生じ、そして、太い煙けむりとなってたなびいた。

　地球の重力を振ふり切る超ちよう加速度を以もつて、ふたりの人間と二冊の魔ま導どう書しよを乗せた砲ほう弾だん宇宙船は一瞬にして雲を貫つらぬき、一直線に天頂へと向かっていた。



第四章 COSMIC FIGHT 宇宙的鬪争

砲ほう弾だん宇宙船は大気圏けんを突とつ破ぱし、地上千キロメートルの高度に到とう達たつした。

しかし、発射時・秒速約十キロに及およぶその速度でさえ、地球の重力を振ふり切るのに充じゆう分ぶんではなかった。初速が完全に減殺された後は、再び重力に引かれて落下する運命にある。

ただし、発射地点にそのまま落ちてくるわけではない。コロンビヤード砲にはわずかな射角がつけられていたため、砲弾は山高い放物線を描えがき、地平線の彼方かなた、地球の丸みの向こうへと落ちていく。そして、地球を通り過ぎたその先で、なお重力に引かれ、その場からさらに向こうへと落ち続ける。あまりにも大きな速度を持つものは、その勢いをもてあまし、地上に落ちることができないのだ。

地上の旅人が地平線を目指していくら歩いても、その先にさらなる地平線が現れるように、その旅程には終わりというものがない。つまり、ふたりと二冊の乗員を乗せたこの射出体は、夜空に浮うかぶ月と同様、地球の周囲を永久に巡めぐる衛星となったのだ。

だが、もちろん彼らには、衛星の身に甘んじるつもりなどさらさらない。

推進手段を持たない砲弾宇宙船に、光の粒りゆう子しからなる翼つばさが生えた。部分招しよう喚かんされた、アイオーンの機動呪じゆ法ほう〝シャンタク〟だ。

シャンタクの翼が大きく空間を掻かいて羽ばたき、砲弾宇宙船は加速を始めた。

巨きよ大だいな羽根の生えた卵といった体ていの、その船体の上に、腕うでを組んだエドガーが立っていた。真空、低温、宇宙線といった有害な要素は、術マギウス・衣スタイルの魔ま術じゆつ的防ぼう御ぎよで遮しや断だんしているが──

（エドガー、中に入れ。無む駄だに気力を消しよう耗もうするぞ）

　アル・アジフが言うと、エドガーは答えた。

「中のほうがもっと消耗するぜ」

　発射前後にはパニック状態になっていたエドガーだが、船外に出てようやく落ち着きを取り戻もどしたようだ。

　そこに、砲弾宇宙船の装置に読み込まれたリトル・エイダが、船内から声を掛かけた。

（原本ははよ、シャンタクの速度が充分に出ていないようだが）

（うむ）

　アル・アジフはエドガーに言った。

（エドガー、機動呪法による飛行とは、すなわち意識の旅の現実化だ。目的地に関するイメージが、術者の意識に強くあればあるほど速度は増す。目的地たる火星を強く、明確に思い描くのだ）

「ああ？　思い描くったって──」

　エドガーはもごもごと呟つぶやいた。

「火星ってのは、あれだろ……赤くて……赤いんだよな？」

　ゴンゴン、と、船内から宇宙船の壁かべが叩たたかれた。

『エドガー！　中にお入りなさい！』

　そして──

「──現在存在が確かく認にんされている太陽系内の惑わく星せいは水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星の八つ。火星はこのうち四番目の、地球のひとつ外側の軌道を巡る、地球によく似た惑星です。その公転周期は──エドガー！」

　エイダが教きよう鞭べん代わりの鉛えん筆ぴつを、ノートの上にぴしりと叩きつけた。

「授業に集中なさい！」

「うぜえなあ」

　エドガーは目をそらしながら言った。

「のんびりやってりゃ、そのうち着くだろ」

「その間に地球が壊かい滅めつしてしまいます！」

（ＹＥＳ、その可能性は高い。現在の速度で火星を目指した場合の到とう着ちやく予想時間は、およそ三年二ヵ月と十八日。その間に火星人は地球上から人類を一いつ掃そうできるものと考えられる。そもそも、この宇宙船の生命維い持じ設備はそのような長期の航行を想定していない）

「俺の知ったこっちゃねえよ」

「怠たい惰だの言い訳に厭えん世せい的態度を気取ることは許しません！　あなたには、自分の身が人間世界の要かなめであるという事実をよく自覚してもらわなければ困ります」

　エイダはそう言って、かぶりを振った。

「まったくもってこれは、『大きな力があっても、正しい知識を伴ともなわなければ意味がない』という、よい見本ですね。あなたがこれまで本格的な教育の機会を得られなかったというのは不幸なことです。しかし、今からでも遅おそくはありません。この事件が片づき次し第だい、我がＭ大付属学園に編入手続きを取りましょう」

「あァ？　ガキといっしょにお勉強なんかできるかよ」

「もちろん、いっしょというわけにはいきません。学園うちの子供たちはみな優ゆう秀しゆうですから、あなたは彼らを追う形で初歩の科目から始めなければいけません。早く追いつけるように努力していきましょう」

「冗じよう談だんじゃねえぞ、おい」

　しかし、エイダは真しん剣けんな口調で言った。

「エドガー、常人が望んでも得られない大きな力を、あなたはすでに手にしているのです。その正しい使い方を学ぶことは、あなたに課せられた義務だと──」

　その時、ジリリリリ……！　と、エイダの懐かい中ちゆう時計がベルの音を鳴らした。

「──あら食事の時間だわ。話は後にしましょう」

　エイダは食料の包みを保管用のラックから出し始めた。

「Ｌ□Ａ、お湯を沸わかしてください」

　ふと、なにか思い出した様子で、エドガーは呟いた。

「……『ダーレス先生は子供の飯を抜ぬいたりしない』ってか」

「当然です」

　と、エイダは答えた。

「食生活はすべての人間的活動の基き盤ばんです。これをおろそかにしてはいかなる成果も期待できません。──さあ、お祈いのりをして、いただきましょう」

　エイダとエドガーは濃のう縮しゆくスープと堅かた焼やきパン、それに塩しお漬づけ肉とピクルスの食事を取った。エドガーもそうだが、地球存亡の危機を前にしながら、エイダの食欲は衰おとろえることがないようだ。

　一方、二冊の魔ま導どう書しよは、その気になれば人間のように飲み喰くいすることもできたが、この場では、そのつもりはないとのことだった。長旅に備え、限られた食料を温存するという意味もあるかもしれない。

「ふん……思ったより喰えるな」

　バターを塗ぬったパンをぱくつきながら、エドガーが言った。

「ええ、覇道財ざい閥ばつの研究機関が用意したこれらの食料は、携けい行こう食としては最高品質のものです。あとは新しん鮮せんな野菜と……食後にアイスクリームがつけば完かん璧ぺきですわね。そう思いませんか？」

「そんな小こ洒落じやれたもんは喰ったことがねえよ」

「それはいけませんね。人生の大いなる損失というものです」

　エイダは大まじめに言った。

「我が学園では、給食には必ずデザートにアイスクリームを出すことにしています。『糖分なくして勉学ならず』。私の信念ですわ」

「へッ、甘いもんが喰いたくなったら寄ってやるよ」

　すると、エイダは素す直なおにうなずいた。

「それでいいでしょう。きっかけがなんであれ、最初の一歩を踏ふみ出すことには大きな意義があります。必ず来るのですよ」

「皮肉も通じねえのかよ」

　と―

（いや……妾わらわもその提案に賛成する）

　それまで無言で話を聞いていたアル・アジフが、ぽつりと言った。

（ひとたび魔道に踏み込んだ者が再び人間の世界に居場所を得ること、自らの意志で人類の代表チヤン戦士ピオンとなること―そのような考え方を、汝なれはダーレスから学ぶことができるやもしれぬ）

「なんだ？　この先生様のことをずいぶん買ってるじゃねえか」

（オーガスタ・エイダ・ダーレスは、地球上で最も強い希望を備えた人間のひとりだ。それは、我が著述者ちちアブドゥル・アルハザードが失い、かつ後生に期待した力そのものであるやもしれぬ。妾の預かる禁断の知とダーレスのような者らの伝える心の有り様を、ひとりの人間が併あわせ持ったとき、その者こそが最マス強ター・のオブ・魔ネクロ術ノミ師コンの中において、さらに最強の力を持つ者となるやもしれぬ）

「俺が、そうなるってか？」

（それは分からぬ。分からぬが……エドガー、目的なき最強者よ。汝なれが後こう悔かいなき生をまっとうすることを、妾は望む）

「……ふん、くだらねえな」

　エドガーは鼻を鳴らした。

「俺は他人にあれこれ言われるのが嫌いやで、おまえを手に入れたんだ。そのおまえに指図されたんじゃ、なにがなんだか分からねえ」

　そこに、エイダが口を挟はさんだ。

「エドガー、人が自由に生きるということは、獣けもののように瞬しゆん間かんの感情だけで生きることとは違ちがいます。自分がなにを為なすべきかを知ることこそが、真の自由というものです」

「あー、うぜえうぜえ」

　エドガーは顔をしかめた。

「いちいちくでェんだよ、話が」

「そうですね、こんなことを話している場合ではありませんでした」

　エイダは再びノートを広げた。

「さあ、授業の続きです！　火星の風景がありありと想像できるようになるまで続けましょう！」

「うえ」

　エドガーが顔をしかめたとき、

（その件だが、ダーレス―ひとつ提案がある）

　と、ＬＡが言った。

　数分後、ヘルメットを被かぶり、外部音声を遮しや断だんしたエイダに、

　―無線機の状態は良好だ。

　と、少女の形態を取ったＬＡが身み振ぶりで告げた。

「よろしい、では始めましょう」

　Ｌ□Ａの〝提案〟とは、こういうことである。

　砲ほう弾だん宇宙船に備えつけられていた無線機を解放し、地上のラジオと同様に火星人の侵しん略りやく電波をあえて受信する。これによってエドガーの脳に〝火星のイメージ〟を灼やきつけるのだ。

　もちろんこれは、反はん撃げき計画の要かなめであるエドガーを危険にさらす、不安定な作戦ではある。

　だが、

「まどろっこしいお勉強なんぞより、よっぽど手っ取り早ばええ」

　と、エドガーはそれを了りよう承しようした。

　そして──

　アル・アジフの体からなる術マギウス・衣スタイルが変形し、拘こう束そく衣のような形態となって、エドガーの体の自由を奪うばった。万が一、火星人に肉体を乗っ取られたときのための備えである。

　エイダの合図でＬ□Ａが無線機のスイッチを入れると、スピーカーから〝火星の音〟が流れ始めた。

　エドガーの目が焦しよう点てんを失い、その顔が恐きよう怖ふにも似たゆがんだ表情を浮うかべる。

「ぐ……おお……ッ！」

　無線機は三秒の間通電し、そして、再び電源を落とされた。三秒というのは、地上で覇道兼定が辛からくも火星人の精神的侵入を逃のがれた際の時間である。

　そして、その間にエドガーは垣かい間ま見みた。

　赤せつ褐かつ色しよくの極ごつ寒かんの荒こう野やと、人ならぬ異形の群れ──

「ク……クハハハ……」

（エドガー……気を確かに持て！）

　アル・アジフの声を無視し、エドガーは拘束を引きちぎりながら立ち上がった。

「……見えたぜ！」

「大だい丈じよう夫ぶですか!?」

（ひとまず休め、エドガー）

「必要ねえよ──シャンタク!!」

　エドガーは宇宙船の内ない壁へきに手のひらを当てて叫さけんだ。

　メギギギギ──

　金属を凄すさまじい力で無理矢理ねじり上げるような音と共に、砲弾宇宙船の外壁が震ふるえた。

　巨きよ大だいなアルミニウム製の弾だん丸がんから、さらに巨大な鋼鉄の翼つばさが生えた。エドガーの移動の意志によって、より明確に実体化した、機動呪じゆ法ほう〝シャンタク〟の姿だ。

「ぶっ飛ばすぞ!!」

　エドガーの宣言と共に、鋼の翼に唸うなるような音が生じ、高まり、そして──砲弾宇宙船は発射時を思わせる、いや、それ以上の爆ばく発はつ的加速を開始した。

+

　時は最接近に近い時期に当たり、火星は地球から約七千万キロメートルの位置にあった。

　その火星へと、宇宙船は一直線に突つき進む。

　空間を歪ゆがめながら思考の速度で機動する存在に対し、このような比ひ較かくは無意味だろうが──あえて言うならば、エドガーの推進する砲弾宇宙船はこの瞬間、通常空間における光速度に近い速さで飛ひ翔しようしていた。

　わずか数分で、火星が地球から見上げる月ほどの大きさに見え、次の瞬しゆん間かんには、それは視界をいっぱいに覆おおう巨大な壁かべとなった。

　乾かわいた血の染しみを思わせる禍まが々まがしい赤褐色の大地。そして、地表を縦横に走る線状地形──

（あれは……!?）

（そうだ、我が原本ははよ）

　アル・アジフの呟つぶやきに、Ｌ□Ａが答えた。

（火星の地表を覆うあの紋もん様ようは魔法陣。彼ら火星人の神、マスターテリオンを招しよう喚かんするための魔法陣だ）

「私たちは当初、あれらの地形を〝運河〟と考えていたのですが──」

　エイダの説明を、Ｌ□Ａが引き継ついだ。

（──それは正確な認にん識しきではなかったが、一面の真実を捉とらえていた。あれら、魔法陣を構成する〝線ライン〟は、火星の全ぜん霊れい力りよくを一点に集中させるための霊力搬はん送そう装置でもある。つまり、火星という惑わく星せい全体が、ひとつの巨大な招喚装置なのだ）

「細かいことはいい。要はそいつをぶっ壊こわせばいいんだろ」

「いいえ、そうではありません」

　とエイダが言い、

（魔法陣を壊すのではなく、書き換えるのだ）

　と、Ｌ□Ａが言った。

マスターテリオンの復活を阻そ止ししつつ、覇道鋼造とデモンベインのみを現世に喚よび戻もどすために、火星人の計画そのものを利用する。

──これが先日来、エイダとアーミティッジ、そしてＬ□Ａが計画していた作戦である。マスターテリオンを招喚するための儀ぎ式しきを、土ど壇たん場ばでデモンベインの招喚にすり替かえるのだ。

（では、今から手順を説明する──）

Ｌ□Ａが言い掛かけた時、火星の地表から、芥け子し粒つぶのような一群の物体が現れた。

それは、地球を蹂じゆう躙りんした火星人の歩行戦車──いや、それによく似た構造を持つ宇宙船だった。

大きさは歩行戦車よりひと回り小さく、その外装は黒い鋼鉄の代わりに半はん透とう明めいの樹じゆ脂し様の物質でできていた。そして、三本の機械の脚あしの代わりに、長短七本のしなやかな触しよく手しゆを備えていた。地球で作られたものは、これらのマシンのレプリカと言うべきものなのだ。

火星の本来の素材と技術によって作られた、これら真なる戦せん闘とうマシンの性能は未知数である。その動力は蒸気機関ではなく、そして、その武器は熱線砲ほうではなく──

頭部を先頭にして飛来してきた火星の戦闘マシンは、各おのおのに、七本の触手で不可思議な印を結んだ。と──白い滑なめらかな頭部に発光する魔法陣が浮かび、そこから巨大な呪じゆ力りよく弾だんが発射された。

一発、二発、三発──シャンタクの翼を持つ宇宙船は急激な機動でそれを回かい避ひするが、至近距きょ離りで呪力弾が通過するたび、空間の歪ひずみに引きずられて船体がきしむ。

「やりやがったな──出るぜ！」

エドガーは気密扉とびらをくぐり、船外の宇宙空間に飛び出した。

「アイオーン！」

ゴッ──！

鋼はがねの機体が空間を割さきながら顕けん現げんし、そして、

「ヒャッハァ！　ブッ飛べ!!」

エドガー＝アイオーンは両手にバルザイの偃えん月げつ刀とうを喚び出し、ひと息に投げ放った。灼しやく熱ねつと冷気の呪力を帯びた二本の偃月刀は二重螺ら旋せんの軌き跡せきを描えがきながら翔とび、戦闘マシン群の密集点へ──

だが。

戦闘マシンは触手の印を組み替えた。すると、頭部の魔法陣が防ぼう御ぎよ用のものに変わり──

機械の海月くらげは偃月刀の刃やいばに弾はじき飛ばされ、大きく後退した。だが、その機体に損傷はない。呪力の盾たては魔ま刃じんの威い力りよくを完全に防いだのだ。

「なッ──!?」

（油断するな！　奴やつらの呪法は単純なものながら、呪力ちからだけならば鬼デウ械ス・神マキナに匹ひつ敵てきするぞ！）

「くッ──！」

アイオーンの両手に、回転リボル拳銃バーが出現した。

ドドドドド──！

魔銃の弾丸が乱射され、戦闘マシンは射的の的のように次々と弾き飛ばされる。だが、数秒後には、ふわりとした動きで元の位置に戻り、全体としてはじわじわと包囲の輪を狭せばめてくる。魔法の盾の群れが、群れをなして押し包んでくるような形だ。

やがて、戦闘マシンは各々の触手を絡からみ合わせ、いくつもの、さらに強固な、巨きよ大だいな平面を作り始めた。こうなると、弾き飛ばし、押し退のけることもできない。

その上、火星の表面からは続々と後続が到とう着ちやくし、ある者は平面の端はしに結合し、ある者は呪力弾を発射する〝砲台〟と

なる。

　十と重え二十はた重えに迫せまる平面──いや、球面はやがて、アイオーンと砲ほう弾だん宇宙船を完全に包囲する完全な球体を構成し始めた。

「くそ、なめやがって……！」

（熱くなるな！　今はこの場を切り抜ぬけることだけを考えよ！）

「けッ、細けえこと言うな！　全部ブッ潰つぶしゃいいんだろ──呪スペ文ル・螺ヘリ旋クス！」

（エドガー！　この空間で全力を使い果たせば、術マギウス・衣スタイルが維い持じできずに死ぬぞ！）

「知ったことかよ！」

　エドガー＝アイオーンは術式の神柱を呼び出すと、杖つえ状の巨大砲に変えて両手に構えた。

　と、そこに──Ｌ□Ａを中ちゆう継けいして、エイダの声が割って入った。

『エドガー、聞こえますか──』

「止めても無む駄だだぜ！」

　──五秒後、エドガー＝アイオーンの〝神しん銃じゆう〟は撃うち放たれ、全力を使い果たしたアイオーンの機体は跡あと形かたもなく分解した。

　同時に、包囲球を完成させた戦闘マシン群は、球の内側に向けて一いつ斉せいに呪力弾を撃ち込んだ。

　瞬しゆん間かん、球内は破は壊かい的呪力の嵐あらしが荒あれ狂くるう死の空間と化し、再びそれが収まった時、そこには形あるものは、塵ちりひとつ存在しなかった。

＋

唯ゆいーいつの障害である地球からの遠えん征せい隊を退けた火星人たちは、後こう顧この憂うれいなく、火星開かい闢びやく以来最大の儀式を開始した。

創造主マスターテリオンの招しよう喚かん。それは、彼ら火星人の二万年の悲願だった。この日のためだけに、彼らは存在させられたのだ。

火星全土を縦横に走る〝線ライン〟―人工竜りゆう脈みやくの結節点それぞれに、軌き道どう上から帰き還かんした〝海月〟が取り憑つき、その頭部に魔ま法ほう陣じんを浮うかび上がらせた。

これら〝海月〟の正体は〝戦せん闘とうマシン〟ではなかった。その本来の目的は、霊れい力りよくの流れの強力な制せい御ぎよ装置。竜脈網もうの構成部品なのだ。

ある場所では堰せき止められ、ある場所では流れの方向を変えられ、〝海月〟に制御された流れは、刻々と変化する全惑わく星せい規模の魔法陣を形作った。

また、〝海月〟の周囲には生身の火星人が何重もの輪を作り、横列黙もく念ねん結手の姿勢を取った。精神のみで他星の生物を支配しうる強力無比な頭脳が、各々の神経束を直列につなぎ、完かん璧ぺきな同期を取りながら、彼らの神に向かって祈いのりを捧ささげた。

るるふ　らぅ　るふるう

づぃーあ　づぃーあ　づぃーあ！

いふふ　りぃ　るふるう

づぃーあ　づぃーあ　づぃーあ！

希き薄はくな大気に、かすかな、しかし底知れぬ力を秘ひめた呪じゆ文もんが響ひびき渡わたり、火星とその周辺の宇宙空間に、禍

まが々まがしい呪力の場が形成され始める。

　次元の壁かべが、徐じよ々じよに、しかし確実に薄うすくなり、その向こうに息づく何者かの気配が伝わってきた。

　詠えい唱しようは間断なく数時間に及および、その音調はますますいや高く、忌いまわしいものとなっていった。そして、儀ぎ式しきが最高潮に達するころ、巨大魔法陣の霊力流の焦しよう点てん、火星シドニア地区の巨大環かん状じよう列石の直上に、火星のふたつの月のどちらでもない、はるかに巨大な第三の月が生じた。暗い夜空を埋うめ尽つくさんばかりに視界いっぱいに広がる小恒こう星せい―破壊的な超高エネルギーを封ふうじ込こめた球状結界だ。

　火星人は各々、触しよく手しゆの先せん端たんを差し伸のべて神を讃たたえた。

　結界の中に、蠢うごめく超存在の影かげが見えた。その姿はあたかも、胎たい動どうする邪じや竜りゆうの卵だった。

　その神気のわずかな余波を浴びるや、火星人たちの何割かは脳のう髄ずいを破は裂れつさせて死に至り、そして生き残った者の間にはさらにおぞましい歓かん喜きの波が現れた。

　彼らの神が現世に降臨するとき、その刃やいばは彼らの体を切り裂さき、その毒は彼らの体を蝕むしばみ、その炎ほのおは彼らの体を焼き尽くすだろう。それこそが彼らの望み。道具として創つくられた種族の、穢けがらわしく、計り難がたい感性であった。

　火星人の間に、期待と恐きよう怖ふ、苦痛と歓喜、狂きよう気きと官能の綯ない交ぜとなった名状しがたい情動の渦うずが発生した。その渦はますます空間をねじ曲げ、現世と異界のほころびを押し広げ、彼らの神のための産道を形作る。

　―神が生まれる。

　神が生まれる。

　まさに、まさに今―

　火星人の群れが、招喚呪文の最後の一説を唱えようとした時―

　ドゥッ―！

天頂からひと筋の光が撃ち下ろされ、〝海月〟の一体を直ちよく撃げきした。

それは〝海月〟を破壊こそしなかったものの、その周囲にいた生身の火星人を衝しよう撃げきの余波で吹ふき飛ばした。また、〝海月〟が反射的に防御呪じゆ紋もんを展開したため、竜脈網の流れの一部が乱れた。

そしてさらに、

ド、ド、ド、ド、ドゥッ──！

はるか高空──火星の薄い大気圏けんの外側から火星全域の地表に向けて、高密度の呪力弾だんが立て続けに撃ち込まれた。

その一発一発が、過あやまたず〝海月〟の頭部に着弾している。

『ヒャハハハハ──そらそら、どうしたタコども!!』

二丁の魔ま銃じゆうで〝海月〟を狙そ撃げきしているのは、鬼デウ械ス・神マキナアイオーンだ。

──先刻、〝海月〟の包囲を受けたエドガーら一行を救ったのは、オーガスタ・エイダ・ダーレスの機転であった。

エドガーはエイダの指示に沿って、アイオーンの最大の武器である〝神銃〟を使用した。

しかし、その弾丸はそれまでのような、術者の全霊力を込めた呪力弾ではない。エドガー＝アイオーンは、砲ほう弾だん宇宙船を〝神銃〟に装そう塡てんして撃うち放ったのだ。

アイオーンの機体が分解した時、エドガーとアル・アジフはすでに宇宙船の内部に移動していた。ふたりと二冊の乗員を乗せた砲弾宇宙船は、超物理的な速度で包囲の隙すき間まを突とつ破ぱしたが、火星人がその事実に気づくことはなかった。

そして現在。

エドガー＝アイオーンは砲弾宇宙船と共に火星の高速周回軌道に乗り、〝狙撃衛星〟と化して火星全土に呪力弾の雨を見み舞まった。

火星人が、声ならぬ声の悲鳴を上げながら、のたくり逃にげまどう。

しかし、エドガーはでたらめに魔銃を乱射しているわけではない。その一発一発に、計算し尽くされた意味が込められている。

予期せぬ攻こう撃げきを受ける時、〝海月〟は反射的に防ぼう御ぎよの姿勢を取る。それは竜りゆう脈みやく網もうの制御弁が瞬しゆん間かん的に閉へい鎖させ、霊力の流れが変わるということでもある。

つまり、エドガーは〝海月〟の反射を利用して、火星の魔ま法ほう陣じんを書き換えているのだ。

Ｌ□Ａが計算した手順とタイミングが、アル・アジフを通じてエドガーに渡され、アイオーンの二丁の魔銃は〇・一秒単位のタイミングを計りながら、正確に〝海月〟を操作する。

魔法陣を構成する〝水路〟がふさがれ、あるいは連結され、Ｌ□Ａの計算通りに霊れい力りよくの流れを導かれていく。

その結果、地表に現れたのは──五ご芒ぼう星せい形の魔法陣。火星全体が、巨きよ大だいな五芒星を刻印された球体と化した形だ。

その姿は覇道財ざい閥ばつの地下格納庫に設置されている〝虚きよ数すう展開カタパルト〟に酷こく似じしていた。

鬼デウ械ス・神マキナデモンベインを実体から確率論的存在に変へん換かんし、任意の座標に再実体化させる魔術的転送装置。事実、その瞬間の火星は、それそのものの機能を有していた。

火星そのものを転送カタ装置パルトの代だい替たい品とし、デモンベインを招しよう喚かんする──そのプロセスが、Ｌ□Ａの計算とアイオーンの干かん渉しようによって着々と遂すい行こうされていき──

そして、エイダが最終段階の口こう訣けつを唱えた。

憎ぞう悪おの空より来たりて

正しき怒いかりを胸に

我等は魔を断つ剣けんを執とる

汝なんじ、無む垢くなる刃―デモンベイン！

空間が爆ばく裂れつし、鳴動した。

火星の地表から六キロメートルの空間に発生していた〝第三の月〟―球状結界を割って、それは出現した。

「ふあ……？」

エイダが思わず気の抜ぬけた声を出し、エドガーがのけぞった。

「ぬお―でけェ!!」

そう、それはエイダの見知ったサイズの十倍はある、巨大なデモンベインだった。

しかも、その力は十倍どころではない。そのデモンベインはかつて存在したいかなる形態よりも、精せい緻ちにして繊せん細さい、

かつ、大だい胆たんで力強かった。装そう甲こうの表面は霊気を帯びた呪じゆ文もんを駆かけ回らせながら高速で新しん陳ちん代たい謝しやし、何対もの手脚から、光、炎ほのお、電気、冷気―あらゆる要エレ素メントをほとばしらせている。その姿はまさしく神、実体化した機械の神だった。

（うろたえるな、エドガー）

　アル・アジフが言った。

（神というものは招喚の仕方によっていかようにも形態を変え得うるものだ。彼奴きやつら火星人は、惑わく星せいを丸ごと使い、マスターテリオンを最大の力を持つ形態で招喚しようとした。その儀ぎ式しきを応用して喚よび出したデモンベインがこのような姿で現れたとて、そう驚おどろくことではない―紛まがい物ものとはいえ、あ奴もまた一柱の神なれば）

　そのデモンベインは、巨大な眼めで周囲を見回し、神の洞どう察さつ力を以もつて、一瞬ですべての状じよう況きようを把は握あくした。

　そして、視線を遠く七千万キロメートル先の地球に向けると、額の射出穴からただ一発の呪力弾を撃ち出した。

　本体に比してあまりにも小さく見えたそれは、しかし、超ちよう強力な霊力の渦か動どうだ。光を超こえる速度で瞬時に地球に到とう達たつしたそれは、大気圏の手前で弾はじけると、数千の小しよう塊かいに分裂し、雨の如ごとく地上に降り注ぐと、地球各地の都市で蹂じゆう躙りんを尽つくす戦せん闘とうマシンの頭部を、ひとつ残らず正確に撃ち抜いた。

　次いで、デモンベインが手のひらのひとつを開くと、その上に、地球の幻ヴイ像ジヨンが浮うかんだ。

　浮ふ遊ゆうする小さな地ち球きゆう儀ぎはゆるゆると自転していたが―突とつ然ぜん逆回転を始めた。

　エイダたちには知るよしもなかったが、その時、同時に地球上では不可思議な時間逆転現象が発生し、火星人に破は壊かいされた都市及および、アイオーンに破壊されたロンドンとアーカムシティが、元通りに復元した。また、火星人に脳のう髄ずいを乗っ取られ

た地球人たちも、その肉体的変異は細さい胞ぼう単位で修復され、精神的にも状態を復元された。

　まさしく万デウス能・エクのス・マ神キナ―デモンベインの干渉によって、地球最大の危機は完全に修正されたのだった。

　しかし、

「……ミスター覇道！」

　エイダが歓かん喜きと共に呼び掛かけると、しかし、デモンベインは―いや、デモンベインと一体化した覇道鋼造の意志は彼女らに告げた。

『―すぐに私を封ふう印いんしろ!!』

「はい!?」

（なぜだ、マスター）

『奴が来る―』

「奴とは―？」

（まさか―）

『マスター……テリオン!!』

　その言葉が終わらぬうちに、デモンベインの胸を貫つらぬいて、鋭するどい鉤かぎ爪づめを持った手が現れた。デモンベインのそれに匹ひつ敵てきする、巨大な手だ。

　そして、さらにもう一本。

　肩かたから、首から、全身の関節から霊れい気きと炎、そして血のようなオイルを噴ふくデモンベイン。その右胸の内側から、二本の紅あかい腕うでが生えていた。

「ななな―なんですの、あれは!?」

（推測―）

　Ｌ□Ａの機械的な口調に、若じやつ干かんの焦あせりが混じっ

た。

（―デモンベインの第二心臓が招喚経路に利用されている……！）

　次の瞬しゆん間かん、紅い腕は亀き裂れつを割り広げ、デモンベインの上半身をほとんど真っ二つに引き裂さいた。その中から現れたのは、デモンベインと同様の大きさを持つ紅の機神―マスターテリオンの鬼デウ械ス・神マキナ〝リベル・レギス〟の姿だった。

+

　―覇道自身の言う通り、彼らは覇道鋼造を救おうとするべきではなかったのかもしれない。

　エイダらが招しよう喚かんした覇道鋼造とデモンベインは、火星人の脅きよう威いから人類を救った。だが同時に、さらに危険な存在を復活させてしまったのだ。

　地球人は火星人に対して無力ではない。困難な戦いではあるが、時間を掛けて態勢を立て直し、火星勢力を押し戻もどしていくことも可能だっただろう。

　しかし、マスターテリオンは違ちがう。

　彼こそは〝黙もく示し録ろくの獣けもの〟―人類の歴史の終しゆう焉えんを告げる、抵てい抗こう不可能な存在なのだ。

『久しいな、アル・アジフ……それに、オーガスタ・エイダ・ダーレスと【機械語写本】の精せい霊れいか』

　巨きよ大だいなリベル・レギス―マスターテリオンは言った。美しく、力強く、神こう々ごうしいまでの威い厳げんを帯びた、まさしく神の声だった。

『やはり、ここは礼を言うべきであろうな……貴公らの働きによって、余の復活がより劇的なものとなった。遊技の興も増そうというものだ』

『マ、ス、タァァ……テリ……オン……!!』

　リベル・レギスの背後から、半壊したデモンベインがつかみ掛かった。

　しかしリベル・レギスは、デモンベインの手首をつかむと、ひと息に引き千切った。

『ぐぉ……!!』

　腕の一本を肩から引き抜ぬかれたデモンベインは、空間に膝ひざを突ついた。

『無論、貴公にも礼を言うぞ、覇道鋼造。貴公の存在によって、此こ度たびのサイクルにおいては、わずかながら無ぶ聊りようを忘れることができた』

『……テリ……オ……』

　ガッ―

　なおも立ち上がろうとするデモンベインの首すじを、リベル・レギスが踏ふみつけた。

『だが、遊技は終わった。引き際ぎわを心得よ、覇道』

　さらにリベル・レギスは、デモンベインのむき出しになった胸きよう郭かくに手を突き込み、いくつもの光る泡あわの固まったものを抜き出した。

『余の心臓も返してもらう』

　泡の群れはリベル・レギスの手を離はなれ、胸の中に吸い込まれた。と―紅の機神の全身を覆おおう光が、その強さを増す。

『ふむ……現在の力と形態ならば、父ちち君ぎみを喚よぶまでもない。この場で〝門〟を開き、この世界を終わらせるとしようか』

　ギギ、ギ……。

　リベル・レギスは胸の中央に両手の鉤爪を突き刺さし、その亀裂を割り広げ始めた。

「……なにをする気です!?」

　エイダの疑問に、ＬAが答えた。

（推論：奴やつはリベル・レギスの〝無限の心臓〟を解放し、外なる神々を呼び込む門とするつもりだ）

「それは……どういうことですの？」

（つまり、この宇宙を消しよう滅めつさせるということだ）

「なんですって──そんなことは許しません！」

『無む駄だだ、オーガスタ・エイダ・ダーレス』

　リベル・レギスの巨大な眼めが、比率から言えば豆まめ粒つぶほどの砲ほう弾だん宇宙船を捉とらえていた。

『今の貴公らの記き憶おくにはないことだろうが、これは時を超こえた過去から、何千回、何万回と繰くり返されてきたことなのだ……飽あき果てるほどにな。諦あきらめよ、オーガスタ・エイダ・ダーレス、……余はとうに諦めた』

　リベル・レギスの手にさらなる力がこもり、そして──

「──なに仕切ってんだ、このハゲ」

　そう言ったのは、術マギウ衣ス・ス姿タイルのエドガーだ。

　エドガーは腕を組み、リベル・レギスの顔の前に浮ふ遊ゆうしていた。

「俺を無視するんじゃねえよ」

　片や身長数百メートル、片や二メートル足らず。ふたりの意志持つ者が、そのサイズの差を超えて対たい峙じする。

『ほう、貴公──マスター・オブ・ネクロノミコンか』

　リベル・レギスの眼が細められた。

『余の未いまだ知らぬマスター・オブ・ネクロノミコン……面おも白しろい。では、今度は貴公が世界の命運を賭かけて余と戦おうと

言うのだな？』

「ハッ！　世界がどうのなんざ知ったこっちゃねえが、俺の前でイキがるんじゃねえよ」

（エドガー──無む謀ぼうなまねはよせ！）

　アル・アジフの制止を無視して、エドガーは言った。

「さあ、遊んでやるからなにがしたいか言ってみな！　鬼おにごっこか、プロレスかァ!?」

『いや、それを決めるのは貴公だ』

　リベル・レギスが右手を広げた。その手のひらの上に、赤せつ褐かつ色しよくの球体──火星の幻ヴイ像ジヨンが浮うかぶ。

　と──リベル・レギスは球体を握にぎりつぶした。

　同時に、眼下で火星の地表に亀き裂れつが走り、砂の塊かたまりのように砕くだけ散る。

「なッ──!?」

　さらに、リベル・レギスは左手のひらの上に、青い球体──地球の幻ヴイ像ジヨンを浮かべ、これも握りつぶす。

　七千万キロメートルの彼方かなたで、人類もろとも、地球が粉々に砕け散った。

「てめえ──なにやってんだ!?」

『賭けるものが大きいほうが、より遊技に身が入ろうというものだ』

　そして、リベル・レギスの巨きよ大だいな腕が目に見えぬほどの速さで閃ひらめき、空間をさらった。

　巨木の幹ほどもある指先に、直径二・七メートルの砲弾宇宙船が捉えられた。

『貴公はこの者らから余の目を逸そらそうとしていたようだが──』

　リベル・レギスの指先に、ほんのわずかな力が込こめられた。だがそれは、小さな宇宙船をすり潰つぶすのに充じゆう分ぶんな力だった。

『エド……！』

　エイダの最後の言葉は、鈍にぶい破は壊かい音に掻かき消された。

『―さて、今一度聞こう。貴公は余をどうしたいのだ？』

　ゴッ―！

　エドガーの体を包み込むように、鬼デウ械ス・神マキナアイオーンが顕けん現げんした。塔とうの如ごときその巨体は、しかし、今のリベル・レギスの前では問題にならぬほどに矮わい小しようだ。

『てめえ―ブッ殺す！』

　だが、

（―そうではないぞ、エドガー！）

　アル・アジフが叫さけんだ。

（デモンベインだ！　デモンベインならば、この事態を修正できる！）

『そうだ、貴公のみでは足りぬ。デモンベインの力を使え』

『あァ!?―てめえらの言うことなんぞ聞くかよ！』

　エドガーは〝神しん銃じゆう〟を喚よび出し両手に構えた。全力をはるかに超え、かつてないほどの、おのが生命に関かかわるほどの霊れい力りよくをそこに込める。

（ならぬ、エドガー！　汝なれがここに果てれば、その時こそすべての希望が潰ついえるのだ！）

『ぐ―』

　エドガーは逡しゆん巡じゆんした。

それは一いつ瞬しゆんの、しかし、長い迷いだった。

オーガスタ・エイダ・ダーレスの、そして覇道兼定や子供たちの顔が脳のう裏りをよぎった。

そして──

『──ちッ！』

エドガー＝アイオーンはデモンベインに向けて急降下した。

巨大な骸むくろのように、デモンベインは宇宙空間に横たわっていた。

アイオーンは翼つばさを広げ、デモンベインの頭部の前に滞たい空くうした。

（覇道鋼造、聞こえるか！）

『おい、覇道のジジイ！』

グォン──

低い起動音と共に、デモンベインの巨大な眼めに、わずかな光が宿った。

『……君たち……は……アル・アジフに……今のマスター・オブ……ネクロノミコン……か』

『だったらどうした！　ヘタってんじゃねえぞ！　起きて手伝え！』

『……無理だ……機体は大破し、心臓がひとつ失われ、今ひとつも停止し……魔ま導どう書しよもいない……』

（魔導書の代わりは妾わらわが務める！）

『じゃあ、俺は心臓の代わりだな』

アイオーンの機体が弾はじけるように分解し、一瞬で再構成された。巨大なタンク状の外装の中に、アイオーンの術式中ちゆう枢すう〝アルハザードのランプ〟の出力を強化する増ぞう幅ふく装置が何重にも張り巡めぐらされたその構造は──

『アイオーン──機関エンジン形態!!』

一個の巨大な動力機関と化したアイオーンは、巨大なデモンベインの右胸の、リベル・レギスにえぐり抜ぬかれた穴の中に収まった。機関と機体の双そう方ほうから、生き物のようにチューブが這はい出し、両者が接続された。

『さあ、とっとと立ちやがれ──デモンベイン!!』

+

──これが……これが、デモンベインか……！

デモンベインの内部に分け入りながら、アル・アジフは驚きよう嘆たんした。

自分がかつて見知ったデモンベインは、その巨大な存在の一断面に過ぎなかった。

アイオーンの、結けつ晶しようのように洗練された論理構造とは違ちがう、迷宮の如き、ほつれた糸玉の如き制せい御ぎよ術式の塊かたまりが、現在もなお、力強く、かつ高速に、自らの存在を再定義しながら稼か働どうしている。いったい何万回、何億回、増ぞう殖しよくと再構築を繰くり返せば、このように奇き怪かいな構造物が生まれるのか──おそらく、この鬼デウ械ス・神マキナは、宇宙の寿じゆ命みようをはるかに超こえる、無限の刻を生きてきたのだ。

どうやって？

なんのために？

アル・アジフの問いは、術式の狭はざ間まに深く吸い込まれ、消えていく。デモンベインは、その存在自体が巨大な〝謎なぞ〟の塊だ。

だが、確かに感じるものがある。

邪じや悪あくに対する戦せん闘とうの意志……潰えることのない

無限の闘とう志し！

　──よかろう。

　アル・アジフは思った。

　──妾のすべての術式わざをやろう。その代わり、汝なれのすべての力を貸せ、デモンベイン！

ヴォン──

論理空間の底から力に満ちた波動が湧わき上がり、その呼び掛けに応こたえた。

（クハ……こいつはすげえぜ！）

アル・アジフと共にデモンベインとアクセスしていた、エドガーが言った。

（こいつに比べりゃ、アイオーンはガキの玩具おもちやだな！）

（……気をつけろ……！）

覇道鋼造が告げた。

（現在のデモンベインは、それ自身の意志を持って回転する巨大な──巨大すぎる──超ちよう論理の歯車だ。巻き込まれれば、魂たましいのかけらも残さずに噛かみ砕くだかれるぞ……！）

（面おも白しれェじゃねえか）

（……気をつけろ……私は……もう……もたん……！）

覇道の意志は、デモンベインの巨大で複雑な論理構造の狭間に呑のみ込まれ、やがて感知できなくなった。

（へッ、ゆっくりおネンネしてな、ジジイ）

エドガーは、覇道が手放したデモンベインの主幹操縦術式をアイオーンのそれと同調させた。巨大な魔ま力りよくの流れが、意識を消し飛ばさんばかりの速度と圧力を以もつて、エドガーの体内を流れていく。

（俺たちがチョチョイのパッと片づけてやるからよ──なあ、相デモン棒ベイン！）

+

ヴォオオオオ──！

アイオーンから発したエネルギーは、まずデモンベインの左胸の〝獅し子しの心臓〟に送られ、これを賦ふ活かつした。そして、ふたつの〝心臓〟は互たがいに共鳴しながら出力を上じよう昇しよう

させ、機体を修復していく。

　メギメギメギ──

　破壊された腕うでを再生し、骨格と外装を組み替かえながら、デモンベインは立ち上がった。エドガーの呪じゆ力りよくの影えい響きようを受けたその有様は、神こう々ごうしくも攻こう撃げき的な、左右非対たい称しようの姿だ。

『おお──このような展開は初めてだ』

　マスターテリオンが笑った。

『ふふ……愉ゆ快かいだな、アル・アジフ、それに新しいマスター・オブ・ネクロノミコン』

『御ご託たくは要らねえよ』

　エドガー＝デモンベインは再生した手を顔の前で握にぎった。その拳こぶしに、ぎしぎしと音を立てながら、太いスパイクが何本も生える。

『無む駄だ口ぐち叩たたいてねえで、さっさと死ね』

『これは失礼した』

　リベル・レギスは両手を広げながら、前に突つき出した。

『では、さっそく楽しむとしよう──闘とう争そうを!!』

　ズォウ──！

　右手から九発、左手から九発、計十八発の重力弾だんが、互いの重力に干かん渉しようし合い、複雑な軌き道どうを描えがきながらデモンベインに迫せまった。

『オォッ──!!』

　デモンベインは三対の両手に魔銃を生み出した。

　ドドドドドド──！

　六丁拳銃がそれぞれ三発ずつの呪じゆ力りよく弾だんを発射し、

十八発の重力弾を残らず叩たたき落とした。

　デモンベインはさらに六つの銃口を前方に向け、斉せい射しや。六発の呪力弾は六重螺ら旋せんを描くひとつの流れとなって、リベル・レギスに着弾する。

　と―リベル・レギスは左手を開き防ぼう御ぎよ呪じゆ紋もんを展開。六発の弾丸をひと薙なぎで打ち払はらった。同時に右手を開くと、周囲の空間から暗い金色に輝かがやく光の粒りゆう子しがその手のひらに集まり、金色の剣けんの形に結けつ晶しよう化した。

　リベル・レギスは突とつ進しんした。黄金の剣を振ふりかぶり、デモンベインの頭上に振り下ろす。デモンベインは三本の右腕を掲かかげてそれを受けた。二本の右腕が斬きられて飛び、三本目の半ばで刃やいばは止まった。

　さらに力を込めて押し斬ろうとするリベル・レギスに対し、デモンベインは右足を上げ―

『―アトランティス・ストライク！』

　至近距きよ離りから前蹴げりの形で放たれた必殺の破は砕さい呪法を、リベル・レギスは両腕で防御し、その両腕を粉々に砕け散らせながら、大きく後方に吹ふき飛ぶ。

　デモンベインは斬られた腕を修復した。リベル・レギスもまた、二本の腕を再生する。

　次いで、デモンベインは腕の二本ずつを使って、三基の呪スペ文ル・螺ヘリ旋クスを喚よび出した。

　右左一本ずつの〝神銃〟が、炎精クトウ神格グアの、そして氷霊神格イタクアの威い力りよくを秘ひめた超呪力弾を撃うち放つ。

　そのふたつの必殺攻撃を、リベル・レギスは再び前方に突進することによって避さけた。超威力を誇ほこる神銃とて、懐ふところに飛び込めば当たりはしない。右手にはハイパーボリア・ゼロドライブを起動している。砲ほう撃げきに対するカウンターで必ひつ滅めつ術式を叩き込むつもりだ。

　だが、デモンベインの三組目の腕が構えていたものは―

呪スペ文ル・螺へリ旋クス──神槍形態！

次の瞬しゆん間かん、超威力の斬ざん撃げきによって、リベル・レギスの胴どうは横一文字に叩き斬られていた。

紅あかい下半身が胴を離はなれ、宇宙空間を浮ふ遊ゆうしていく。

通常の状態ならば、それは即そく敗北とまでは言わなくとも、戦力の半減を意味しただろう。しかし、神に等しい力を持つ現在のリベル・レギスにとっては、なにほどのこともない。胴体の切断面から、太い機械の蛇へびのような下半身が再構成され、デモンベインの体に巻きつき、締しめ上げた。デモンベインの全身の装そう甲こうがみしみしと音を立て、ひび割れていく。

だが、デモンベインはシャンタクの属性を強く顕けん現げんさせつつ、その翼つばさにバルザイの偃えん月げつ刀とうの呪法を何重にも乗せた。魔ま刃じんの羽根を持つ鋼はがねの巨鳥と化したデモンベインは、大だい蛇じやの胴を切り裂さきながら脱だつ出しゆつし、星の狭はざ間まへと翔かけ上った。

『──天狼星シリウスの弓よ！』

リベル・レギスは左手に金色の長弓を生み出し、矢を放った。

天を貫つらぬくように飛んだ金の矢は、空間の一点で数百本に分ぶん裂れつし、デモンベインを追って飛び交かった。デモンベインはシャンタクの出力を増して回かい避ひするが。金の矢は各おのおのが意志を持つ生き物であるかのように、デモンベインを追つい尾びし、その体をかすめ飛ぶ。

デモンベインは大きく弧こを描いて反転し、リベル・レギスに向かって加速した。衝しよう突とつの寸前に再び人型の形態を取り、神しん槍そうを振りかぶる。

一方、迎むかえ打つリベル・レギスは天狼星シリウスの弓を両手持ちの武器のように構えた。金色の弓が、巨きよ大だいなハンマーを思わせる〝罪人の十じゆう字じ架か〟に形態かたちを変える。

デモンベインは全ぜん霊れいを込めて神槍を打ち下ろした。

リベル・レギスは全力を以もつて十字架を振り上げた。

神槍と十字架の衝突は激げき烈れつな時空震しんを発生させ、二柱の超ちよう鬼デウ械ス・神マキナを時空の彼方かなたへと弾はじき飛ばした。

そして―

はるかな星の狭間。見知らぬ巨大な星雲を背景とした宇宙空間の只ただ中なかに、デモンベインは放り出された。

―いつ瞬しゆんの見当識喪そう失しつ状態。

『どこだ―ここは―奴やつは―!?』

（下だ、エドガー！）

デモンベインの〝足あし下もと〟から、空間の壁かべを突つき破り、無数の重力弾だんが飛び出した。

反応が間に合わず、数発の重力弾が直ちよく撃げき。両りよう脚あし、右みぎ腕うで、腰よう部ぶ、頭部―機体の七割方が一瞬のうちにこそげ取られる。そしてさらに、第二波が一いつ斉せいに、残る胸部へ―

デモンベインは左手を掲げた。ふたつの心臓エンジンのエネルギーが手のひらに集中する。

（―防御呪紋を―いや―それでは相殺しきれない！）

デモンベインの胸部は超重力の塊かたまりに呑のみ込まれ、素そ粒りゆう子しレベルに分解しつつ消しよう滅めつした。

空間に残されたのは、左腕の肘ひじから先のみ。

その手のひらに、発光する時計の文字盤ばんが浮うかんでいた。

時間操作呪法〝ド・マリニーの時計〟。

ギリリリリ―！

軋きしるような音を立てながら文字盤の針が逆回転し、時間を巻き戻した。

胸部、頭部、右腕、両脚──完全に消滅した機体が、因果律を逆転しつつ再生していく。

同時に、無数の重力弾がデモンベインを撃ち抜ぬいた弾だん道どうを逆に辿たどりながら、空間の一点に吸い込まれていく。

『そこだァッ!!』

デモンベインは瞬時に神槍を組み上げると、重力弾の軌き跡せきを追って足下の空間に突き込み、

『オォラッ!!』

両脚を虚こ空くうに踏ふみ締め、神槍を振ふり上げた。やすスピアに貫かれた魚のように、空間の界面下から、リベル・レギスの巨体が引き上げられる。超斬撃の切っ先は、過あやまたず紅くれないの胸を貫いていた。

ギ──

心臓を仕留められながらも、リベル・レギスは槍やりの柄えをつかみ、反はん撃げきに移ろうとする。

『させるかよ！』

呪じゆ力りよくの波が、デモンベインの全身を螺ら旋せん状に駆かけ上がった。脚から腰、両腕を通して槍の柄、そして切っ先へ──

ヴォッ──!!

結界生成過程も呪力増ぞう幅ふくの口こう訣けつもない、抜き打ちのレムリア・インパクト──呪スペ文ル・螺ヘリ旋クスによって増幅され、方向性を与あたえられた昇しよう滅めつ呪文の渦うずが神槍の柄を中心に竜たつ巻まきのように前方に伸のび、巻き込まれたリベル・レギスの機体は千切れた四し肢しを残して分解した。

『へッ、どうだ！』

（──まだだ、エドガー！）

デモンベインの視線が、千切れ跳とぶ紅い左腕を捉とらえた。その手のひらには、発光する文字盤が──

ギリリリリ──！

先ほどデモンベインがそうしたように、リベル・レギスの機体は時間の反転によって再生した。リベル・レギスを破は壊かいしたレムリア・インパクトの昇滅呪文が、素の呪力に還かん元げんされながら、神槍の柄を通って逆流する。

ドッ──！

全身の魔導機が過負荷に弾け飛び、デモンベインは後方に吹ふき飛ばされた。

『てめえ、この──パクリかよ!!』

『貴公らにできることは、余にもできる……貴公らが力を増せば増すほど、余の力も増していく。そのように、仕組まれているのだ』

リベル・レギスは前方に左手を広げ、文字盤を掲かかげた。

『この呪法なら、余も使い慣れている──このようにな』

魔ま術じゆつ的時計の秒針が、数秒の時間を飛ばした──と、デモンベインの目の前に、リベル・レギスが瞬しゆん間かん移動した。接近の時間を消し飛ばしたのだ。

リベル・レギスはさらに、絶対零れい度どの冷気を宿した右手刀を振りかぶった。一いち撃げき必ひつ滅めつ──いや、百撃必滅。百発のハイパーボリア・ゼロドライブが、同時に打ち込まれる。全身の魔導機を修復中のデモンベインには避さけようがない。

デモンベインは体内速度を極限まで加速しつつ、両脚の空間歪わい曲きよく機構を作動──だが、リベル・レギスは左手をデモンベインに向け、

ギシ──！

デモンベインの時間が止められた──いや、その寸前、デモンベインもまた、〝ド・マリニーの時計〟を展開した左手をリベル・レギスに向けていた。

真っ向から組み合ったふたつの時間操作呪法が、互たがいにおのれに有利な時間の流れを作り出そうと、見えざる手で時空間構造を

つかみ、ねじ曲げる。

　ギ、ギ、ギ……！

　強大なふたつの力に挟はさまれ、ねじられた宇宙が音を立てて軋きしみ、そして、弾け飛んだ。

　そして──

　見たこともない、色ならぬ色しき彩さいに満ちた宇宙に、デモンベインは出現した。

『ちッ、またか……！』

　エドガー＝デモンベインは素す早ばやく周囲を見回した。

　都市か、宇宙船か──デモンベインは巨きよ大だいな人工構造物の上空にいた。

『奴め、あの中に隠かくれやがったか──』

（いや、違ちがうぞ──あれがリベル・レギスだ!!）

　アル・アジフが言うのと同時に、眼下の都市が急激に上じよう昇しようし、同時に上空からも同様の都市が逆さまに下降し、デモンベインを挟み込んだ。

〝都市〟と見えたのは、リベル・レギスの指先の、ほんの表面──リベル・レギスは現在、デモンベインの一万倍もの大きさを持っているのだ。

　上下からのすさまじい圧力が、デモンベインの骨格を軋ませる。

『こんなモン──反則じゃねえのかァ!?』

（この世界は、我々の宇宙よりも現実の拘こう束そく力が弱いようだ──想像し、創造せよ、エドガー！　自らの、より強力な姿を!!）

『こ、う、か……!?』

　ドォッ──!!

エドガーが無意識に選せん択たくしたのは、〝爆ばく熱ねつのイメージ〟。

原子爆発にも似たエネルギーの解放によってリベル・レギスの腕うでを破壊しながら、デモンベインはリベル・レギスと同等の大きさとなった。

『ほほう、やるな』

マスターテリオンが笑う。

『余よ裕ゆうぶるンじゃねえ！』

デモンベインは全身からなおも高熱を発しつつ、リベル・レギスに殴なぐり掛かかった。

リベル・レギスは右腕を再生しながら、その拳こぶしを拳で受け止める。

衝しよう撃げきで、周囲の空間がたわみ、軋んだ。

二体の鬼デウ械ス・神マキナは飛び離はなれ、さらなる力を蓄たくわえ始めた。

リベル・レギスはさらに巨大化し、デモンベインもまた巨大化し、両者はさらに巨大化し、巨大化し、巨大化し──

互いの次なる一撃が衝しよう突とつした時、宇宙がそのエネルギーに耐たえきれず、崩ほう壊かいした。

そして──

彼らが飛ばされたのは、巨大な宇宙だった。

宇宙を崩壊させるほどの質量とエネルギーを持っていたはずの二体の鬼デウ械ス・神マキナが、ここでは分子のひとつにも満たない存在なのだった。

ビリヤードの玉のように互いに衝突し暴れ回る気体分子を避けながら、両者は超ちよう威い力りよくの術式を撃ち合った。

そして―

彼らが飛ばされたのは、遅い宇宙だった。

ここでは時間の流れはタールのように重く、両者の時間操作能力を以もつてしても動かし難かった。

互いの技わざの発生から到とう達たつまでが、はっきりと認にん識しきできる。防ぼう御ぎよも反はん撃げきも、充じゆう分ぶんに間に合う。

そこには〝反応速度〟という概がい念ねんは存在せず、詰つめ将しよう棋ぎのような完かん璧ぺきな戦術のみが勝負を決し得うるのだった。

そして―

彼らが飛ばされたのは、死の宇宙だった。

完全な熱的平へい衡こうを迎むかえ、時間的にも空間的にも完全に安定した、なにも起こりようがない世界だった。

物質は存在せず、エネルギーは存在せず、デモンベインもリベル・レギスも、存在することはできなかった。

だが、彼らは存在によることなく、行動によることなく、通常の宇宙に存在する者には想像すらつかない手段で闘とう争そうを続行した。

そして―

二柱の超機神は大きさを変え、形を変え、術式構造を組み替かえながら、何十、何百、何千という世界を、水面を跳はねる水切り石のように飛び渡わたり、駆かけ巡めぐり、そして戦った。

両者はある時は千本の刃はを振ふるい、ある時は一発の弾だん丸

がんとなった。

　ある時はフェムト秒単位の瞬しゆん撃げきを交こう錯さくさせ、ある時は何十億年もの時間を掛けた、重厚な一撃を衝突させた。

　ある時は剣けん戟げきの余波で次元を震しん撼かんさせ、ある時は砲ほう撃げきの流れ弾だまで空間を破は壊かいした。

　因果の流れを加速し、逆転し、停止し、あるいは消しよう滅めつさせ、無数の宇宙を破壊し、創造し、何度も歴史を塗ぬり替えながら打ち合った。

　そして──

　彼らが辿たどり着いたのは、超時間と超空間を超こえ、超次元を上のぼり詰めた超・超時空間。

　そこでエドガーは、アル・アジフは、垣かい間ま見みた。

　泡あわのように現れては弾はじける無数の宇宙で、

　鎖くさりのように連なる無限の時の輪の中で、

　無数のデモンベインが闘たたかう / 闘った / 闘っていた。

　それらは在り得べき可能性のひとつ。

　それらは選ばれし可能性のひとつ。

　それらは失われし可能性のひとつ。

　血液の流れのように、無限に分ぶん岐きし、循じゆん環かんし、収束する、無数にしてひとつの運命、その一部にしてすべてだ。

　永えい劫ごうの刻のすべてを、永劫を超えた次なる永劫を、無限の永劫の連れん鎖さを──

　魔デモをンベ断イン＝つアート永レータ遠・アエのテル剣ヌムは闘い、闘い、闘い抜ぬいていく。

そして──

+

「──おっと残念、これは千日手のパターンか。じゃあ、この流れはなしだ」

ナイアルラトホテップは、時計をきりりと巻き戻もどした。

+

──時間が逆転する!?

デモンベインやリベル・レギスの〝時計〟より、さらに上位の力。

時間と空間の外、超空間を統すべる超時間を、何者かが操作している。

永劫に等しい闘いの軌き跡せきが、一いつ瞬しゆんにして巻き戻される。

──エドガー、さっそく宇宙船の中へ──

──どうか地球を救ってくれ、エドガー──

──いっしょにやろうぜ、兄貴──

──ならばエドガー、妾わらわは汝なれと契約しよう──

──エドガー──

──エド…──

□□…□□

+

　──夢だったのか。

　暗い、崩くずれた地下室の底で、飢き餓がと酸欠によって衰すい弱じやくした少年が、誰だれにも知られることなく、ひっそりと息を引き取った。

　死の寸前、彼は三つの眼めを持つ黒い鼠ねずみの幻げん影えいを見たように思ったが、それが現実になんらかの影えい響きようを与あたえることはなかった。

　彼の生しよう涯がいには、最初から最後まで、意味と言えるものは一いつ切さいなかった。

EDDY IS NO MORE

エピローグ 在り得ざる魔術師

「あの男の、なにをどう信用しろと言うんだ!?」

　ロンドンの路上で兼定が叫さけぶと、エイダはすました顔で答えた。

「なにもかも、全面的に、ですわ。それに坊ぼつちゃま、ご自分の父親のことを〝あの男〟なんて言うものじゃありません」

「分かった、分かったよ！　僕のほうも納なつ得とくがいった！　確かに君は、覇道鋼造の子供であるということがどういうことか、これっぽっちも分かっちゃいない。それと、もうひとつ――君こそ〝坊ちゃま〟はやめてくれ」

「あら、坊ちゃまは坊ちゃまですわ」

　エイダの切り返しに、兼定が思わず口ごもり――

　ふと、ふたりは同時に顔を見合わせ、あたりを見回した。

　周囲にはなにひとつ変わったことはなく、パブの店頭に置かれたラジオが、流行はやりの歌か謡よう曲を流しているばかりだ。

「あの……今、なにか？」

「いや、僕は別に……」

　ダーレス学園一行は再び歩き出した。

「……なんだろ？」

　列の最さい後こう尾びのオルソンが、首をかしげながら、パブの店頭席を振ふり返った。

「あの辺が、やけに気になるんだよなあ……」

　――その後、一行は予約の時間通りにウェルズ天文台に到とう着ち

やくし、社会見学を開始した。

「火星人ですか？　ええ、私たちも、今探しているところです」

　案内の係員はいたずらっぽく言った。

「当施し設せつでは、通常の天体観測のほかに、火星にアンテナを向けて電波を捉とらえようと試こころみています。それでは、皆みなさんもここで〝火星からの音〟を聞いてみましょう。ひょっとすると、あなたがたは火星人のラジオ放送を聞いた最初の地球人になれるかもしれません──おや、先客がいますね」

　なるほど、電波観測装置にはひとりの中年男性が腰こし掛かけ、熱心にチューニングをしている。

「しまった、こいつは一番乗りを取られてしまったかな？　どうですか、ミスター。火星人はいましたか？」

　案内係が声を掛かけると、男は顔も上げずに言った。

「いや、今のところ見つからないが、万が一ということもある。もう少し──」

「──父さん!?」

「うむ……？」

　兼定の声に振り返ったのは、覇道財ざい閥ばつ総そう帥すい・覇道鋼造その人だった。

「ミスター覇道！」

「やあ、お嬢じようさん。それに……兼定。こんなところでなにをしているんだ？」

「それはこっちの台詞せりふですよ、父さん。行方ゆくえをくらましたと思ったら、こんなところに……いったいどういうことです？」

「いや、これは単なる直感なんだが……なんだか火星という星のことが急に気になってね。この〝火星に最も近い場所〟にいろいろ調べに来たというわけだ」

「それは……はあ、そうですか」

　一いつ瞬しゆん、気まずい沈ちん黙もくが流れ、覇道父子は居い心ごこ地ち悪そうに目を逸そらし合った。お互たがいが、お互いを苦手にしているのだ。

　そこに、

「あら、言ってくだされば調べておきましたのに」

　とエイダが言うと、兼定は尻しり馬うまに乗る形で言った。

「ああ、そう、それですよ。父さん、なんでも自分でやろうとするのはあなたの悪い癖くせだ。その、もう少し……僕たちを、信用してくれませんか」

「ああ、うん、すまない」

　覇道は頭を掻かいた。

「これからは、なるべくそうすることにしよう。とりあえず、もう少しここを調べたら──」

「ミスター覇道」

　エイダが言った。

「坊ちゃまにはいろいろと急ぎのお話がおありのようですわ。それと──そこの体験席は、この時間、うちの子供たちが予約しているんですの」

+

「彼もなかなか良いところまで行ったんだけどね。あれではループを破は壊かいするには至らない。だから、降りてもらうことにしたんだ。──エドガーという魔ま術じゆつ師しは最初からいなかったのさ」

　黒衣の女は薄うすく笑いながら、指から鎖くさりで下げた懐かい

中ちゆう時計をぷらぷらと揺ゆらした。

「まあ、主役を張るにはちょっとばかり役者不足だったというところだね。闘たたかいを劇的なものとするためには、もっともっと物語の力が必要だ。涙なみだあり、笑いあり、恋こいと友情、冒ぼう険けんに復ふく讐しゆう！　大導師殿どの、僕は腕うでによりを掛けて、君のために最高の闘いを演出してあげるよ」

「さて―はたして、すべてが貴公の思おも惑わく通りに行くものか、どうか」

　金色の闇やみを瞳ひとみに宿した少年は、物もの憂うげに言った。

「貴公が消し去った者もまた、未いまだこの世界に影えい響きようを与あたえ続けている。死を超こえる死を以てしてもなお、彼奴きやつらの闘いを終わらせることはできないのだ」

「おやおや、大導師殿はずいぶんとロマンチストだねえ」

「あるいは、貴公がな」

　大導師マスターテリオンと〝這はい寄る混こん沌とん〟ナイアルラトホテップは、敵意と皮肉の混じった冷笑を交かわし合う。

+

「契けい約やくってのは、こうやンのか？―なんかテレるな、おい」

「あ？　俺か？　俺の名前は―」

□□？

　浅いまどろみの中、ふと浮ふ上じようした記き憶おくの断だん片ぺんに、アル・アジフは首をかしげた。

自分の記憶にないマスター・オブ・ネクロノミコン。

アル・アジフはあらためておのが記憶を走査した。だが、やはり該がい当とうする主マスターの姿はなく、その名を思い出すこともできなかった。

夢か―アル・アジフはそう結論した。

書物である彼女も、時として夢を見る。

いや、あらゆる物語の登場人物は、書物の夢の産物であるとは言えないだろうか。

+

はたして、存在しなかった男は、現実の世界に影響を与え得うるものだろうか？

エドガーはもういない。

彼を知る者、その存在を記憶の片かた隅すみにすら留とどめる人間は、もはやひとりもいない。

だが―ある時。

覇道邸てい地下で待機中の鬼デウ械ス・神マキナデモンベインの腕に、ほんのわずかな呪じゆ力りよくの波が走った。

それは、鋼鉄の歯車の奥、デモンベインの魔ま術じゆつ的構造の最さい奥おうに蓄ちく積せきされた力の余波だ。

エドガーはそこにいる。

〝失われたマスター・オブ・ネクロノミコン〟の存在の痕こん跡せきは、邪じや悪あくな運命の流れに抗あらがう大いなる意志の一部となるのだ。

〈了〉

あとがき

どうもどうも、お久しぶりです、古橋秀之です。

またデモンベインの外伝をやらせていただきました。前回の『機神胎動』がパソコンから家庭用ゲーム機への移植に合わせての企き画かくだったのに対して、今度の『軍神強襲』は新作ゲーム＆アニメ化合わせということで、いや、大した勢いですなあ。

で、前回は一回こっきりのつもりであとのことは考えてなかったわけですが、せっかくもう一度機会をいただけたので、前回できなかったことをやろう、と思いまして。

具体的には〝派手〟〝勢い〟といったあたり。

前回は「渋しぶめの線で行こう」という狙ねらいがあったのですが、反面、デモンベインにしてはちょっと地味かな、という部分もありました。というわけで、今回はあまりストーリーを分散させずに、アクションまたアクションで行けるところまでカッ飛んでみようと。

舞ぶ台たいを宇宙に求めたのはそのためもあって、宇宙で戦うと足下の被ひ害がいとか気にする必要がないのがいいですね。下手すると地球も割りかねないような連中だけに、地元（アーカムシティ）じゃ危なくて全力が出せない。

ちなみに今回のメインのネタは〝火星人〟。具体的にはＨ□Ｇ□ウェルズの『宇宙戦争』なわけですが、一八九八年の発表当時、ウェルズがこの作品に込こめた最大のワンダーというのは「地球人が万ばん物ぶつの霊れい長ちようとは限らない」という視点。原題のThe War of the Worldsというのも、我々地球人類の認にん識しきする〝世界〟と、それ以外のもうひとつの〝世界〟の間の戦い、というニュアンスを含ふくみます。──と、実はこれ、クトゥルー神話の基本設定に近いんですよね。クトゥルーにも宇宙人みたいなのがよく出てくるし。

　というわけで、火星人はクトゥルー的にアリ！　そういやタコだしな！　と考えた昨年、ちょうど『宇宙戦争』のリメイク版映画が公開になりまして、合わせて原作の文庫版が書店に出回ったりして、資料探しに大変助かりました。

　宇宙旅行の手段としては、ジュール・ヴェルヌの『月世界旅行』をパクり、もとい参考にしました。ウェルズ作品にも月旅行モノはあるんですが、ここは〝砲ほう弾だん宇宙船〟の、勢いのあるイメージが欲しかった。巨きよ大だい火器を振ふり回す今回の主人公（？）、エドガーともよく馴な染じむし。

　また、登場人物は前作から続投のエイダを始め、外伝オリジナルの人ばっかりなんですが、原作に絡からむ人物として、覇道鋼造の息子〝覇道兼定〟が登場します。覇道瑠璃のパパですな。

　この人、ゲーム本編ではにすでに亡なくなっている上に名前も出てこない非常に影かげの薄うすい人物なのですが、世せ襲しゆうとはいえ覇道財ざい閥ばつの総そう帥すいを務めていたくらいなので、やはりそれなりの人物だったのでしょう。しかし、魔ま術じゆつ師しというわけではなかったようだし、覇道鋼造もそっち方面にはそんなに深入り（ガンガン魔導書読ませたりとか）はさせなかったと思われる──というわけで「常識的な立場から財閥を切り盛りし〝魔と戦う者たち〟をサポートする」といった人物像が想像できます。

　本書の時点では、年ねん齢れい的にもルックス的にも主役を張ってもおかしくない立場なのですが、いざ書いてみると、場面場面での言動がやはり地味。エイダやエドガーがなにか言うたびに、

「な、なんだって!?」

　と合いの手を入れる驚おどろきキャラになってしまいました。

　いや、好きなんですけどね。地味な人。

　最後になりますが、今回の原げん稿こうもえらいこと遅おくれてしまって、関係者の皆みな様さまには大変ご迷めい惑わくをお掛けしました。どうもすみません。

執しつ筆ぴつ開始時には「イラストのＮｉ　　さんが新作ゲームやアニメ化関連の作業で多た忙ぼうで、スケジュールが取れないかもしれない」といった懸け念ねんがあったのです

が、蓋ふたを開けてみれば、Ｎｉ　　さんの体が空いてもまだ私は本文を書いていたという。しかし、おかげさまでまたしても新キャラを主としたイラストを大量に描かいていただけて、作品のためには幸運だったかな、と……社会人としてはダメダメですが。

ちなみに後半は角川書店様の会議室に通い詰つめて作業していた

のですが、担当編集さんや、Ｎｉ　　さんや原作の鋼屋ジンさんに「面おも白しろいですよ！　続きも楽しみですよ！」と終始励はげましていただきました。こんなに手の掛かるノヴェライズ作者というのもなかなかいませんが、大変恵めぐまれていることです。ありがとうございました。というか、やっぱりスイマセン。

そんなこんなで、時間は掛かりましたが、どうにか書き上がってよかったよかった。

楽しんでいただけると幸いです。

Ｐ．Ｓ．

あ、そうそう、五月末に出た新作ゲームの『機神飛翔デモンベイン』、実は私、担当さんに「作業が終わるまで預かっておきますので……」と言われてまだ触さわっていないのですが、資料としていただいたシナリオを読むと、『機神胎動』のオリジナルキャラだったマスター・オブ・ネクロノミコン・アズラッドがけっこう出ずっぱりで活かつ躍やくしていて、なんともうれし恥はずかしいですね。

こうなると欲が出てきて、今回のエドガーも『機神飛翔』の家庭用移植かなにかのおりに隠かくれキャラで出ないかしらん、などと思ったり……。

古橋　秀之

解説

鋼屋　ジン

仰ぎよう天てんした。

本書を読み終わった貴方あなたもまた、今の自分と同じ想おもいを共有しているに違ちがいありません。

荒こう唐とう無む稽けいは『デモンベイン』の本質なれど、さらなる荒唐無稽を以もつてこれを迎むかえ撃うつのがフルハシ流。たとえば『ブライトライツ・ホーリーランド』に登場する巨きよ大だい仏像、あるいは『タツモリ家の食卓』における特とつ攻こう貴族ギルガガガンドス驚きよう異いの戦せん闘とう法、またあるいは『超妹大戦シスマゲドン』の超家兄妹等々、読者の度ど肝ぎもを抜ぬく大仰なギミックは古橋秀之氏の得意とするところです。

今回の『軍神強襲』もまた「火星人の地球侵しん略りやく」という突とつ飛ぴな発想から端たんを発します。ＳＦの古典的名作として知られ、昨年にはスピルバーグによって映画化されたＨ□Ｇ□ウェルズの『宇宙戦争』が書かれたのが一八九八年。また全米を震しん撼かんさせたラジオドラマ『火星人襲来』事件が一九三八年と、なるほど年代的にはデモンベインの舞ぶ台たいに近いです。科学に空想が満ち溢あふれていた時代。その奇き想そう天てん外がいさは、荒唐無稽な『デモンベイン』と実に良く馴な染じみます。

「デモンベインの宇宙戦争」とでも呼ぶべき今作は、しかしながらその領域を踏とう破はして、否いな、むしろ踏み外して、超ちよう宇宙的な拡ひろがりを見せていきます。荒唐無稽も荒唐無稽、前ぜん代だい未み聞もんの空前絶後、もはや何かの冗じよう談だんみたいなスケールのインフレーションは、ですが同時に神話サーガとでも呼ぶべき深遠に到とう達たつするのです。

さて、神話サーガとは一柱の神や一いつ介かいの英えい雄ゆうによって創つくられるものではありません。人々の心の中にこそ生まれるものです。各おのの々おのがその内に宿す「物語」を語り、また語られることで各々の、無数の、千差万別の「物語」が交じり合い、神話サーガは創られてゆくのです。かつてプロヴィデンスの少年が見た悪夢が、巨きよ大だいな神話となって今もなお発展し続けているように。

『デモンベイン』もまた神話サーガに宿り、また神話サーガを宿しているというのならば、それは独りが―たとえば原作者である自分が単独で創ったものではありません。書き手、描えがき手、語り手、歌い手、演じ手、読み手、聞き手……無数の「物語」の交差によって創られたものなのです。

そのような想いを込こめて、自分（ニトロプラス）は『斬魔大聖デモンベイン』（あるいは『機神咆吼デモンベイン』）の後日談にあたるＰＣゲーム『機神飛翔デモンベイン』を製作しました。このゲームは『デモンベイン』に関かかわった多くの人々の影えい響きようを受けた物語なのです。

その最も端的な例として、古橋氏による外伝小説第一弾だん『機神胎動』とリンクしている点が挙げられます。『機神飛翔』では過去のマスター・オブ・ネクロノミコンであるはずのアズラッドが登場し、九郎やアルと轡くつわを並べて戦います。

また『機神飛翔』をプレイしていただいた皆みな様さまは既すでにお気づきかと思いますが、本書『軍神強襲』もまた『機神飛翔』とリンクしています。

古橋氏のおかげで『デモンベイン』はかくも豊かな物語に育ってくれました。

無論、古橋氏だけではありません。ＴＶアニメ版『機神咆吼デモンベイン』をはじめとして『デモンベイン』の物語は無数の枝へと分ぶん岐きしていきます。そしてその枝の一本一本に無数の人々の、無数の想いが実ります。それは直接的であれ間接的であれ、互たがいに影響を及およぼし合い、次の新たなる物語を創り出す糧かてとなるのです。

この、総すべての物語を繋つなぐ巨大な輪こそが壮そう大だいな神話サーガそのものです。我々は皆、その中を生きているのです。

ほんの少しだけネタバレになりますが、本書の終しゆう盤ばんで古橋氏は冷れい酷こくにも「最初から最後まで、意味と言えるものは一切なかった」と断じます。しかし、そのように断じておきながらラストの一文で「そこにいる」と強く訴うつたえています。

然しかり。人の「物語る」意志もまた消えることはありません。

語り継つぐ者がいるかぎり。聞き届ける者がいるかぎり。

動く者がいるかぎり。見守る者がいるかぎり。

彼がいるかぎり。彼女がいるかぎり。

私がここにいるかぎり。貴方がそこにいるかぎり──

『デモンベイン神話サーガ』の紡つむぎ手たちに、ありったけの感謝を。

カバー・口絵・本文イラスト / Ｎｉ

カバー・本文デザイン / タケウチユタカ + ｆｏｃｏ

(C) Nitroplus 2003, 2006

斬ざん魔ま大たい聖せいデモンベイン

軍ぐん神しん強きよう襲しゆう

原作：鋼はがね屋やジン（Nitroplus）

著：古ふる橋はし秀ひで之ゆき

平成25年12月1日　発行

(C) Nitroplus 2003, 2006, Hideyuki FURUHASHI 2006

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『斬魔大聖デモンベイン　軍神強襲』

平成18年8月1日初版発行

発行者　山下直久

発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

03-3238-8745（営業）

編集　角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見1-8-19

03-3238-8694（編集部）

http://www.kadokawa.co.jp/

BOOK☆WALKER